ディスカバリーで殴り込む

ホワイト・フェザー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんかいきなり死んでしまった男がいろいろな世界をディスカバリーに乗って殴り込みに行くお話

※注意

・亀更新になるかもです

・基本ご都合主義です

・ガバ設定です

・作者がディズカバリー大好き人間でただただディスカバリーが暴れる作品です

・不快に思われた方はブラウザバックをお願いします

目次

プロローグ ―― 1
Call of Duty：Infinite Warfare
1：ファースト・コンタクト ―― 4
2：今後の方針 ―― 8
3：未来を変える為に ―― 16
4：よーしパパ火星で暴れちゃうぞー ―― 21
5：遊撃隊として ―― 28
6：火星急行 ―― 36
7：運命を変える ―― 44
8：次の作戦は？ ―― 51
9：最後の作戦 ―― 57
10：最後の作戦（地球サイド） ―― 66
11：後片付け ―― 72
12：旅立ち ―― 79
幕間
インターバル ―― 86
アベンジャーズ／インフィニティ・ウォー
1：俺らこんな世界嫌だ～♪ ―― 90
2：話をしよう ―― 98
3：何なんだ、あいつは… ―― 108
4：アベンジャーズ、再集結 ―― 116
5：出撃 ―― 125
6：救出任務 ―― 133

7：待ち伏せ ―――――――――― 141
8：正々堂々戦おう（棒 ―――――――――― 148
9：タイタン地上戦 ―――――――――― 153

プロローグ

突然だがどうも俺は死んでしまったらしい。いつも通りブラック企業から終電で帰宅して自宅で風呂に入っていたはずだったんだが…

「俺、神。お前、間違えて死んだ。ソーリー」

「えぇ…」

目の前で土下座している片言で話す白髪のおっさん曰く、俺の部屋の隣に住んでいるニートのおっさんが本当は死ぬ予定だったらしい。でもなんかの手違いで俺が死んでしまったとか。

「ちなみに俺はどういう風に死んだんだ？」

「湯船で、心臓発作。発見時、ぐちゃぐちゃ。警官、ゲロ吐く」

「うわぁ…」

典型的な孤独死のパターンやないか！　俺まだ３０代だったのに…親孝行とかしてないし。すまねえ母ちゃん。しかも湯船で死んだから溶けてスープみたいにって…そりゃ警官も吐くわ。

「で、俺はどうなるんだ？」

「手違いで、死んだ。詫びが、必要。だから、転生」

「おおお！」

転生！　俺の好きなやつだ。

「転生特典みたいなのは制限あるのか？」

「ない。好きなの、言う」

ないのか。ならば…

「スタートレック：ディスカバリーに登場した『ＵＳＳディスカバリー』が欲しい。３２世紀の時点での武装とシールドを備えた上で、俺が次に行く世界でもワープや胞子ドライブが使えるようにしてくれ。もちろん１人で操縦ができるように補助のＡＩも積んでね。あと俺の体にクマムシのＤＮＡを取り込んで、俺自身が『航海士』として動かせるようにして欲しい。ジャンプ時に起きる身体的負担はかからないようにね。遮蔽装置も標準装備でよろしく。それと筋肉モリモリの健康体で頼む。一生病気にかからないやつで。とりまこん

な感じかな」
　俺はＵＳＳディスカバリーが大好きなんだ。今までの艦と違う胞子ドライブによるトランスワープ技術がかっこよすぎて鼻血が出るレベル。ちなみに胞子ドライブとは正式名称『活性マイセリウム胞子転移ドライブ』のことだ。宇宙空間とその裏側の亜空間に独特なネットワーク網を張り巡らせる宇宙植物マイセリウムの性質を利用して、艦を一瞬だけ『マイセリウム空間』に沈ませ、ネットワーク網のある別の場所まで瞬間移動させるというとんでも技術。ワープエンジンも亜空間も使わない、スタートレックにおいてはこれまで登場したいかなるトランスワープとも一線を画す異様な技術なんだよね。最初に見た時はそりゃもうびっくりしたよ。
　胞子ドライブはわずか数ｋｍの距離から遥か５００００光年もの距離まで、マイセリウムネットワークさえあればどこにでも瞬間移動できる。そう、瞬間移動だ。これは強い。あのＵＳＳヴォイジャーでさえ、瞬間的に出せる最高ワープ速度がワープ９．９７５（光速の５７５４倍）だから、本当に胞子ドライブはチートだよなぁ、と思いながら見ていたよ。
「わかった。あと、重要なこと、ある。次の世界、ポイント制」
「ポイント制？」
「原作介入、すると、ポイント、もらえる。ポイント、色々なこと、出来る」
　神によると原作に介入するとポイントがもらえて、そのポイントで色々と出来るらしい。カタログを見たが確かに色々と出来るな。拠点やら武器やら技術やらを買えるみたい。重要なのは原作で死ぬキャラを救ったりするとがっつりポイントが貰えるんだとか。モブキャラでもいいらしい。
「なるほど理解した。で、俺はどの世界に行くんだ？」
「これで、決める」
　おいおいルーレットとかやめてくれよ…
「ここ」
「ん？」

「いってらー」
「ちょっ」
　文字が小さくて読めなかったしいきなり落とし穴に落ちるしふざけんなこの野郎!!

Ｃａｌｌ　ｏｆ　Ｄｕｔｙ：Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｗａｒｆａｒｅ

１：ファースト・コンタクト

「おっ？」

落とし穴に落ちたと思ったら何故か椅子に座っていた。そして目の前に広がるのは親の顔よりも見たあの光景。ディズカバリーの艦橋だった。

「すげぇ！　これはすげぇや！」

よく見ると自分の服装も変わっていた。グレーをベースに指揮官を示す赤色が肩掛け帯のようにワンポイントに入る３２世紀の制服デザインだ。階級は大佐になっている。コムバッジは縦長の楕円形で、通信・翻訳・ＧＰＳ機能に加えて、転送装置とトリコーダーも兼ねているやつだ。コムバッジを開くと氏名が表示された。

「おいおい、この名前なのかよ…」

ジェームズ・Ｔ・カーク。長い歴史を持つスタートレックシリーズの最初の主人公。それが転生後の新たな名前になっていた。あの伝説の艦長の名前をもらうとか重圧がやべーんですけど。でもまあやるしかないか。

「さて、どうやって動かすかな…ＡＩ君いる？」

「おはようございます、艦長」

爽やかな男性の声ですぐに返答が来た。女性の方が…いや、やめておこう。

「おはよ。なんて呼べばいい？」

「特に名前は決まっていません。艦長が決めて下さい」

「では君は今からデータだ。よろしくな、データ」

秒で決めた。スタートレック：ピカードに登場した時はびっくりしたし、その最期に感動した。

「では艦長、ご命令を。現在本艦は太陽系小惑星帯内のケレス軌道上にて遮蔽装置を使用した状態で待機しています」

「わかった。胞子ドライブにてジャンプを行う。目標は月軌道。ブラック警報」
「了解です、艦長。ブラック警報発令。胞子ドライブ起動準備」
第1船体の回転ギミックが動くと同時にあの独特な警報音が響き渡る。この警報音がとても好きだ。生で聞けるなんて最高過ぎる！
「ジャンプ後にシールド出力を最大、武装の準備を。念の為だ」
「了解です、艦長。胞子ドライブ、準備完了しました」
「よし、ジャンプ！」
船体から離れたワープナセルがパイロンに寄り接続し、艦全体がきりもみ回転して瞬間移動する。外から見てみたいけどそれは無理か。

駆逐艦タイガースの集中砲火によりＳＤＦの空母アレスは木っ端

微塵に吹き飛んだ。これでＳＤＦからムーンポートを奪還して艦隊が再建可能となった。ニック・レイエス中佐はその爆発を眺めながらリトリビューションに針路を向けた。
「任務完了だ、タイガース。ＳＣＡＲは帰投…」
　そこまで言った時、突然新たな艦艇がリトリビューションとタイガースの目の前に出現した。
『なんだあの船は!?』
『ＳＤＦの新手か！総員攻撃準備！』
『タイガースは射撃準備完了！　いつでも攻撃可能だ！』
　しかしレイエスにはどう見てもこの船がＳＤＦとは思えなかった。艦の形状も色も、今までのＳＤＦ艦艇とは異なる部分が多すぎる。
「全部隊、攻撃中止！繰り返す、攻撃はするな！こいつはＳＤＦじゃない！」
『レイエス、ならこいつは一体何なんだ？』
　副官のソルター少佐に聞かれるも即答できないレイエス。分からないなら聞くまでだ。
「ゲイター、全周波数帯で通信準備。あの不明艦とコンタクトを取りたい」
『了解しました、サー。どうぞ』
「こちらＵＮＳＡリトリビューション臨時艦長のニック・レイエス中佐だ。所属不明艦、通信に応答せよ」
　しばしの沈黙の後、返答が来た。だがその返答に誰もが首を傾げる。
『こちら惑星連邦宇宙艦隊所属、ＵＳＳディスカバリー。艦長を務めるジェームズ・Ｔ・カーク大佐だ。突然近くにジャンプしてしまい申し訳ない。そちらに被害等は発生しているか？』
　惑星連邦？　宇宙艦隊？　一体何の事を話している？　レイエスは混乱しつつも会話を続ける。
「いや、こちらは特に被害はない。大丈夫だ」
『そうか、良かった。ところでＵＮＳＡとは一体何を示す略称なのだろうか？初めて聞いたので教えて頂きたいのだが』

「こちらも惑星連邦や宇宙艦隊といった名称を初めて聞いた。一体どういう組織なのだ？」
『あー…もし良かったら会って話す事はできないだろうか。お互い認識に差があるようだし』
「そうだな…上司に確認を取る。カーク大佐、少し待っていて欲しい」
『わかった』
　通信を切ったレイエスは思わず頭を抱えたくなった。ＳＤＦに奇襲攻撃を受けるわ、艦隊は壊滅するわ、変な宇宙船がやってくるわ、もう勘弁してくれと心の底から思った。
「中佐…頑張って下さい」
「そこは助けてくれるんじゃないのかイーサン!?」
「ジョークです」
　エンハンスド・タクティカル・ヒューマノイドであるイーサンがサムズアップしていた。

　転生先がＣａｌｌ　ｏｆ　Ｄｕｔｙ：Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｗａｒｆａｒｅの世界ってマジ？

2：今後の方針

とりあえず艦隊長へ状況を報告しリトリビューションの艦橋に戻ったレイエスとソルター。タイガースからフェラン艦長もシャトルでやってきた。

『レイエス艦長。カーク艦長からの会談要請だが私の権限で許可する。ただし会談場所はリトリビューションとする。あと私もオンラインで同席するぞ』

「了解しました、艦隊長。ではカーク艦長に繋ぎます…こちらレイエス艦長。カーク艦長、応答願います」

『こちらカーク。感度良好だ』

「会談の要請ですが許可が降りました。ただリトリビューションまで来て頂く必要があります」

『了解した。そちらの…あー、艦橋に行けばいいのか？』

「そうです。シャトル等の小型艇でこちらの格納庫に来て頂ければ案内を…」

『それには及ばない、レイエス艦長。直接艦橋に飛ぶ』

「えっ？」

次の瞬間、見慣れない制服を着用した男が青い光と音を放ちながら艦橋に出現した。数秒間、誰も動けなかったがイーサンがすぐに銃を向ける。慌ててソルターやフェラン艦長が銃を構えるも、男は気にせず周りを見て笑顔を浮かべていた。

「これがリトリビューションか。素晴らしい宇宙空母だな。やはり大型艦はロマンがあっていいものだな」

男は独り言を言っていたが、ようやく自分に向けられた銃に気付いたのか、両手を上げながら自己紹介を始めた。

「ジェームズ・T・カーク大佐。ＵＳＳディスカバリー艦長だ。突然お邪魔して申し訳ない。レイエス艦長はどちらかな？」

レイエスは武器を下げるように指示してから一歩前に出て手を差し伸べた。

「ニック・レイエス中佐。ＵＮＳＡリトリビューション臨時艦長です。どうぞよろしく」
「こちらこそ」
　がっちりと握手を交わしてから会議室に移動する。お互い知らないことだらけでどこから話すべきか悩むが…困った時は艦隊長へ丸投げすればいい、とレイエスは考えていた。

　なんでやねん。俺が言いたいのはこれに尽きる。Ｃａｌｌ　ｏｆ　Ｄｕｔｙ：Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｗａｒｆａｒｅの世界とかマジかよ。俺もゲームやったわ。ＳＤＦは退けたけど決してグッドなエンディングではなかったよなぁ。なら俺がその未来を変えるんじゃ！
　というわけで会議室にてこちらから惑星連邦や宇宙艦隊について軽く説明をした。当然向こうはポカンとしている。そりゃそうだよな。向こうは地球と火星でバトってるのに、こちらは星間連邦国家だし、人がワープしてくるし。まさに宇宙猫状態って感じだろう。向こうの状態はゲームと同じらしい。ちょうど月をＳＤＦから奪還したところだそうな。
『ついてはカーク艦長、リトリビューションとタイガースと共にＳＤＦと戦ってもらえないだろうか。こちらは戦力が枯渇状態なのだ』
　レインズ艦隊長がお願いしてきたけどちょっと突っぱねてみようかな。素直にハイハイ言うのもどうかと思うし。
「艦隊長、私も宇宙艦隊の士官としてやっても良い事と駄目な事があります。宇宙艦隊一般命令第1条において、自衛目的以外での武力行使をしてはならない事になっております。そもそも本艦はリトリビューションやタイガースのような純粋な戦闘艦ではありませんから」
「待って下さい、ではディスカバリーはどういう種類の船になるので

すか？」
　フェラン艦長が驚きながら聞いてきた。意外とフェラン艦長って美人だよな…
「ＵＳＳディスカバリーはクロスフィールド級先端技術実験船です。艦内で約３００種類もの科学実験に対応可能な設計となっています。一応自衛用の武装はありますが」
『そこを曲げてなんとかならないだろうか…報酬等は今決めることは出来ないが何かしら用意させてもらう』
　報酬か…もらえないよりマシだしもらっとくか。
「そうですか…ちょっと通信をさせて下さい。データ？」
『はい、艦長』
　コムバッジを使ってデータを呼び出す。
「ディスカバリーの艦長として、ここに宇宙艦隊憲章第１４条３１項の適用を宣言する」
『了解しました、艦長』
　これで問題ないな。にしてもこの条項ズルすぎないか？そろそろ変えるか消すかしたほうがいいと思う。あとセクション３１滅ぶべし。
「カーク艦長、今のは？」
「宇宙艦隊憲章第１４条３１項というのは今の状況を吹き飛ばす事ができる素晴らしい条項です。これであなた方に協力する事が可能となります」
『それはどんな条項なのだ？』
　俺は精一杯ニヤリとしながら伝える。
「非常事態においてはいかなる規則を曲げることも許される、というものです」
『それは実に素晴らしい条項だ。うちも真似したい限りだ』
　レインズ艦隊長も思わずニッコリ。というかレイエスや周りのみんなもニッコリ。
「ただそちらの指揮下に入る、となりますと後々問題になってしまうので、ＵＮＳＡと惑星連邦間の一時的な同盟関係という形でお願いで

きますか？」
『もちろんだ』

　そんなこんなでＵＮＳＡと同盟を結んだので早速作戦会議。リトリビューションは単艦で海王星にてテイクンダガーオプスを実行。ディスカバリーはタイガースと共同で木星周辺の敵パトロール艦隊の殲滅を行う事になった。ゲームにはなかったやつだな。まあディスカバリーの性能を確認したいんだろう。あとレインズ艦隊長の要請で、ＵＮＳＡの軍隊であるＳＡＴＯの士官・下士官の計４人がディスカバリーに同乗する事になった。お目付け役なのかどうかはわからんがね。
「では皆さん、私の左手を掴んで下さい。私が良いと言うまで絶対に離さないで下さい」
　４人組がしっかり掴んだ事を確認してから俺はディスカバリーの艦橋へジャンプした。
「はい、いいですよ。ようこそディスカバリーへ」
「はぇっ!?もう着いた!?」
「凄い最先端って感じしかしない」
「一瞬でワープとか…ありえない」
「指はある目もある耳も聞こえる玉と息子も無事…ヨシッ！」
　みんなテンパってるけど落ち着かせてから椅子に座らせる。艦長席の両サイドに２人ずつ。そしてタイガースに通信を繋げた。
「フェラン艦長、合流地点はガニメデ軌道上で問題ないか？」
『その通りだ、カーク艦長。合流後、エウロパ方面から接近してくる敵艦隊に攻撃を行う。それでは現地で』
「了解した」
　タイガースがジャンプの準備に入る。ゲームで見たけどあの放熱板っぽく展開する装置がかっこいいよなあ。正式名称とか気になる。ゲイターはワープの事をファストトラベルって言ってたっけ？
「あのカーク艦長、我々は座っているだけで良いんですか？」

４人組のリーダーであるキャシー・コール少佐が聞いてくる。彼女はジュネーブのＵＮＳＡ本部に務める技術士官だとか。
「そうなりますね。皆さんはお客様って事なのでくつろいでいて下さい。そうだ、飲み物はコーヒーでいいですか？」
「え？え、ええお願いします」
「データ、レプリケーターでコーヒー５つ」
「かしこまりました」
すると数秒でコーヒーが出来た。全員の椅子の肘掛けに砂糖とミルク付きで出現したもんだから４人はびっくり仰天。
「えっえっえっ」
「飲んでいいですよ。うん、美味いな。コーヒーはキリマンジャロが一番だ」
「椅子からコーヒーって…」
そんなことしていたらタイガースがジャンプした。俺も行かないとね。
「データ、胞子ドライブにてジャンプを行う。目標はガニメデ軌道。ブラック警報」
「了解です、艦長。ブラック警報発令。胞子ドライブ起動準備」
例の警報が鳴ると４人はビクビクしているけどそんな揺れないから大丈夫なのにねー。
「胞子ドライブ、準備完了しました」
「よし、ジャンプ！」

「間もなくスリップを抜けます。出現まで３…２…１…」
タイガースがジャンプを終えて最初に見たのはディスカバリーの姿だった。先に出発したのに何故ディスカバリーがいるのかフェラ

ンには理解できなかったが、その辺の技術を詳しく理解するのは技術屋だけで十分だと判断し頭の片隅に追いやった。
『ディスカバリーからタイガース。ロングレンジスキャナーに微弱なコンタクト。ＳＤＦのレーダー波と一致した。数は…5、いや6。そちらでも確認できるか？』
　モニターを見ると確かに6つの反応が確認できる。ＳＤＦの巡洋艦2隻、駆逐艦4隻からなる例のパトロール艦隊だ。
「確認した。派手に歓迎してやるとしよう。タイガースがミサイルを斉射、その混乱に乗じて突撃としよう」
『了解した。幸運を』
　全速力で敵艦隊に向かいながらタイガースから次々とミサイルが放たれる。エウロパ方面から接近してきたＳＤＦ艦隊は突然のミサイル攻撃に混乱しつつも迎撃を開始した。そこにタイガースとディスカバリーが一気に接近し攻撃を開始。フェラン率いるタイガースは連装速射砲を5基１０門、各種ミサイルを装備している駆逐艦だ。まずはミサイルで被害を受けた巡洋艦に攻撃を集中する。機関部にダメージを受けた巡洋艦はその攻撃に耐える事ができず、真っ二つに爆散した。
「良いぞ！次は…」
「艦長！ディスカバリーが！」
　操舵手の悲鳴のような大声でフェランはディスカバリーを見た。なんとディスカバリーは3隻の駆逐艦からの集中砲火を受けているにも関わらず、一切ダメージを受けた様子がないのだ。フェラン達が唖然としている前で、仕返しと言わんばかりにディスカバリーの船体から発射された複数の青いレーザー光線のような攻撃で駆逐艦3隻は一瞬で轟沈。更に発射された青色の光弾のようなものが巡洋艦に命中。爆発の後には巡洋艦の欠片すら見つからなかった。残った駆逐艦は逃げようとしたが、タイガースによって撃沈された。
「なんという船だ…あれで自衛用の武器しか搭載していないと言うなら、惑星連邦の戦闘艦は一体どんな化け物なんだ？」
　フェランの言葉に返事できる者は誰もいなかった。

「とりあえず攻撃を受けてみよう」
「「「なんて？」」」
　俺の言葉に４人組がハモる。だってディスカバリーのディフレクター・シールドがどれだけ耐えれるか、きちんと確かめておかないといけないじゃん？多分大丈夫だと思うけど念の為ね。
「コール少佐、ＳＤＦの駆逐艦や巡洋艦にはエネルギー兵器は搭載されていないんだろう？あのバカでかいオリンパス・モンスは例外として」
「そうですけど無茶すぎませんか!?」
「大丈夫だって。こっちにはシールドあるから。というわけでデータ、シールド出力を最大、武装の準備を」
「既に完了済みです、艦長」
「流石だ、データ」
　そんなことを言っていたら駆逐艦３隻の攻撃が始まった。多少揺れるのは分かっていたけどシールド出力の低下率はそこまでひどくないね。オリンポス・モンスのＦ―ＳＰＡＲはヤバそうだけど。
「データ、反撃開始だ。駆逐艦３隻にフェイザー発射！続いて奥の巡洋艦に光子魚雷を１発発射！」
「了解、攻撃を開始します」
　船体各所に設置されたフェイザー・アレイから青い光が駆逐艦に突き刺さった、と思いきや一瞬で爆散。うっそだろお前、駆逐艦弱すぎませんかね。もうちょっと耐えてもいいんじゃ…あ、巡洋艦が文字通り消えた。うちの光子魚雷って威力どんだけなんだよ。３２世紀パネェ。
「ちょちょちょちょっと待って待って待ておかしいおかしい」
　コール少佐がバグってる。大丈夫じゃない、問題だ。
『カーク艦長！そちらの武装や防御手段についてちょっと教えてほしいんだが!?』

フェラン艦長もテンパってるし。まあまあ落ち着いて。コーヒーでも飲んでリラックスしてさ。

『飲んどる場合かーッ！』

すんません。

その後フェイザーと光子魚雷、シールドについて簡単に説明した。フェイザーとシールドは理解出来ないからいいとして光子魚雷の説明をしたらドン引きされた。え、ただの反物質弾頭が搭載された魚雷なのに。スタートレック界ではごく普通の兵器ですわよ。ちなみにもっと威力のある量子魚雷も載せてまっせ。ちょっと試しに撃ってみようかな…え、駄目？

なおこの戦闘詳報を聞いたレイエス達リトリビューション組はドン引きし、レインズ艦隊長は割と本気でディスカバリーに単艦で火星攻撃をお願いしようとしたとか。

3：未来を変える為に

さて木星でＳＤＦを叩き潰した訳なんだが今後の事を考えよう。変えるべき未来として、

①オマー軍曹を助ける
②タイガース沈没の阻止
③ＳＤＦの地球侵攻阻止＆レインズ艦隊長を助ける
④リトリビューション沈没の阻止

がある。この内①と②がほぼ同時期に起きるので阻止が難しい。でもやらないとね。その為にいくつか仕込みが必要なんだよね。

「フェラン艦長、次の任務は弾薬補給後に命令が来るという認識で問題ないか？」

『その通りだ。間もなく補給艦とのランデブーポイントへ向かうところだ』

ならちょっと散歩に行こうかな。

「了解した。こちらはちょっと設備点検をしてから合流する。あとで会おう。カーク、アウト」

「カーク艦長、点検って嘘ですよね？何をするおつもりで？」

コールは目の前に座るカークにそう聞いた。今まで彼女が学んできた技術の全てを凌駕する船を操るこの男は、例によってまたとんでもないことをサラッと言い始めた。

「ちょっと散歩に行こうと思ってね。行き先はまだ行ってない惑星と準惑星計７箇所だよ」

「……」

もう驚かん、と思っていた自分を殴りたい。まだ行ってない惑星と準惑星ってことは水星、金星、火星、土星、天王星、海王星、冥王星を意味する。小学生でも分かる事だ。でも火星って。火星って！

「あの…」

おずおずと手を上げたのは部下の１人、マイケル・ヒロセ大尉。日

系アメリカ人で航空力学の専門家だ。
「火星ってＳＤＦの本拠地なんですけど」
よく言ってくれたマイケル！そのまま言い負かせてやれ！
「もちろん知っているよヒロセ大尉。なーに、戦闘しに行くわけじゃないんだ。ちょっとした散歩だよ」
散歩感覚で行く場所じゃないんだよな、とマイケルは小さい声でつぶやく。駄目だったか…
「散歩（殲滅）ですね、わかります」
なんて物騒な事を言うのはアントニオ・ヘルナンデス大尉。海兵隊員だったが、負傷が原因で技術部門に移籍してきた。
「で、本当のところは何をやるんですか？」
私より胸があってイケメン婚約者もいる（羨ましいなんて思っていない）キャシー・シンクレア大尉が聞くと、カーク艦長は椅子から立ち上がった。
「じゃあ一緒に見に行こうか。ついてきてくれ」

よく考えたら艦橋以外の場所に行くの初めてじゃね？
「まずここだけどみんなの個室ね。部屋の中はこんな感じだ」
大きめのベッドにデスク、クローゼット、風呂とトイレ。ごく普通のビジネスホテルみたいだな。
「えっこんな豪華な部屋使って良いんですか？」
「良いよ。やっぱ人間疲れや眠気があると駄目だからね、きちんと休める環境は必要でしょ」
その後格納庫へ行くと準備が完了していた。
「艦長、これは？」
「これはステルス探査機。これを太陽系にばら撒こうという訳だ」
直径２メートルの球体、これがデータに作らせていた探査機だ。小型化した遮蔽装置と各種観測機器を内蔵している。これを大量に投下してＳＤＦの動き、もっと正確に言うとオリンポス・モンスの動きを捉える。これで原作でオマー軍曹が戦死してしまう水星でのダー

ククオリーオプスに介入できる…はず。
「ＵＮＳＡもＳＤＦもジャンプシステムは同じだ。こいつはそのジャンプを観測し、データを送ってくれる。もちろん光学観測も可能だよ」
「素晴らしいですね。何か欠点とかやるんですか？」
　コールが探査機を欲しがっているけど欠点あるんだよなあ。
「見ての通り球体でステルス重視で作ったから太陽光パネルがない。だから内蔵電源が切れたら自爆する仕組みになっている」
「ちなみに電源はどれくらい持つんですか？」
「１ヶ月」
「あー…」

　まあそれはともかく早速出発だー。まずは冥王星。公式にはＵＮＳＡとＳＤＦとの間で争われている領域らしいけど非公式には中立地帯として扱われる。どっちやねん。はっきりしてほしいね。探査機１０基くらい放出完了。

　次は土星。ＳＤＦがタイタンを奪ってるからそれなりに敵の艦艇がうろちょろしとるな。でも気にせず全速で探査機をばらまく。
「艦長、敵がめっちゃ近くにいるんですけど見つからないんですか!?」
「大丈夫、遮蔽装置を起動しているから。今までの宇宙艦隊の艦艇に搭載されていた遮蔽装置はタキオン放射や残留反陽子によって見破られる事があったんだが、ディスカバリーの遮蔽装置は最新型だ。発見する事は事実上不可能。例外があるとすればたまたま敵艦の攻撃が当たって一時的に遮蔽が乱れた時ぐらいだ」
　シミターを始めて見た時は『ぼくのかんがえたさいきょうのせんかん』って感じだったな。完璧な遮蔽装置、遮蔽状態でもワープや攻撃が可能、二重シールドにセラロン放射兵器…マジ無敵じゃんね。

　お次に金星。ここはＵＮＳＡの管理下にあり、重水素系燃料を多数の前哨基地に供給している重要なエリアだ。探査機は多めに設置し

ておこう。

次、天王星。ＵＮＳＡとＳＤＦ、どちらの勢力下でもない場所。だからこそ何かをこそこそしたい連中がいるかもしれない。なので探査機を天王星の周りにシュゥゥゥーッ!!

お隣？の海王星に到着。リトリビューションのテイクンダガーオプスは成功した模様。しばらく敵は来ないかもしれないが念には念を入れて配置しておこう。

太陽に一番近い水星。ＵＮＳＡの資源採掘コロニーがいくつかある。ダーククオリーオプスが行われる採掘コロニー、ベスタ３もこの近くにある。ゲーム内ではオリンパス・モンスの攻撃で太陽に向かって飛ばされてしまうが、そうはさせない。ここには３０基ほど、しかも広範囲に設置しておこう。

そして最後は。

「これが火星か」

目の前にはＳＤＦの本拠地である火星があった。流石は本拠地だけあって防衛の為に配置されている駆逐艦、巡洋艦、戦艦、空母は最低でも２０隻は確認出来る。軌道上のタルシス造船所では数多くの艦艇が建造中。更に火星の衛星フォボスには鉄とニッケルの採掘所が、デイモスにはレアメタル採掘所と宇宙港、燃料補給所がある。軍備拡張にはもってこいの環境だな。

「艦長、探査機の展開が完了しました。平行して実施した偵察も完了済みです」

「ありがとう、データ。これで散歩はおしまい…いや待て」

「艦長？」

「データ、探査機を改造した魚雷ランチャーってまだ残っているか？」

探査機作成の過程で色々と試しに作らせたんだった。光子魚雷の弾頭を探査機に入れて爆雷のように運用するタイプとか、魚雷ラン

チャータイプとか。
「魚雷ランチャーは４基残っています」
「よし。量子魚雷を各探査機に４基ずつ装填し、フォボスとデイモスの軌道上に２基ずつ配置しろ」
「了解です、艦長」
　ちなみに光子魚雷と量子魚雷は使えばなくなる。なくなったらポイントで購入できる。木星での戦いで得られたポイントは５０００ポイントだった。ゲームにあったピュアスレットオプスがあの戦いで消し飛んだのが高ポイントの理由みたいだ。カタログを見る限り拠点となる大型移動施設の購入にはまだ足りないな。もっと頑張って原作に介入しないと。
「艦長、魚雷ランチャーの配置が完了しました」
「ありがとう、データ。よし、これで散歩はおしまい！タイガースと合流する」

　この後タイガースと合流してから各地の偵察情報をレインズ艦隊長に提出したら目眩を起こしていた。ＳＤＦの奇襲以降きちんと寝れていないのかもしれないな。健康には気を付けてほしいね。

４：よーしパパ火星で暴れちゃうぞー

目眩から復活したレインズ艦隊長から新たな任務が来た。リトリビューションは天王星にてフェニックスオプスを実行。タイガースは水星及びケレス近辺のパトロール任務。そしてディスカバリーは初めて単艦での作戦に挑む事となった。

ただの作戦ではなく、ゲームにはないオリジナルの作戦だ。作戦名はランダムアタッカー（通り魔）オプス…いや作戦名に通り魔って単語を入れるのどういう事なんよ。作戦エリアは火星。表向きの作戦目標は『ＳＤＦ火星防衛艦隊への威力偵察』となっているが、真の目標はジュネーブ奇襲攻撃の仕返しとコッチ艦隊長の顔面に泥を塗りに行く事である。その為の装備もＵＮＳＡより提供された。

「よーし、いっちょ派手にぶちかますとするか！コール少佐、準備は出来ているか？」

「問題ありません、艦長。いつでもいけます」

更に今回の作戦ではコール少佐と他３名にも役割がある。ＵＮＳＡから提供された装備の運用は彼女達が行うのだ。

「よろしい。ではランダムアタッカーオプスを開始する。データ、火星にジャンプだ」

「了解です、艦長」

ＳＤＦの駆逐艦ヴァリアントは出来たてホヤホヤの新造艦だ。数日前に各種試験を無事に終え、現在は火星周辺のパトロールから帰投中である。艦長以下乗組員達の士気は高く、ＵＮＳＡの連中を叩き潰せる日を楽しみに待っている。明後日から金星方面に出撃し、既に展

開中の空母ヘラスの護衛任務が始まる。我々の戦いはここから始まるのだ、ヴァリアントの艦長はそう考えていた。
　彼らは良く訓練された優秀な軍人だ。多数の友軍艦が展開している本拠地が目の前にあるが、油断などは全くしていない。いつどんな事が起きても我々なら直ちに対応出来る、そう信じていた。
『呼ばれてないけどジャジャジャジャーン！ちわーディスカバリーでーす！』
　瞬きをする間に見たこともない大型艦が突然目の前に出現し、それとほぼ同時に全周波数帯からテンション高めの男の声が大音量で鳴り響き、更に青色のレーザー光線がヴァリアントの船体を文字通り真っ二つにした。この間たった3秒。ヴァリアントの乗組員達は一体何が起きたのか、あの船は何なのか、それらを考える間を与えられる事なく、宇宙の藻屑と化したのであった。

『なんだあの船は!?ＵＮＳＡか？』
『駆逐艦ヴァリアント、及びネレイダム轟沈！』
『総員戦闘配置！あの船を撃沈しろ！』
『スケルターを早く上げろ！』
　うわー敵さん大慌てだな。いいぞ、混乱は俺達の味方だ。全部沈めてやる、と言いたいところだが作戦通りに行こう。
「全速前進！目標はタルシス造船所だ。針路上の敵艦及び敵機はフェイザーで蹴散らせ。他は後回しだ、雑魚は放っておけ！」
「了解です、艦長」
「少佐、射程に入ったら合図をくれ」
「了解しました、艦長」
　ＳＤＦの駆逐艦やＡ―ＪＡＫカッター、更には艤装途中の巡洋艦が艦載砲や機銃、ミサイルでディスカバリーを撃沈しようとするが、まあシールドあるから攻撃効かないんだよね。
『こちら駆逐艦アルシア！機関大破！我操舵不能！救援を……！』
『くそったれ！アルギレ爆沈！スケルター隊の被害甚大！』

『アスクレウスが吹き飛んだ！もっと攻撃を集中しろ！』
　これで5隻は沈めたから、ここからはフェイザーの威力を落として機関部のみを破壊する。スケルターやＡ―ＪＡＫカッターなら威力を落としても一撃で破壊できるから問題ない。敢えて沈めずに身動き出来ないようにしてやろう。
「艦長、射程に入りました！」
「了解だ、少佐。データ、例のミサイルを造船所に向けて発射だ！」

　ＵＮＳＡから提供された装備とは特殊なミサイルだった。大量の針状機械が時限信管により造船所手前で炸裂し、円錐状に撒き散らすフレシェット弾である。これで何をするかと言うと、造船所及びＳＤＦのメインフレームへのコンピュータウイルス攻撃だ。
　針状の機械は造船所のあちこちに突き刺さる。そこから造船所のシステムにウイルスが流し込まれる。あっちの部屋では重力が切れたり、こっちの部屋では生命維持装置が、反対側ではいきなりハッチが開いてダイナミック宇宙遊泳を、といった感じである。控えめに言って地獄だね。
　更にＳＤＦのメインフレームから重要な情報を引き出してＵＮＳＡに送信する。現在使用されている暗号、部隊の配置情報、今後の作戦方針等々。ＵＮＳＡにとってはどれもこれも宝の山だからね。
「少佐、これで作戦目標を完了したと言えるかな？」
「十分過ぎる戦果です、艦長！帰投しましょう」
「いや、もう1つやることがある。手伝ってくれ」
　これは俺が個人的にやりたいやつなんだ。コッチ君にメッセージを送らないとね。

サレン・コッチ艦隊長は目の前の惨状に愕然としていた。まさかＵＮＳＡが母なる火星を攻撃するとは思わなかった。損害報告は目も当てられないレベルでひどいものだった。駆逐艦ヴァリアント、ネレイダム、アルシア、アルギレ、アスクレウスの５隻が沈没、駆逐艦４隻、巡洋艦２隻が大破、更にスケルターも５０機以上が撃墜された。しかも造船所経由でＳＤＦのメインフレームがウイルス攻撃でめちゃくちゃになった。復旧にどれだけの時間が掛かるか検討もつかない。これだけの被害をたった１隻の船が生み出した。

（一体ＵＮＳＡはどんな船を建造したのだ？スパイの情報にはこんな形状の船はなかった。リトリビューション、タイガースとは明らかにデザインや兵装が異なる…）

オリンパス・モンスの艦橋でそんな事を考えていると通信が入る。

『艦隊長、通信ブイのようなものを発見しました。内部スキャンの結果、ウイルス等は確認できませんでした。映像ファイルが１個あります。再生しますか？』

「今すぐ再生しろ」

再生すると男が映っていた。ＵＮＳＡではない、見慣れない制服を着ている。艦橋もＵＮＳＡの軍艦には見えない。

「イエーイ！コッチ君見てるー？今から君の大事な火星を俺達が…あー、ごめん！もう吹き飛ばした後でしたー！」

オリンパス・モンスの艦橋は静まり返っていた。画面の男は気にせず続ける。

「いやーＳＤＦの船って弱いね！あっという間にドカンよドカン。もっと頑丈に作った方がいいんじゃないですか～？てか疑問なんだがあのスローガンってどういう意味なん？なんだっけ…Ｍａｒｓｅｎｅｍａｇｒａだったっけ？まあいいや」

※Ｅｎｅｍａｇｒａ（エネマグラ）は前立腺マッサージ器具の名称です。

ニヤニヤしながら話す男はここで真顔になった。

「でも、怒っちゃ駄目だよ？だってコッチ君、ジュネーブや月でひどい事したもんね？軍人はもとより、民間人も容赦なく殺しまくっていたもんな？だったら文句言えないでしょ？人が嫌がる事をしてはいけません、って子供の頃教わらなかった？まあ君の幼少期はどうでもいいとして」

男はカメラに近付いてドスの利いた声で静かに言った。

「いいかボッチ君。あ、コッチ君。今君に何が出来るか教えてあげよう。そんなに難しくないから大丈夫。実にシンプルだ。ＳＤＦはＵＮＳＡに対して無条件降伏しろ。それが出来ないなら、次会う時にお前は死ぬ。それだけの話だ」

カメラから男が遠ざかる。

「最後になるが自己紹介を。私の名前はジェームズ・Ｔ・カーク大佐。惑星連邦宇宙艦隊所属、ＵＳＳディスカバリーの艦長だ。ＵＮＳＡ所属ではないからな！よく覚えておけよ。あ、最後にもう１つ。オリンパス・モンスが火星にジャンプしてから１５分が経過するとフォボスとデイモスが吹っ飛ぶからよろしく。まったねーー！」

動画の再生が終わるのとほぼ同時にフォボスとデイモスが光った。カークが配置していたステルス魚雷ランチャーから量子魚雷が各衛星に４基ずつ発射されたのだ。

ディスカバリーに搭載されている光子魚雷の威力は３００アイソトン。２５アイソトンの光子魚雷１基で大都市が数秒で壊滅する。そんな反物質弾頭の光子魚雷よりも更に威力が高いのが量子魚雷だ。真空エネルギー反応爆発を引き起こす弾頭となっている。そんな物騒な代物を４基も撃ち込まれたフォボスとデイモスは、文字通り粉々に砕け散った。破片が四方八方に飛散したせいであちこちで被害報告が上がる。

そんな中、コッチの部下も、Ｃ１２ロボットも、全員が無言だった。人間はもちろん何故かロボット達も一種の共通体験を味わっていた。エネルギーを最大にチャージしたオリンパス・モンスのＦ―ＳＰＡＲに狙われてるＵＮＳＡの連中というのは、多分こういう心境なのだろう、と。どう考えても助からない武器に狙われている恐怖感。彼らはそれを痛感しまくっていた。

コッチは自分の感情を制御しようとしていた。コッチは常日頃から『死は恥ではない！』と言い切る程の冷酷かつ残忍な性格であり、ＳＤＦの広告塔としての役割も果たす高いカリスマ性の持つ男なのだ。そんな人間が感情に流されてはいけない。

しかし彼もまた１人の人間だった。目の前のモニターに映る、満面の笑みを浮かべながら横ピースをしているカークと名乗る男を見て、コッチは無意識に拳銃を抜いていた。部下が止める間もなくコッチはモニターにマガジンに装填されていた全弾を撃ち込んだ。

使い物にならなくなったモニターを見て、ようやくコッチは口を開いた。

「報復だ！復讐だ！あの船に死を！あの男に死を！火星を、我々を怒らせた事を後悔させてやれ!!」

「はい、カット！」

「よーし！人を煽るのって楽しいな～。手伝ってくれてありがとね、

少佐」

帰投する前にこんな事をしていたカーク艦長とコール少佐であった。

５：遊撃隊として

ランダムアタッカーオプスの後、地球軌道上でリトリビューション、タイガースと合流し、レインズ艦隊長との４者会議が行われた。
レイエス率いるリトリビューションはフェニックスオプスを見事成功させ、ＳＤＦの空母をＥＭＰに無力化して試作エアシップを強奪してきた。タイガースは水星近辺にて航行中だったＳＤＦの輸送艦を強奪。艦隊再建に必要不可欠の貴重な金属資源を手に入れた。
「艦隊長、今後の方針はどうしますか？」
『うむ。最初はリトリビューションにはディーコンオプスを実行してもらう予定だったが、それよりも優先してやって欲しい任務がある。バーンウォーターオプスだ』
土星の衛星タイタンに存在する燃料補給所の破壊任務。確かにこっちの方が優先だよな。ＳＤＦは大損害を受けてしばらく大人しくなるだろうし。まあ化学兵器も十分危険だけどな。この時代の化学兵器ってどんなやつなのか気になる…前世だとサリンとかＶＸガスとかノビチョクとかが有名だったな。時代が進んでいるこの世界だともっとえげつない化学兵器が作られてそう。
タイガースは引き続き哨戒任務にあたるとのこと。リトリビューション以外に運用可能な唯一の戦闘艦だが、所詮は駆逐艦だから出来る事は限られる。仕方ないね。
『カーク艦長、ＳＤＦは今後どのような行動を起こすと思う？意見を聞きたい』
会議の最後の方でレインズ艦隊長に話を振られたので返事をする。
「火星の復讐に燃えるＳＤＦが取る戦術は２つのはずです。１つは被害の復旧、戦力の回復に務めるべく戦闘を避ける。ＳＤＦの勢力下にある土星はもちろん、各地に展開中の部隊から戦力を引き抜いて火星の防備を固めるのではないかと」
『それが道理だな』
「もう１つは、感情に任せてディスカバリーを捜索、その途中で見かけたＵＮＳＡの拠点や部隊に無差別攻撃を仕掛けるのではないか、とい

うものです。あのプライドが高そうなコッチの顔にこれでもかと泥を塗りたくった訳ですし、ホームベースである火星が今まで見たことがない船に襲撃された。しかもＵＮＳＡではなく惑星連邦という聞いた事がない組織に。相当怒り狂っているでしょう。ただ正直、この線は薄いと思います。イカレポンチなのは分かっていますが、それでもコッチは優秀な人間です。感情に任せて大暴れ、という事はしないでしょう」

コーヒーで喉を潤してから俺は続けた。

「これは私の推測ですが、ＳＤＦがジュネーブ及び月に対する奇襲作戦を行うにあたって、連中は大量のスパイを地球に送り込んでいる筈です。ＡＡＴＩＳの破壊工作を実行したライア中佐もその１人でしょう。優秀な人員を潜入させ、時間をかけてＵＮＳＡの情報を入手、最適な作戦を計画し、最高のタイミングでＵＮＳＡを殴りつける。ここまでは良かったがイレギュラーが起きた。レイエス艦長率いる精鋭のＳＣＡＲチーム及び勇敢な海兵隊の活躍によりＳＤＦは撤退、月の奪還も成功した。そして今まで地球上に存在しなかったこのディスカバリー。その後の戦いにおいてもＵＮＳＡが勝利を重ねています。戦力の差では負けていても勝機はこちらにあります」

『そう言ってもらえて我々も嬉しいよ。火星から回収したデータの解析も進んでいる。その中にジュネーブ近郊に潜伏中のスパイ及びセーフハウスの場所も確認できた。じきにスパイ網は壊滅するだろう』

その後、ディスカバリーの今後の方針について話し合ったが、遊撃隊として動くのがベストだと進言した。コッチ君が俺の予想以上にブチ切れていた場合、薄い線と言った第２の戦術を取る可能性がある。こっちは3隻しかいないのにそんなことされたら、ＵＮＳＡが受けるかもしれない被害は重大なものになる。また地球攻撃なんてされたらたまったもんじゃない。なので敢えて俺が太陽系内を堂々と飛び回ることでＵＮＳＡから目を逸らせる。要は囮だな。レイエスやフェランは反対していたけどレインズ艦隊長の賛同を得て押し

切った。
「それで艦長、ここで一体何をするんですか？」
　ヒロセ大尉が不思議に思うのも道理。彼の目の前にあるモニターは太陽系全体を表すもので、リトリビューションとタイガースの現在位置が表示されている。そしてディスカバリーの現在位置は火星と木星の公転軌道の間に存在する小惑星帯である。
「ちょっとした実験をしようと思ってね。俺も初めてやるから成功するかは不明だが」
　そう言って俺は船を近くにあった手頃なサイズの小惑星に近付ける。
「データ、トラクタービームの操作はこっちでやる。フックの操作は任せたぞ」
「了解です、艦長」
　トラクタービームでゆっくりと小惑星を船の下部に近付ける。それと同時に下部に設置した頑丈なフックが展開する。これは火星での大暴れで大量に稼いだポイントを使用した。
「そのまま…そのまま…よし！捕まえました！」
「よくやった、データ」
　２つのフックでディスカバリーは小惑星をがっちりと掴んだ状態だ。
「小惑星をどうするので？まさかこれを火星に一杯投げつけるとか…」
「しないからね!?え、俺の事何だと思ってるの？」
　するとコール少佐は目を背ける。え、こっち見てよ。
「控えめに言って…常識が１ミリも通用しない人…ですかね？」
「えぇ…」
　…気を取り直して。実験を進めよう。
「それじゃあデータ、胞子ドライブ起動。目標は１０キロ先。ブラック警報」
　今回の実験はフックで別のものを掴んだまま胞子ドライブが使えるのかどうか、というもの。これが出来ればある作戦を実行に移せる

からね。
「準備完了、いつでもどうぞ」
「よし、ジャンプ！」

「データ、どうだ？」
「船体及びフックに異常なし。小惑星は…掴んだままです。内部構造にも変化なし！成功です！」
「よし!!」
　これで作戦はうまく行くだろう。みんなニッコリだな！
「よし、じゃみんな行こうか？」
「作戦目標は？」
「ＳＤＦから空母を貰おうと思ってね、タダで」

　ＳＤＦの空母ケルベロスは天王星第５衛星ミランダの小惑星帯にある秘密乾ドックにて修復作業の真っ最中だった。リトリビューションによるフェニックスオプスの影響で、エンジンがＥＭＰでお釈迦になったからだ。更に言うとスケルター隊の損耗も無視できないレベルだった。
　幸いドックに予備のエンジンパーツは揃っていたので、予定では増援のスケルター隊が到着してから作業を進める筈だった。しかし

ディスカバリーの火星攻撃が全てを変えた。２４時間体制で修復作業を実施し可及的速やかに火星へ帰投せよ、とのコッチ艦隊長からの命令でクルーは大忙しだ。
　優秀なクルーとドック員のおかげで修復作業は佳境を迎えており、このペースで行けば明日には出発できる。ケルベロスの艦長は艦橋でリラックスしていた。試作機を奪われた上、複数のエースパイロットを失った事は大きな損失だ。だがこの借りは必ず返してやる。
　その時艦橋に警報音が鳴り響いた。
「何事だ！」
「機関室より報告！メインリアクター及びドロップリアクターが原因不明のオーバーロードを起こしているとのことです！」
「何だと!?」
　艦長の顔が真っ青になる。メインリアクターは名前の通り艦全体の動力源だ。それと同じくらい重要なのがドロップリアクターだ。こいつが無いと光速を超えたジャンプが出来ない。もし爆発を起こせば間違いなくケルベロスはドック諸共木っ端微塵だ。
「何とかしろ！」
「駄目です！完全に制御不能です！」
「吹き飛ぶまでどれくらいだ？」
「このままでは…あと１５分もないかと！」
「最悪だ、くそったれ！こちら艦長！総員退艦せよ！繰り返す、総員退艦！リアクターが吹っ飛ぶぞ！通信士官、火星に緊急連絡を！救助を要請するんだ！あと乾ドック指揮所に連絡して作業員を退避させろと伝えろ！」
「もうやっています！艦長も急いで下さい！」
　艦内は大混乱に陥るも、皆プロの軍人らしく命令に従い素早く退艦を実施した。１５分程の時間しかなかったが、なんとか時間までに全員の退艦が完了した。爆発から逃れるべく全力で乾ドックから離れる。
「こんな事で艦を失うとは…恥ずかしくて死にそうだ！艦隊長になんとお詫びすればよいか…」

「艦長…」
避難するシャトルの中で艦長は悔しそうに壁を叩いていた。
「もう間もなくかと」
「そうか…」
気力を振り絞って艦長はケルベロスの最期を見ようとモニターに目を向ける。しばらくすると突然青白い光と共にケルベロスが消えた。文字通り。
「……あ？」
「えっ？」
避難したクルーや作業員はしばらくフリーズしていたが、乾ドックそのものは残っていたので大急ぎで戻った。ドックへの被害はなかったものの、ケルベロスは忽然と姿を消してしまった。
「なんでぇ？」
艦長の疑問に答える事が出来る者は誰もいなかった。
ちなみにケルベロス消失事件を聞いたコッチは反射的に隣にいたロボットを素手で殴り壊した。

「艦長、弾薬等の物資補給が完了しました。いつでも行けます」
「了解だ、ゲイター」
リトリビューションは補給を終えて地球から土星へ、すなわちバー

ンウォーターオプスを実行するところだった。そこにディスカバリーがジャンプしてきた。それを見ていたレイエスは、３２世紀の宇宙船は全部あんな感じのデザインになるのだろうか、そもそもどんな世界になっているのだろうかと少し考えた。
　しかしディスカバリーの真下にある物を見て、そんな考えは銀河の果てまで吹き飛んだ。いつの間にかディスカバリーの下部にでかいフックがあり、その先にはＳＤＦの大型空母がぶら下がっていた。よく見たらこの前天王星で無力化したケルベロスじゃないかあれ？
「通信士官、ディスカバリーに繋いでくれ」
「了解です、どうぞ」
「こちらリトリビューション。ディスカバリー、応答せよ」
『こちらディスカバリー。驚かせてすまない。こいつを持ってくるのに苦労したよ』
　持ってくる？戦闘して鹵獲したということか？ただ見た感じケルベロスに損傷は見当たらないな…
「カーク艦長、それは…ケルベロスですよね？」
『その通り。俺の知らない間にＳＤＦが天王星に店を構えていてね。覗きに行ったらＥＭＰでエンジンをやられた中古空母を格安で売りに出していたんだよ。これはお得だと思って買おうとしたんだが、いざ支払いって時に財布を忘れた事に気が付いてな。うっかりしていたよ。で、どうしても欲しかったから万引きしてきた』
　真顔でそんな事を言うもんだからリトリビューションの艦橋にいた全員が爆笑した。空母を万引きってパワーワードすぎる。こんなの笑うなと言う方が無理だ。
「ち、ちなみに乗組員はどうなったんです？」
『それなら大丈夫だ。火星攻撃時にそちらが用意したウイルスを使用して、ケルベロスのリアクターが吹き飛ぶという偽のデータを表示させたんだ。連中慌てて船から逃げていったよ。艦内のロボットも停止済みでシステムは完全に掌握している。軽く調べたがＥＭＰでフライになったエンジンもほとんど修復されているから、色を塗り替えてＵＮＳＡの旗を掲げれば問題ないと思う。どう使うかはレインズ

艦隊長次第だがね』

その後ケルベロスはカーク艦長の言った通り、ＵＮＳＡカラーに塗り替えられて正式に運用される事になった。ＳＤＦの他の空母と異なり、ケルベロスには強力なレールガンが搭載されているので艦隊戦でも活躍してくれそうだ。ただしばらくは乗組員の訓練が必要なので前線に出るには時間がかかるだろう。あと艦名はケルベロスからヘラクレスに変更となった。ギリシア神話においてヘラクレスがケルベロスを捕えて地上に連れ出した話があるそうだ。

「よしゲイター、土星へ行こう。ＳＤＦから燃料を奪い取ってやろう」

「了解です、艦長！」

6：火星急行

万引きしたケルベロスをＵＮＳＡに渡した後、俺は遊撃隊としてどう動くか考えていた。本当なら冥王星まで行ってディープエクセキュートオプスをやろうと思っていた。なんか潜入任務ってかっこいいし。でもコッチのアホが、

『指導者会議などしている暇があったらディスカバリーを探せ！』

みたいな命令を出したのかは知らんが、とにかく会議は中止になったっぽい。くそコッチめ。

遊撃隊の役割はシンプルだ。本隊であるＵＮＳＡ艦隊とは別に行動し、ターゲットを選ばず状況に応じて戦闘目的を変更する。ならどうするか。

「嫌がらせに徹するとしよう」

「具体的には？」

「そうだな…シンクレア大尉？」

「は、はい！」

急に話を振られてびっくりしているシンクレア大尉。コール少佐より胸でかいよな…

「例えば君が事故にあって入院していたとする。早く怪我を治して職場に復帰する為に、毎日リハビリも頑張っている。そんな時いきなり病室に君が一番嫌いな人間が、アポ無しで、しかも毎日無駄話をするだけの為にやってきたらどんな気分になる？」

「それはとてもストレスが溜まりますね、宇宙空間に生身で放り出したいレベルで」

「だよね？それと同じ事をコッチにしてやろうかなと」

至るところに艦艇の残骸が浮遊し、吹き飛んだフォボスとデイモスの破片が漂う火星宙域。軌道上のタルシス造船所はもちろん、火星地表の造船所も全力で新造艦を建造している。コッチ艦隊長の命令で火星は総動員体制で被害の復旧に努めているのだ。

衛星破壊の影響で火星地表にも残骸が降り注いだが、高性能防空システムにより効率的に破壊された為、地表の被害は少ないものとなった。造船所とメインフレームへのウイルス攻撃も何とか復旧が完了した。

タルシス造船所のコマンドセンターで造船所所長と副官が仕事に追われていた。彼らはこの造船所の責任者であると同時に、火星宙域の防衛責任者でもあるのだ。そのせいで普段の数倍の仕事に対処する羽目になった。

「これであと少しだな。一息入れるか？」

「そうですね。これが片付けば家に帰れますよ。あのまずいレーションにはうんざりです」

「まったくだ。嫁の作った料理に叶うものはないからな」

２人はちょっぴりウイスキーを入れたコーヒーをチビチビ飲みながら窓の外を眺める。目の前を冥王星から転属してきた駆逐艦が警戒任務に出撃するのが見える。

「それにしてもあの敵の船、ディスカバリーはとんでもないやつだったな」

「ＵＮＳＡではなく別の所属だと言ってましたね。確か…惑星連邦でしたか？聞いたことがないです組織名です」

「私もだよ。だが今までのＵＮＳＡ艦艇とはデザインはもちろん武装も防御も全てが違う。本当に別組織なのかもしれんな」

「では惑星連邦は我々の戦争にＵＮＳＡ側で参戦してきたと？」
「連中から正式発表はない。だが…」
　そう言って所長はモニターに画像を表示した。３隻の艦艇が映っている。
「これは地球にいる我々のスパイが撮影したものだ。地球軌道上にてリトリビューション、タイガース、そしてディスカバリーが横並びになって航行しているのを確認している」
「そうなりますと我々はかなり苦しい立場になりますね。ＵＮＳＡの２隻だけならまだ何とかなるでしょうけど、１隻で火星をここまで滅茶苦茶に出来る船が敵になるとは…」
「まあな。だがまだ負けが決まっているわけではない。我が艦隊は数を大きく減らしたが直に回復するだろう。それにここだけの話だが…」
　所長は声を落として副官だけに聞こえるように言った。
「２隻目と３隻目のオリンパス・モンス級超大型空母が５日後に配備される」
「それはっ…本当ですか？確かに性能は証明済みですけど、コストやらなんやらの問題で同型艦製造計画はなかったはずでは？」
「俺も今朝聞いたんだが本当だ。元々は評議会が司令部に内緒でこっそり建造していたらしい。自分達の避難船としてな。だが火星攻撃を受けて評議会が情報を開示した、って話だ。司令部の友人に聞いた話だと１隻はここ、もう１隻はコッチ艦隊長率いる第８軌道艦隊に配属されるらしい」
　所長は知らない事だが、評議会は司令部はもちろんＳＤＦ内部にも情報が漏れる事を防ぐ為に徹底的な情報統制を実行していた。極秘造船所には外部との通信システムがない、完全なスタンドアローンになっていた。ネットワークに繋がってないからウイルス感染や情報漏えいが生じる恐れはほぼ皆無だ。評議会直属の部隊が施設を管理している為、セキュリティーは万全だった。故に司令部は気付く事が出来なかった。
「久々に聞いた素晴らしいニュースですね！」

「しかもオリンパス・モンスに搭載されているＦ―ＳＰＡＲ、あれの改良型が搭載されているそうだ。若干デカくなったみたいだがエネルギーチャージにかかる時間が減った上、威力も２０％ぐらい上がったそうだ。これであのディスカバリーなんか一捻りだ」

そんな事を話しながら２人で窓の外を見ていた時だった。いきなり目の前にあのディスカバリーが出現した。

「……んっ？」

「……あれ？」

２人はお互いの顔を見合わせ、もう一度窓の外を見る。やはりディスカバリーがいる。酔いが回った訳ではなさそうだ。

「警報を鳴らせ！総員戦闘配置!!」

「稼働する全ての対空兵器を敵艦に向けろ！」

「どこから来やがった？レーダーには何も反応がなかったぞ！」

「哨戒中のスケルター２個小隊及び駆逐艦２隻がこちらに来ます！到着まであと２分！」

するとディスカバリーから全周波数帯にて通信が入ってきた。

『こちらＵＳＳディスカバリー、艦長のカークだ。コッチ艦隊長はいないのか？』

「ど、どうします？返事します？」

「しないと撃たれるぞ？俺がやろう」

所長はパネルを操作して返事をする事に。

「こちらタルシス造船所コマンドセンターだ。艦隊長はいない」

『どこに行ったんだ？』

「軍機だ。敵に言うわけ無いだろう」

『そりゃそうか。じゃまた３０分後に来るわ』

そう言い残し、ディスカバリーは艦全体がきりもみ回転して瞬間移動していった。

「え…それだけ？攻撃しないの？何の用で来たんだよ！ていうかもう来んなよ！しかもまた消えたし！なんでなんでなんで!?」

「落ち着いて下さい所長！」

３０分後。本当に来た。
『ちわーす、カークでーす。おっと爆竹みたいじゃんそれ。で、コッチ君いる？え、まだ帰ってきてないの？わかった、じゃーね』
前回と同じ場所に出てくると予想して爆雷を設置していたが全く効果はなかった。
「クソッ！」
「駄目でしたか…もっと置きます？」
「やめとけ。置きすぎるとコマンドセンターも吹っ飛ぶぞ」
「確かに…Ｆ―ＳＰＡＲここに配備して欲しいですね」
「いいなそれ。でもエネルギー足りるか？」
「あー…難しいかもですね」

また３０分後。なんかキレてる。
『おいコッチ！出てこいこの野郎!!居留守使ってんじゃねえぞ！そこにいるのはわかってんだ!!』
ゴオンッ!!ゴオンッ!!
「いないっつってんだろ！てか叩くのやめろおおおおお!!!!」
ディスカバリーは分離型ワープナセルをコマンドセンターの上部にガンガンぶつけていた。１５回ぐらいぶつけてから帰った。大した被害はなかったが造船所にいた全員が恐怖した。あいつ頭おかしいだろ！

この後更に４回来た。そのせいで造船所にいる人間は全員ぐったりしていた。駆逐艦による至近距離からの攻撃も効かず、高速で体当たりしたＡ―ＪＡＫは文字通り砕け散った。だがディスカバリーは一切反撃せず、口を開けばコッチを出せの一点張りだった。
『なあ、ちょっと聞きたいんだけどいい？』
今までとは違い、少し申し訳無さそうな感じの声だったので、所長は返事をする事に。
「なんだ？」

『あのさ、もしかしてだけど…今日コッチ帰ってこない感じ？』
「……」
『いや、ほら、３時間待ってあげたんだけど全然来ないしさ、ね！ひょっとして仕事忙しいのかなーなんて、思ったり思わなかったり…』
　所長は疲れていた。本能的に言おうとした。あともう少しで帰ってくるぞ、と。しかし彼はプロの軍人だった。
「…軍機を言う訳がないだろう。用がそれだけなら帰ってくれ」
『そっか…じゃあ今日はこれぐらいにしておくわ。すまんな、時間取らせてしまって。じゃあまた明日の朝来るね！バイバイ！』
「二度と来んなクソ野郎!!」

　こうして所長達の長い一日は終わった。帰投したコッチ艦隊長に詳細を報告すると、
『この距離でも抜けないのか…駆逐艦とはいえそれなりに火力は……Ａ―ＪＡＫの乗員は？…無線操縦…ブースターも付けて加速したのに駄目か……所長、このカークという男だが、具体的に私に会って何をしたいのか、言っていたか？』
「いいえ、艦隊長。こちらからも聞きましたし、必要なら伝言も受けると言ったのですが、直接言うから良いと…」
『そうか分かった。所長、限られた戦力で被害を出さずに良く耐えてくれた。苦労をかけてすまない。だがあと５日で戦局は大きく変わるだろう』
「オリンパス・モンスの同型艦ですね？」
『その通り。ＵＮＳＡもこの事は気付いていない。私が知ったのがこの前だったからな。評議会はもっと我々を信用してほしいものだ…それはともかく、君の提出した造船所にＦ―ＳＰＡＲを設置する案だが私も賛成だ。エネルギーの問題については地上から軌道エレベーター経由で送れば良い』
　だが、とコッチは顔をしかめる。
『残念ながらＦ―ＳＰＡＲの現物がない。２番艦、３番艦への資材が

最優先で回されているから新しく作るにしても時間がかかる。最低でも1ヶ月はかかってしまうだろう』
「そうですか…無い物ねだりは出来ませんな。今あるもので対処しましょう」
『それしかあるまい。だが明日また来ると言っていたんだろう？どう対処する？』
「現有戦力でははっきり言って勝てません。場所が場所だけに攻撃手段が限られますから。かと言って相手の通信を無視した場合攻撃してくるかもしれません。明日は地上攻撃用の大型貫通爆弾等を敵艦直上より投射する予定です。あとは行き当たりばったりになるかと…」
『なるほど…せめて造船所が動かせれば良かったのだが設計上不可能だからな』

そして翌日。所長は叫んだ。
「来ないのかよっ!!!」

「艦長、今日は行かないんですか？」
「今日の火星急行はやめておこうかな」

火星急行とは昨日の作戦の事だ。ネーミングはもちろん東京急行から取った。太平洋戦争時の鼠輸送の事ではなく、冷戦時代から旧ソ連空軍・ロシア空軍の戦略爆撃機、哨戒機、偵察機、電子戦機等が日本の周辺を飛行し、東京に近づく飛行コースで哨戒・偵察を行なうやつの方ね。

「行くって言ったんじゃ？」

「だから行かない。すると連中は肩透かしを食らう。待ち構えているのにあいつなんで来ないんだよおい、って感じでイラッとしない？」

「艦長、性格悪いですね（なるほど、それは確かに）」

「考えている事と言いたい事が逆転してない、コール少佐!?」

7：運命を変える

リトリビューションはバーンウォーターオプスを見事成功させたそうだ。ゲームと同じでレイエスとイーサンが宇宙空間に取り残されたがタイガースが無事に救出した。ここまでは問題ない。

しかし、レインズ艦隊長の命令でリトリビューションはダーククオリーオプスを実行する。ゲームではこの作戦でオマー軍曹が戦死し、更にほぼ同じタイミングでタイガースがオリンパス・モンスに撃沈されてしまう。これを防ぐのが俺の仕事だ。問題はどうやってやるか。とりあえず通信を開いて、と。

「レイエス艦長、こちらカーク。緊急の連絡ですまないが、これから水星に行くんだよな？」

『ええ、その通りです。何か？』

「水星付近に展開中の探査機にオリンパス・モンスの姿が映っていた。今から数時間前だ」

『何ですって!?』

「もう知っていると思うがベスタ3は軌道を外れて太陽に向かって一直線だ。恐らくベスタ3をスイスチーズみたいに穴だらけにしやがったのはオリンパス・モンスだ」

小惑星の軌道が変わるレベルの攻撃って相当だよな。ベスタ3って結構大きめだったし。

『最悪だ…生存者はいるんだろうか…』

「俺が思うにこれはリトリビューションをおびき寄せる罠だ。オリンパス・モンスの火力ならばベスタ3を完全に破壊する事は容易のはず。そうしなかった理由は1つしかない」

『リトリビューションを救出に向かわせている間に何かをする為。となると考えられるのは…まさか!?』

「同じ考えに至ったようだな。オリンパス・モンス、いやコッチの狙いはタイガースだ。万が一救難信号を発信されてもリトリビューションが間に合わないくらい距離を置いた上で、誰にも邪魔されずにタイガースを攻撃するつもりだろう。フェラン艦長には申し訳ないがタ

イガースの火力ではオリンパス・モンスには歯が立たないだろう」
一瞬で16隻のUNSA艦艇を撃沈した超大型空母と駆逐艦では話にならんよな。決してタイガースが弱い訳では無い。オリンパス・モンスが強すぎるだけだ。ゲーム内においても太陽系で一番大きくて最強の艦艇って紹介されていたし。
『だからといって見捨てるわけにはいきません！採掘コロニーにはまだ生存者が救助を待っているかもしれない』
「もちろんだ。だからディスカバリーはしばらくタイガースと行動を共にする。オリンパス・モンスが来なければ良し、来たらタイガースと共同で撃退する。あと今からそっちにちょっとの間お邪魔するよ。今回の任務で使うかもしれないデバイスを提供する」
『デバイス？わかりました』
という訳で、早速リトリビューションの真横にジャンプ。用意した荷物を抱えてリトリビューションの艦橋にピュッと。
「どうも、レイエス艦長」
「…さっきぶりですね、カーク艦長。最初はびっくりしましたけど、なんか慣れましたよ」
「それは何よりだ。でもこれを使うとまたびっくりするかもな」
そう言って俺は両手に抱えた大きな箱を揺らした。

レイエスはカークを格納庫まで案内した。レイブンの横でオマー率いる海兵隊が揃っていた。
「軍曹、こちらはカーク大佐。ディスカバリーの艦長だ。カーク艦長、こちらはオマー軍曹。海兵隊部隊の指揮官です」
「初めまして軍曹。君達勇敢な海兵隊の活躍はレイエス艦長から聞いているよ」
「ありがとうございます、艦長。こっちでもあなたが火星で派手に暴れたニュースで持ちきりですよ。またやるんでしょう？」
「もちろんさ、明日か明後日には火星旅行に行こうと思っていてね。じゃあちょっとこれの説明をするから注意して聞いて欲しい」

カーク艦長が取り出したのは楕円形のバッジみたいなものだった。カーク艦長が左胸に付けているものと同じに見える。
「我々はこれをコムバッジと呼んでいる。このように胸のどこかに付けていればいい。通信・翻訳・ＧＰＳ機能は標準装備、そしてこいつには転送装置が付いている」
「転送？それはどういう…」
ブルックス伍長が聞くとカーク艦長はニッコリしながら、
「こういう事だよ」
と言い、伍長の真横にジャンプした。いきなりの出来事に海兵隊員達はびっくりしていた。カシマ一等兵は口が開きっぱなしだ。
「えっ…ええっ!?」
「いわゆるテレポート、またはワープと呼ばれる技術だな。好きな所に飛べるし、指定した座標にも飛ぶ事も出来る。更に負傷者等を抱きかかえながらでもジャンプ出来る。というかこのコムバッジを装着している人間に触れてさえいれば、一緒にジャンプする事が可能だ。最大で１０キロメートル先まで転送可能だ」
「すごい技術だ…ですがこれ程の物を我々に提供してもいいんですか？」
「大丈夫だ。理由は幾つかある。まず現在のＵＮＳＡやＳＤＦの技術力ではこいつの複製はもちろん構造解析すら不可能だからだ。それにフェイルセーフも付けてある。転送装置は３０回までしか使えない設定にした。使い切ったらコムバッジは自動的に破壊される」
「もう１つ聞きたいことが。何故今回の任務でこれを渡すのですか？」
「諸君の安全の為だ。知っての通りベスタ３はコッチのクソ野…失礼、オリンパス・モンスの攻撃の影響で太陽目掛けてダイビング中。しかも観測データを見る限り地表が数百度、局所的には千度以上の灼熱地獄になっている。日焼け止めを塗っても効果はないだろう」
敵艦隊のリーダーをクソ野郎って…まああいつがクソ野郎なのは当然だが。
「そんな場所で時には遮蔽物がない場所を横切らないといけないだろ

う。そこで転送装置を使えば対岸の施設に素早くジャンプする事ができる。あと生存者がいた場合、迅速に避難させる為にレイブンの格納庫に直接ジャンプ出来れば便利だろう？施設内には可燃物が腐る程あるみたいだし、俺ならそんな場所に長居はしたくないね」
　その後転送の練習をしたがこいつは凄い。最初は若干酔ってしまうが慣れれば便利なものだ。
「３２世紀はとてつもなく科学力が進んだ世界なんですね」
「そうしないと生き残れなかったんだ。惑星連邦は今まで異星人や機械生命体等のとんでもない連中と戦ってきたからな」
　そう言いながらカーク艦長は遠くを眺めた。相当大変な歴史を歩んできたのだろう。

　とりあえず転送装置があればオマーは助かるはず。１００％ではないけど生存率は大幅に上がるだろう。あとは本人の運次第か。
　で、次はタイガースだけどその前にポイント使って何か買おうかな。現在のポイントは３２５０００ポイント。火星攻撃でだいぶ稼げたみたいだ。カタログをパラパラめくっているけどこれといっていい感じのものはないかなー…念の為に防御力を上げておくか。オリンパス・モンスのＦ―ＳＰＡＲだともしかしたらシールドを抜くかもしれん。
　今のディスカバリーのシールドは2重構造になっていて、防御力はあのシミターを超えている。それを更に倍プッシュの４重シールドにポイントで改造した。これならオリンパス・モンスに体当たりされてもあっちが壊れるだろう。
「しかし本当に来るんでしょうか？」
「絶対来る。ヘルナンデス大尉、君が指揮官なら艦載機を搭載した空母と殴り合うのと、駆逐艦を一方的に殴るのだったらどちらがいい

？」
「それはもちろん後者ですね」
　するとデータが警告を発した。
「艦長、火星宙域よりオリンパス・モンスがジャンプしました」
「了解した、データ。シールド最大、武器システム稼働。コール少佐、タイガースに警告を出せ」
「分かりました！」
　程なくして目の前にオリンパス・モンスが出現した。やっぱでかいよな。確か全長９２７メートルだっけ。スケルターが一斉に飛び立つ姿はかっこいいな。
「艦長、タイガースのフェラン艦長より通信です」
「繋げ」
『カーク艦長、これは逃げに徹した方が良いと思うんだが』
「全くもって同意見だ、フェラン艦長。オリンパス・モンスの底部をすり抜けてからジャンプしてくれ。ディスカバリーが殿を務める」
『感謝する、幸運を』
　タイガースが全火力をばら撒きながらオリンパスの底部に向かうのでディスカバリーもそれに続く。底部に武器がなくて良かったよ本当に。あとなんかコッチが通信に割り込もうとしているけどシカトで。
「敵艦載機接近！ハードポイントに大型爆弾らしき物を確認！」
「コール少佐、あれを見たことはあるか？」
「恐らく対地攻撃用爆弾かと！タイガースに命中すれば甚大な被害が出ます！」
「データ、タイガースに向かう敵艦載機及びミサイルを集中的に迎撃しろ。本艦はシールドがあるから問題ない」
「了解です」
　青い光線が宇宙空間を走り、スケルターとミサイルを次々と破壊する。タイガースには近接防御火器がないから仕方ないね。そうこうしているうちにオリンパス・モンスの底部を通り抜けた。あとは逃げるだけ。

「艦長、オリンパス・モンスが旋回。Ｆ―ＳＰＡＲが稼働しています。目標はタイガース！」
「今すぐＦ―ＳＰＡＲの射線に割り込め！フェラン艦長、直ちに緊急ジャンプを！」
『だがそれではディスカバリーが！』
「この船なら耐えられる。行ってくれ！」
『…すまない！操舵手、緊急ジャンプだ！』
　Ｆ―ＳＰＡＲが発射される数秒前にタイガースは戦線を離脱した。
これでヨシッ！
「Ｆ―ＳＰＡＲ、間もなくチャージ完了します！」
「総員衝撃に備えろ！」
　そしてディスカバリーはＦ―ＳＰＡＲの攻撃で宇宙の藻屑に…なるわけないだろ！死んでたまるか！でもやばい衝撃だったな。
「全員怪我はないな？データ、被害報告！」
「第１シールド、出力５％にまで低下！」
「一撃でそこまで食われるとは…やっぱＦ―ＳＰＡＲは強いな」
「Ｆ―ＳＰＡＲ、再度チャージ中です！」
「相手にしてられんな。データ、オリンパスの後方にジャンプ。エンジンを攻撃して動けなくしてからこの宙域より離脱する」
「了解です、艦長」

「被害報告を！」
「艦底部の複数エリアで火災発生！ダメコン班が対応中！」
「撃墜されたスケルター隊の搭乗員をウォーデンが救出中です！」
「左舷エンジン大破！リアクター出力低下！復旧まで１０分！」
「ドロップリアクターは正常稼働中です！」
　コッチは不機嫌だった。リトリビューションを水星におびき出し、その間にタイガースを撃沈する作戦。うまくいくはずだった。ジャンプしたらあの憎きディスカバリーもいた。これは好都合、まとめて沈めてやる。と思ったのだが結果的にタイガースは逃亡、ディスカバ

リーにＦ―ＳＰＡＲを叩き込んだが効果はなく、逆に１２機のスケルターを撃墜された上、エンジンに一撃を受けた。
（おのれディスカバリー！どこまでも我々の邪魔をしやがって！しかも私の通信を無視するとは…許せん！）
　だがコッチには秘策がある。火星に連絡してオリンパス・モンス級２番艦及び３番艦の艦隊配備を早めるように指示を出した。３隻のオリンパス・モンス級が一斉にＦ―ＳＰＡＲをディスカバリーに放てば確実に破壊できるだろう。
（最終的に勝てば問題ない。そして火星が全てを制するのだ）

「艦長、火星からの最新データです」
「ありがとう、データ……ん？」
「どうしました、艦長？」
「あー大丈夫だよ、データ……これは…コール少佐？」
「はい、何でしょう？」
「ちょっと聞きたいんだけどさ…オリンパス・モンスに同型艦が複数いるって話、聞いたことある？」

８：次の作戦は？

ベスタ３に降り立ったレイエス達だったが、地面から炎が吹き出るわ、太陽の熱でこんがり焼けそうになるわ、セキュリティボットが暴走しているわ…それはもう文字通り散々な目にあった。だが結果的にカーク艦長から貰ったコムバッジは大勢の命を救う事になった。

施設間を移動する際にとても役に立った上、施設の奥で発見した生存者を避難させるのに転送装置は最適なデバイスだった。着陸場がすぐ横にあったがセキュリティボットと可燃物で埋め尽くされていた。もしあそこにレイブンを着陸させて避難をしていたら何人かは犠牲になっていただろう。この戦いが終わったらカーク艦長には一杯奢らないとな。

「艦長、おかえりなさい」

「イーサン、何か報告はあるか？」

「カーク艦長の読みは当たりました。タイガースとディスカバリーがオリンパス・モンスの襲撃を受けました」

報告によると、２隻はオリンパス・モンスの底部をうまくすり抜けてジャンプしようとしたが、オリンパスがＦ―ＳＰＡＲを稼働させた為タイガースは緊急ジャンプを実行、ディスカバリーが盾となった。緊急ジャンプの影響でタイガースの機関が損傷し航行不能に陥る。そこにディスカバリーが飛んできて月までタイガースを曳航した、と。

色々とツッコミどころ満載なんだが…まず何でディスカバリーはＦ―ＳＰＡＲの直撃に耐えれたんだ？しかも損傷したタイガースを月まで曳航ってどうやって…なになに、トラクタービームでタイガースを引っ張りながらワープした？ちょっと何言ってるかわかんない。

そして今度はライアの報告書だがまさかトランスポンダーが埋め込まれていたとは…艦隊を侵攻させる為にＡＡＴＩＳを破壊してライア自身も死ぬ、片道切符の特攻作戦。ならそれを逆手に取るのはどうだろう？

ソルター達は俺が考えた作戦はうまく行くと思っていた。イーサンがＳＴＲＡＴＣＯＭに立案した作戦計画を送信したが、すぐにレインズ艦隊長から通信が入った。
『レイエス艦長、君のジュネーブにおける戦略だが…正直に言おう、私は承認したかった』
「と言いますと何か問題でも？」
『うむ。ここからはカーク艦長に説明してもらう』
『レイエス艦長、無事にベスタ３から生存者を救出できたと聞いてホッとしたよ。それはともかく、まずはこれを見て欲しい』
送られてきた映像を見た俺達は固まった。どうみてもオリンパス・モンスにしか見えない船が２隻もいる。あいつらいつのまに同型艦を…
『以前実施したランダムアタッカーオプスで火星宙域に探査機を展開していた。そいつからの映像なんだが、これはオリンパス・モンスによる襲撃から逃げた後のデータだ』
「つまり、オリンパス・モンスは合計３隻いる？」
『おそらくその通りだ。ＳＤＦのメインフレームを覗いた時にはこいつらの存在は確認されなかった。極秘に建造されたのだろう。しかもＦ―ＳＰＡＲがオリンパス・モンスのものより大きくなっている。ただでさえ破滅的な威力のＦ―ＳＰＡＲを改良したとなると…』
「その威力は計り知れないものとなる…」
『そこが問題なのだ、レイエス艦長。こちらの計算ではあの３隻が同時にジュネーブに押し寄せた場合、ＡＡＴＩＳを全力稼働させたとしても敵を無力化する前にＦ―ＳＰＡＲの攻撃を受けるだろう、とのことだ』
オリンパスが１隻ならうまくいく。２隻ならまだなんとかなる。３隻はきつい。
「作戦を練り直すしかないな…」
『…いや、今思いついた別の作戦がある』
「と言うと？」
カーク艦長の作戦はこうだ。基本的には俺の作戦で動く。ただし

ライアの移送には転送装置を使用する。移送時にＳＤＦからの妨害を受ける訳にはいかない。そして作戦開始直前にディスカバリーは火星に飛んで３隻のオリンパスのどれかを引き付ける。それと同時にライアからトランスポンダーを摘出。信号途絶を確認したコッチがオリンパス２隻で地球にやってきたところをＡＡＴＩＳとリトリビューションで破壊する。

『今やディスカバリーは火星人民最大の敵になっている。俺が行ったら必ず１隻は引き付けられるはずだ。肉汁滴るスペアリブを前によだれがとまらない犬みたいになるだろう』

「しかし改良型Ｆ―ＳＰＡＲの攻撃にディスカバリーは耐えることは出来るのですか？」

『多分な。ノーマルのＦ―ＳＰＡＲの攻撃ではシールドが１枚吹っ飛びかけた。改良型がどれだけの威力なのかは攻撃されるまではわからない』

ＳＤＦの駆逐艦や艦載機からの攻撃を全く通さないシールドにそこまでのダメージを与えるとは…やはりＦ―ＳＰＡＲは恐ろしい兵器だ。

『あと確認なのですが、ＵＮＳＡとしてはコッチを生け捕りにしたいですか？それとも生死を問わずですか？』

『…出来れば生け捕りにして裁判にかけてやりたい。ジュネーブのツケを払ってもらわねばならないからな。しかし無理にとは言わない。出来なければ問答無用で排除で構わない』

一体どれだけの民間人、軍人が命を失っただろうか。未だにジュネーブでは街のあちこちで撃墜された艦艇が燃えている。犠牲者の集計すらままならない状態だ。コッチとＳＤＦは許されない事をした。その代償はきちんは払ってもらう。

『わかりました。レインズ艦隊長、この作戦を行うにあたり２つ程お願いしたい事があります』

『何かね？』

『まず全てのＡＡＴＩＳの安全点検を。ひょっとしたらＳＤＦのスパイ達が既にＡＡＴＩＳに爆発物を仕掛けている可能性があります』

『それはまずいな。実は火星から回収したデータを元にＳＤＦのスパイ摘発及びセーフハウス襲撃を行った。一番大きなセーフハウスには1ヶ月の間歩兵1個中隊が全力で戦えるだけの武器弾薬、それにどうやったから分からないがＳＤＦのＡＰＣまで隠してあった。ＵＮＳＡ本部にもスパイが1ダース以上潜入していたのは痛恨の極みだよ。最終的に作戦は成功したが、セーフハウスから大量の爆発物が行方不明になっていた。どこかに輸送されたか、あるいは既に設置済みなのだろう』

「艦隊長、作戦を遅らせてでも点検を行うべきでは？」

『そうだな。ＡＡＴＩＳがなければこの作戦は成立しない。カーク艦長、もう1つは？』

『タイガースの修理を私にやらせて下さい。損傷報告を見る限りすぐに戦線復帰させる事が出来ます』

『分かった。タイガースにはこちらから知らせておこう』

『感謝します』

こうして作戦が正式に決まり動き始めた。これで全ての戦いに終止符を打つ。

まさかオリンパス・モンスに同型艦が2隻もいたとは思わなかったよ。ちょっとＳＤＦズルくない？そういうの良くないと思います。あ、俺もズルい？それは否定できん。

それはともかくタイガースの修理だ。ここでもポイントを使って

購入したアイテムを使う。オマー軍曹とタイガースが無事だったので更にポイントが貰えた。主要人物を助けるとドカンと貰えるらしく、今のポイント残高は１５０万ポイントだ。これで何を買ったかというと。

「テレレレッテレー…これなんて名前だ？」

いやわからん。スタートレック・ピカードのシーズン１第９話と第１０話で登場した機械なんだけど『想像力を使って物を直す機械』としか言ってなかったし。確か神経原子のフィールド・レプリケーターだっけ？まあいいや。これがあればどんな機械もすぐに直るってわけよ。

「これで直せるんですか？」

俺が渡した謎機械をくるくる回しながらそう聞くのはタイガースの機関長。まあ疑うのも無理はない。こんなちっぽけな機械で直るんかいと。

「修理が完了して完璧な状態をイメージすれば直るはずだ。とにかくやってみてくれ」

「わかりました…」

フェラン艦長や他の乗組員が見守る中、機関長は目をつぶったまま謎機械を壊れた機関に近付ける。すると機械が動き出して青い光が機械と接触、壊れた部分がどんどん直り始める。

「嘘だろ…」

「なんだあれ、どうなってんだ？」

「信じられん…」

報告ではドックに入れて１ヶ月はかかると言われていた損傷がたったの１０分で直ってしまった。

「これはすごいな…これで直せないものとかあるんですか？」

「生体組織の修復は出来ないな。基本的にはそれ以外全部直せるはずだ」

普通のレプリケーターは色々と制限があるけどこれはないから都合がいいね。これがたったの１０万ポイントってのはお買い得だったよ。

さて、最後の作戦だけどコッチはどう動くのかな？ゲームで起きたライアの脱走＆ＡＡＴＩＳの破壊は転送装置の使用と安全確認で阻止できるはずだ。問題はコッチがどちらを優先するか。トランスポンダーを取り出した後、ゲーム同様コッチが地球に来るのか？それとも火星に現れた俺と戦うのか？出来れば生け捕りにして裁判で死刑にさせたいから俺が引き止めた方が良いんだよな。引き止め方法だが盛大に煽り散らかしてコッチをブチ切れさせれば何とかなるかな？

「まーやってみないと何とも言えんな。明日が楽しみだ」

9：最後の作戦

ついに作戦の日が来た。ＡＡＴＩＳの点検をしたところ、やはり爆発物がしこたま設置してあったそうだ。しかもライアの輸送に使うはずだった高速道路にも大量の爆発物が設置されていた。ゲームと同じだね。ＵＮＳＡの爆発物処理班が徹夜で取り除いたんだとか。お疲れ様です。リトリビューションとタイガースは地球大気圏内にて待機している。ジュネーブ郊外の空軍基地にもジャッカルが待機しており、ＳＤＦが攻めてきたらすぐに駆けつける事になっている。これなら勝てるでしょ。

『これが最後の戦いになるだろう。通信回線は常時接続状態を維持。レイエス艦長、フェラン艦長、カーク艦長、全員の幸運を祈る』

「了解です、艦隊長。火星を派手に荒らしてきますよ」

よーし、それでは行きますか。ポイント使ってコッチを生け捕りにする方法も考えたしな。

「データ、火星に行こう。これで終わらせるぞ」

「了解しました、艦長」

まさに壮観という言葉がぴったりだ。タルシス造船所所長と副官はコマンドセンターから艦隊を眺めながらそう思っていた。予定よりも早くオリンパス・モンス級超大型空母の２番艦と３番艦が配備されたのだ。コッチ艦隊長率いる第８軌道艦隊には２番艦パヴォニス

が、所長が兼任している火星宙域防衛艦隊には3番艦アンセリスが配備され、既に出撃準備は完了している。
「オリンパス級が3隻揃うのをこの目で見ることが出来るとは思っていなかったよ」
「私もです。しかしこれで我々の勝利は確実なものとなりましたね」
「その通りだな。オリンパスの修理も完了したからコッチ艦隊長はいつでも地球を攻撃できる」
　ディスカバリーとタイガースに逃げられてエンジンを片方やられたコッチは、とにかく怒りを沈めて分析に専念した。スーパースローモーションで戦闘映像を再生したところ、ディスカバリーの船体表面にシールドのようなものがある事を確認した。更にF―SPARが直撃した時の映像ではそのシールドに大きなヒビが入っていた。つまりF―SPARを何回か当てればシールドが消失してディスカバリーを沈める事が出来る。
「それにあれも届いたしな」
「そうですね。これも艦隊長のお陰です」
　タルシス造船所には防衛用の対空ミサイルと対空砲、更にスケルター隊2個小隊が駐留している。そこに新たに設置されたのが小型のF―SPARと言える試作エネルギー対空砲、F―SPAR　AAだ。F―SPARの技術を歩兵火器に転用したのがF―SPAR　Torchだが、これは拠点防衛用に開発されたものだ。威力は通常のF―SPARの半分もないが、速射性は極めて高く3秒に1回のペースで射撃が可能となっている。この兵器が造船所の8カ所に設置された。エネルギーは軌道エレベーター経由で地上から送られるので敵が沈むまで撃ち続ける事ができるのだ。
「しかし問題はディスカバリーに命中させる事が出来るかという点ですね」
「それはそうだ。一瞬で違う場所にジャンプするからなあいつは。なんかズルい」
「いきなり飛んできて滅茶苦茶にしてすぐ逃げるというのはセコいですよね」

「全くだ。あんな風にいきなり来られても困るんだよな」
そう言いながら所長は窓の外にいるディスカバリーを指差す。
「本当ですよ全く。もう少し空気を読んで…えっ？」
「はい？」
２人は窓の外をよく見る。どう見てもディスカバリーです。本当にありがとうございました。
「敵襲だ！総員戦闘配置!!」
「また来やがった！スケルター隊を出せ！」
「Ｆ―ＳＰＡＲ　ＡＡを起動！チャージ中です！」
「コッチ艦隊長へ知らせろ！」

「何!?」
コッチは報告を受けて造船所に目を向ける。確かにディスカバリーがいた。
「絶対に逃がすな！艦隊の全火力を集中して奴を…」
「艦隊長！ライア中佐のトランスポンダー信号が途絶えました！」
「何だと!?」
あの信号が途絶えたという事は、地球に潜入させていたスパイ達がライアを奪還してＡＡＴＩＳも破壊された事を意味する。今こそ地球に侵攻しＵＮＳＡ本部を破壊出来るはずだ。
（だがこのままディスカバリーを放置する訳にはいかん。どちらを優先する？…地球が最優先だがディスカバリーは放置できんな）
「パヴォニスとアンセリスは地球へ急行しＵＮＳＡ本部を瓦礫の山にしてやれ。私はここに残りディスカバリーを破壊する！」
「了解です！」
「戦闘可能な全艦艇及び艦載機はディスカバリーを攻撃せよ！ここを奴の墓場にしてやれ！」

また来ました火星。やっぱオリンパスが３隻もいると圧迫感半端ないな。
「艦長、造船所の各所にＦ―ＳＰＡＲを内蔵したと思われる砲塔が複数確認できます」
「マジかよ、あいつらあれを量産して造船所に取り付けたのか」
それはアカン。とにかくジャンプしまくって攻撃を受けないようにしないとね。その間にオリンパス２隻がジャンプしていった。でもコッチが乗るオリンパス・モンスはそのまま。やっぱりこっちに残ったか。
「こちらディスカバリー。オリンパス級２隻が地球へジャンプした。コッチは火星に残っている。ＡＡＴＩＳで風通りを良くしてやってくれ」
『こちらリトリビューション、了解です。そちらもコッチをボコボコにしてやって下さい』
「もちろんだ。データ、光子魚雷の制限を解除。自由射撃を許可する。だが量子魚雷は使っちゃ駄目だぞ。あと造船所本体は攻撃するな」
「了解しました、艦長」
そこからはもう一方的な戦いとなった。こちらは好きな所に一瞬でジャンプ出来るのに対し、ＳＤＦはそれが出来ないから仕方ないね。オリンパスや造船所からＦ―ＳＰＡＲが飛んで来るけど全然当たらない。造船所の小型Ｆ―ＳＰＡＲの攻撃はそこまで強くないけどすぐに次のビームが飛んでくるから、威力を落として速射性を上げたんだろうな。
「７時方向から駆逐艦５隻が急速接近中！敵艦載機がミサイルを発射！」
「敵駆逐艦隊に光子魚雷を連続発射。艦載機はフェイザーで薙ぎ払え。ミサイルは放置で構わん」
接近する光子魚雷を迎撃しようと敵駆逐艦が対空砲で弾幕を張る。しかし健闘むなしく魚雷は命中し、駆逐艦は蒸発してしまった。敵艦載機もフェイザーの攻撃で次々と火の玉と化した。あのスケルター、

かっこいいよな。ジャッカルも好きなんだけど前進翼のスケルターに惹かれるんだよね。
「オリンパスがＦ―ＳＰＡＲをチャージ中です！」
「Ｆ―ＳＰＡＲの攻撃を受けた直後にオリンパスの真上にジャンプ。例のミサイルを発射して無力化する」
「了解です」
　他の攻撃を受けながらＦ―ＳＰＡＲが命中した結果、ついにシールドが１枚吹っ飛んだ。しかし２枚目のシールドがあるから安心。
「ジャンプ完了、オリンパスは正面です！」
「よし！イオン・ミサイル連続発射！」
　俺がポイントを使って買ったのはイオン・ミサイル。Ｓｔａｒ　Ｗａｒｓ：スコードロンに出てくる兵器でスターファイターに搭載されるミサイル兵器の一種である。イオン・ミサイルは敵のスターファイターを無力化させたり、主力艦のサブシステムを不能にすることができる。これをオリンパス目掛けて大量に撃ち込んでやった。するとＦ―ＳＰＡＲはもちろん対空砲等が次々と動かなくなり、オリンパスの攻撃能力は完全に喪失した。
「オリンパス、沈黙しました！」
「データ、あいつが動けるようになるまでどれぐらいかかると思う？」
「腕のいいダメコン要員がいたとしてもあのサイズの船ですから、どんなに頑張っても２０分は動けないでしょう」
　このままオリンパスに乗り込んでコッチを捕まえて地球に帰るのもありだが…
「艦長、次はどうするんですか？造船所はまだ無傷ですから破壊すべきでは？」
「造船所はちょっと考えがあるから放置でいい。それより軌道上の敵艦艇及び艦載機はほとんど破壊したが敵はまだ残っている。あそこに」
　そう言って俺は火星を指さした。
「これより火星大気圏内に降下してＳＤＦの軍事施設を攻撃する。目標は軌道エレベーター周辺の造船所や航空基地、制限時間は２０分

だ。なお光子魚雷は威力が大きすぎるから使用禁止。フェイザーのみで攻撃する」
「了解しました、艦長」
「コール少佐、君のモニターで敵施設内にいる非武装の民間人をスキャンする事ができる。1人でも民間人がいる施設は攻撃対象から外してくれ。SDFみたいに民間人を殺すような事はしたくないからな」
「分かりました！」
「ヘルナンデス大尉は軌道上に来るであろう敵増援の索敵を頼む。既に土星方面へ救難信号を送っているはずだ。ヒロセ大尉はオリンパス・モンスの監視を。再起動したら知らせてくれ。シンクレア大尉は敵通信網の妨害を。通信施設や目につくアンテナ全てにイオン・ミサイルを撃ち込んでやれ」
「「了解です！」」

火星に住む人々は皆恐怖のどん底にいた。民間人はパニック状態に陥っていた上、軍人もまた怯えていた。なぜこんな事になった、どうしてこうなった、と誰もが思っていた。
地球との戦争開始に皆が喜んでおり、最初の奇襲はうまくいったものの、それ以降はほとんど負けている。しかも数日前に火星軌道上で艦隊が敗北した上、2つの衛星も破壊された。だが今回こそは大丈夫だと人々は信じていた。あのオリンパス級が3隻もいるなら問題はずだ、と。しかし現実は非情だった。軌道上には友軍艦や航空機の残骸が浮かび、オリンパス・モンスは全く動かなくなってしまった。更に見たことがない船が降りてきて、地上軍事施設への攻撃が始まった。
火星が誇る対空防衛システムが全火力を敵艦に叩き込む。航空基

地から出撃した戦闘機から次々とミサイルが発射される。しかし敵艦は全くの無傷であった。敵艦からの攻撃は凄まじく、対空砲や対空ミサイルは燃え盛る鉄と何かのオブジェとなり、戦闘機は残骸となって地上に落下、航空基地は石器時代レベルまで破壊され、造船所は隕石が落ちたようなクレーターと化した。

それを見ていた人々は一斉に都市部から逃げ始めた。上流階級の連中はシャトルで、そうでない者はローバー等で郊外へ逃げ始めた。郊外には大規模なシェルターが備わっており、都市部に住む全員が収容可能となっている。あの敵艦は民間人には攻撃をしてこなかったので、全ての民間人が避難する事が出来た。負傷者はいたものの死者は出なかった。

ある人は言う、あの船は死神か悪魔だと。全員を殺すまで攻撃を止めないだろうと。だが他の人は、地球でやった仕返しを受けているだけだ、と言う。大量の民間人を殺した、その報復だと。

２０分。たったそれだけの時間で７箇所の通信基地、３箇所の航空基地、２箇所の造船所、５箇所の弾薬庫、２箇所の発電所が完膚なきまでに破壊された。後の歴史で『地獄の２０分』と呼ばれる一方的な戦闘であった。

まあこんなもんかな。民間人の犠牲者も出ていないし、軍事施設はだいたいふっ飛ばしたし。ＳＤＦは当分の間動けないだろう。ヨシッ！

「艦長、オリンパス・モンスが動き出しました！」

「まずい…敵の増援が出現しました！駆逐艦７隻、空母が２隻！」

「了解だ。増援を片付ける前にまずはコッチを捕まえる」

「捕まえるといってもどうやって？我々だけで乗り込むんですか？」

「いやいやそれはしないよ。レイエス艦長やオマー軍曹みたいな戦闘

スキルは持っていないからね。ピュッと行ってパッと捕まえてサッと戻ってくるさ」
　ポイントで精神と時の部屋みたいなの買えないかな？それで特訓すれば俺も特殊部隊みたいな戦闘スキルが身につくんだが…もしくは超人血清とか。
「とりあえずオリンパスの真横にジャンプしてくれ。ジャンプ後に艦橋目掛けてイオン・ミサイルを発射。フェイザーでＦ―ＳＰＡＲを破壊しろ」
「了解です」
　折角修理したのにまた無力化される可愛そうなオリンパスであった、まる。しかもＦ―ＳＰＡＲもなくなっちゃったね。
「じゃあ行ってくるわ」
　念の為に用意した宇宙服を着て転送装置でオリンパスの艦橋にジャンプ。するとなかなか悲惨な事になっていた。まず生命維持装置が停止しているから無重力状態。んでロボット達はイオン・ミサイルのせいで機能停止。そしてコッチも空中でくるくる回っていた。
「えっ生きてる？」
「な、なんだお前は!?」
「生きてんじゃん良かった～。とりま寝ててね」
　挨拶代わりにハンド・フェイザーでコッチを麻痺らせ、一緒にディスカバリーに戻る。
「ヒロセ大尉、ヘルナンデス大尉、こいつをちょっと格納庫まで運んでくれ。真ん中に拘束衣があるからそれ着させておいて」
「了解です」
　ちなみに拘束衣は映画『羊たちの沈黙』でハンニバル・レクターが移送される際に装着されたやつだ。コッチを捕まえるならこれしかないと思ってカタログから買っておいた。
「さてデータ、残りの敵を殲滅する。蹴散らしてやれ」
「了解です。蹂躙という言葉の意味を教えてやりましょう」
　５分後にはオリンパス・モンスと敵増援艦隊も宇宙の藻屑になり、残っているのは造船所だけとなった。これでＳＤＦもおしまいだな。

とりま報告入れておこう。
「こちらディスカバリー。オリンパス・モンス、敵主力艦隊及び敵地上施設の破壊に成功。なおコッチ艦隊長の身柄を拘束した。お土産も手に入れたのでこれより地球に帰投する」
『こちらリトリビューション。こちらもオリンパス級2隻の撃沈に成功した。作戦は成功だ！』
『こちらトップキャット。よくやってくれた！我々の勝利だ！』
「よし、そろそろ地球に戻るとするか」
「造船所は何で攻撃しないんですか？あれが残ったままですと、ＳＤＦは再び軍拡を…」
「造船所本体は攻撃しないけど残すつもりはないよ。まずはこうする」
　最大出力のフェイザーで造船所下部、正確に言うと軌道エレベーターを攻撃する。この際注意しなければいけない点は、エレベーターの先端が都市部やシェルターの方向に倒れないようにすること。これで造船所は完全に宙ぶらりん状態に。ただこのままだと火星に向かって落下しておしまいになる。
「次にトラクタービームで造船所をこちらに引き寄せる」
　タイガースを牽引するのとは訳が違う。トラクタービームへ全エネルギーを注入して何とか火星重力圏から脱出する事ができた。なんか造船所の一番高い所に白旗が見えるけど気のせいだろう。
「最後にフックで掴んで準備完了！」
　ケルベロスを運ぶ時に使ったでかいフックで造船所をつかむ。あとやることはもちろんわかっているよね？
「データ、地球に帰ろう。胞子ドライブ起動」
「了解です」

１０：最後の作戦（地球サイド）

ディスカバリーからの報告を受けてレイエス達は気合を入れた。既にレイエスとソルター、他のＳＣＡＲチームはジャッカルに搭乗し空中で待機しており、タイガースも全ての主砲とミサイルの準備を整えていた。またＡＡＴＩＳもその巨大な砲を空に向けて侵入者に備えていた。

なおトランスポンダーを埋め込まれていたライアだが、一瞬でメディカルホールに転移した時の顔が最高にウケた、とソルターは言っていた。摘出時の麻酔が効くまでずっと『何で…どうして…』と繰り返し呟いていたそうだ。まあ普通はそうなるな。

『アクチュアル、こちらリトリビューション。大規模なＳＤＦ艦隊が接近中！報告と異なりオリンパス級２隻の他に複数の駆逐艦、空母、Ａ―ＪＡＫを確認！』

この時は分からなかったのだが、地球侵攻時には土星宙域に展開していた全てのＳＤＦ艦艇が地球に集結するよう、事前にコッチが命令していたそうだ。

「了解だゲイター。全ＳＡＴＯ部隊、こちらレイエス。自由射撃を許可する！攻撃開始！地球に来た事を後悔させてやれ！」

それはともかく敵艦隊は大混乱に陥った。事前に破壊されているはずのＡＡＴＩＳが動いていたからだ。真っ先にＡＡＴＩＳの犠牲になったのはオリンパス級２番艦のパヴォニスだった。スケルターを発艦させる間もなく、次々と巨大な砲弾が船体下部に突き刺さり甚大な被害を生み出した。ＳＤＦ艦艇の中で最も強固な装甲を有しているオリンパス級だったが、残念ながらＡＡＴＩＳの攻撃に耐えれる設計ではなかった。ジャンプ後僅か２分でパヴォニスは火を吹きながらレマン湖に墜落していった。

しかし黙ってやられるだけのＳＤＦではない。３番艦アンセリスが指揮を引き継ぎ攻撃を開始した。搭載している３０機のスケルター、更に空母からも次々とスケルターが発艦する。対するレイエス

達は近隣の空軍基地からの援軍と共にジュネーブ上空でドッグファイトに突入した。
「フィーバー、7時方向からスケルター！」
『分かっている！これで…よし！敵機撃墜！』
「良い腕だ、相棒！」
『こちらタイガース！敵駆逐艦2隻を撃沈！だが後部主砲に被弾！』
「フェラン艦長、作戦通りＡＡＴＩＳの近くで攻撃継続を！」
　装甲が薄いタイガースは複数のＡＡＴＩＳ付近を旋回しつつ攻撃する作戦になっていた。
『もちろんやっている！だが敵艦載機の攻撃が激しいんだ！援護を頼む！』
「了解！行くぞソルト！」
『了解だ、レイダー！』
　タイガースの援護に向かうが敵の攻撃が激しい。今まで多くの敵エースパイロットを撃墜してきたが、今戦っている敵のエースも腕がいい。だがレイエスの方が空中戦の技量が上だった。しかもここは地球。レイエス達ＵＮＳＡのホームグラウンドだ。絶対に負けられない戦いなのだ。
『全ステーション、オリンパス級が攻撃態勢。Ｆ―ＳＰＡＲをチャージしています！』
「まずい！全ＡＡＴＩＳは敵超大型空母に攻撃を集中しろ！」
　ＡＡＴＩＳが砲弾を吐き出しアンセリスに命中する。艦首下部に次々と砲弾が命中した結果、突き上げられるように大きく上に艦首を向ける形となった。その数秒後、Ｆ―ＳＰＡＲが発射されたが誰もいない空に消えていった。
「2発目を撃たせるな！タイガース、集中砲火だ！」
『了解！全主砲、連続射撃！弾薬庫が空になるまで撃て！』
　タイガースがアンセリスの左舷側から接近して速射砲による攻撃を行う。オリンパス級を破壊する為に用意した大口径徹甲弾が左舷を破壊し尽くした。互いの距離が1キロ以下での攻撃だった為、アンセリスの装甲で徹甲弾を防ぐ事は出来なかった。重要区画に被害が

出た為か、Ｆ―ＳＰＡＲへのエネルギー供給が途絶えた。
だがアンセリスからの反撃でタイガースも壊滅的な被害を受けた。右舷エンジンがカウリングごと木端微塵になり、艦底部にもミサイルが多数命中した結果、タイガースは空中に留まる事が出来なくなった。
『メーデー！メーデー！メーデー！タイガースは高度維持不能！推力喪失！これより不時着する！繰り返す、タイガースは不時着する！』
「なんてことだ…」
運が良い事にタイガースの操舵手は腕の良い人間だった。彼はジュネーブの街に墜落しそうになったタイガースをうまくコントロールし、ほとんど推力がない状況で船をレマン湖に不時着水させた上、バルトン公園付近の湖岸にうまく座礁させた。
『大丈夫だニック！あれなら被害も大きくないはずだ！』
「そうだな。急いで退艦すれば問題ない。流石だな、フェラン艦長」
しかしこれで貴重な戦闘艦が１隻失われてしまった。残るはリトリビューションのみ。ＳＤＦも本来の作戦である地上攻撃を放棄し、リトリビューションへの攻撃を開始した。レイエス達もリトリビューションを守るべく全力で戦うが、敵の数が上回っていた。船体各所から炎が吹き出し、ゲイターから悲鳴のような通信が入る。
『こちらリトリビューション！誘導システムダウン！ハンガーで火災発生！船体整合性が５０％を切りました！いつまでもつかわかりません！』
『ニック！このままではリトリビューションが！』
「分かっている！あれを使う時が来た…メタル１、火力支援を開始だ」
『メタル１、了解。派手に行きましょう』

リトリビューションを攻撃する敵駆逐艦の１隻が突然砲撃を受ける。機関部を破壊された駆逐艦はゆっくりと地面に向けて落ちていき、落下途中で数機のスケルターを巻き込みながら地面とぶつかり巨大な火の玉と化した。
ＳＤＦ艦隊はレーダー上に新たな敵艦艇の姿を捉えた。だがそん

なはずはない。ＵＮＳＡの動ける船は不時着したタイガースとフルボッコにしているリトリビューションだけのはず。モンスターことディスカバリーは火星で暴れている。ならこの船は？

敵の姿を見たＳＤＦは驚愕した。その姿はどこからどう見てもＳＤＦの空母だったからだ。しかし船体の右半分だけ塗装がＵＮＳＡカラーになっている。そしてその空母には他のＳＤＦ空母にはないある特徴があった。連装式の大型レールガンを両舷に１基ずつ備えている、極めて攻撃力が高い空母なのだ。こんな空母はＳＤＦの艦隊では１隻しかいない。

『おい、あの空母はまさか…ケルベロスか!?』

『ミランダのドックで吹っ飛んだはずじゃ…』

『だがあのレールガンはどうみてもケルベロスのものだ！』

『いつの間に拿捕されたんだ?!』

そしてその空母、ケルベロス改めヘラクレスの艦橋にいるのはエンハンスド・タクティカル・ヒューマノイドであるイーサンただ１人だった。

ヘラクレスの作戦投入はカークの作戦にはなかったが、レインズ艦隊長が極秘裏に投入を許可した。カークから空母を貰ったＵＮＳＡは、構造解析と同時に乗組員の訓練を行っていた。しかし作戦には間に合いそうになかった為、空母としてではなくレールガンを備えた戦闘艦として運用する事になった。中途半端に塗装を半分しかしていないのはそれが理由だからだ。

火力を上げる為、レインズ艦隊長は思い切った行動に出る。普段なら艦載機を置く格納庫だが、今回置いているのは陸軍が運用する地上発射型大型対艦ミサイルの４連装発射機だった。両舷の格納庫内に発射機が１０基ずつ設置されており、捜索評定レーダーや中継装置、指揮統制装置といったシステムはヘラクレスのＦＣＳとリンクしている。本来は絶対にリンクしないのだが、イーサンが中継しているから出来る芸当だった。

空母改めミサイル搭載レールガン艦として、ヘラクレスはＳＤＦの艦隊に突っ込んだ。リトリビューションですら直撃弾を受ければ撃

沈は免れない威力を誇るレールガン。当然駆逐艦やＡ―ＪＡＫでは全く歯が立たない。艦載機が攻撃するも対空砲火で撃墜される。極めて至近距離の為、タイガースに左舷とＦ―ＳＰＡＲをやられたアンセリスでさえ防ぐ事はできなかった。

そこに飛んでくるのはＵＮＳＡ謹製の大型対艦ミサイル。４０基のミサイルが一斉に発射され、アンセリスに襲いかかる。死にものぐるいで迎撃するがあまりにも時間がなかった。右舷の艦首から艦尾の間にまんべんなく命中し、右舷部分は完全に大破。そしてメインリアクターも破壊された事で高度はどんどん落ちていく。そしてとどめを刺したのがＡＡＴＩＳだった。アンセリスの船体は空中で崩壊し、残骸がレマン湖や街に降り注いだ。

『敵艦撃沈！ＳＤＦ艦隊は全滅した！我々の勝利だ！』

ＡＡＴＩＳタワーからの通信で全員が雄叫びを上げた。レイエスも、ソルターも、レインズ艦隊長も、誰もが喜んでいた。フェラン艦長も無事にタイガースから脱出したとの報告が上がっていた。うまく不時着したおかげで重症者こそ出たものの死者はゼロだそうだ。そこにディスカバリーから通信が入る。

『こちらディスカバリー。オリンパス・モンス、敵主力艦隊及び敵地上施設の破壊に成功。なおコッチ艦隊長の身柄を拘束した。お土産も手に入れたのでこれより地球に帰投する』

なんとコッチを生け捕りにしたと言う。これで奴を裁判にかけてジュネーブや他の惑星、衛星で犯した罪を償ってもらおう。

「全ＳＣＡＲへ、こちらレイエス。リトリビューションに戻ろう。ゲイター、まだ飛んでいるか？」

『かろうじてなんとか、というところです。最低でも半年はドック入り間違いなしです』

「戦いは終わった。しばらく有給でも取って一緒にバイクでも乗ろう」

『それはいいな。みんなでツーリングに行こう』

リトリビューションに着艦後、レイエスはソルター、イーサン、オ

マー軍曹と一緒にレイブンでＵＮＳＡ本部に移動した。その途中でイーサンが報告する。
「艦長、ディスカバリーが軌道上に出現しました」
「そうか、無事に帰って来たんだな」
「ただ…どでかいお土産を持って来たみたいです」
「どでかいお土産？なんだそりゃ？…おおう」
　オマーがそう言いながらドアから上を見上げると、彼はフリーズしてしまった。
「どうした軍曹？」
「…イーサン、あれは…お土産、っていう表現でいいのか？」
「少なくとも私にはちょっと大きすぎかと。艦長にはぴったりだと思いますけどね」
　見上げるとディスカバリーの姿が目に入った。そしてその下には。
「…あれＳＤＦの造船所か？」
「みたい、だな…」
「レイエスよりカーク艦長へ。今回は大きな買い物をしたみたいですね？」
『そうなんだよ。この造船所はすごいんだ。なんとＦ―ＳＰＡＲを小型にして速射性を上げた試作エネルギー対空砲が付いてる造船所なんだよ。おかげでシールドが２枚抜かれたよ。これを地球と月の中間あたりにでも置いたらどうかと思ってね』
　Ｆ―ＳＰＡＲの対空砲？えげつないものを作るな、ＳＤＦの連中は…
『とにかくこいつは適当なところに、といっても地球に落ちないようにするけど一旦置いておく。コッチを連れて地球に降りなければな。どこに行けばいいかな？』
「それではＵＮＳＡ本部のヘリポートで落ち合いましょう」
『了解した。カーク、アウト』
　これで長いようで短い戦争が終わった。

１１：後片付け

いやーＳＤＦは強敵でしたね（棒）。これから地球は戦災復興と艦隊再建で大忙しでしょう。どこまで付き合うかは気分次第でいこうかな。

まずパクってきた造船所だけど、とりあえず高軌道に置いておくことにした。中にいた人たちはハッキングしたロボットを使って降伏させたし、建造途中や修理中だったＳＤＦの船は動かせないようにしてある。既にＵＮＳＡはレイブンに部隊と技術者を載せて向かっているらしい。

「よし、じゃあ地球に降りようか」

「そうですね。こいつとは一緒にいたくないので早く行きたいです」

コール少佐は蔑んだ目でコッチを睨みつける。Ｍな人が見たらゾクゾクだろうね。なおコッチはトイレと食事時以外は例の拘束衣を着させている。捕虜の対応がーとか権利がーとかうるさかったので、

『あのな、この船は惑星連邦宇宙艦隊に所属している。だからＵＮＳＡのルールは一切適用されない。そもそも惑星連邦には捕虜の項目がないんだ（大嘘）。俺からしたらお前は大勢の罪なき民間人を虐殺したクソッタレ集団のボスだ。本来なら問答無用でその憎たらしい顔に銃弾ぶち込んで宇宙空間に放り出すところだが、銃弾がもったいないからＵＮＳＡに引き渡す事にした』

『何だと!?この私を地球人共の見せしめにすると言うのか！』

『犯罪者を裁判にかけるのは普通だろう？おたくの星はどうなっているか知らんけどな。知っての通りＵＮＳＡにはジュネーブ条約第３条があるから、向こうに行ったら少しは待遇が改善するだろう。だがそれまでは俺の管理下にある。グダグダ言わずにそれを着ていろ。あとうるさいからこれも付けとけ』

『んごっ!!』

と言ってボールギャグを噛ませておいた。

「いい年こいたおっさんがボールギャグと拘束衣ってなかなかにキモいし酷い絵面ですね…」

シンクレア大尉があからさまに嫌そうな顔をしている。ヒロセ大尉とヘルナンデス大尉も笑いをこらえながら目を背けている。うん、気持ちはわかるよ。こんなん見たら普通に笑うし。
「みんな転送装置と武器は大丈夫だね？」
「「「大丈夫です」」」
転送装置はコムバッジを、武器はＵＮＳＡの標準装備を用意した。コール少佐には拳銃のＫｅｎｄａｌｌ　４４を、シンクレア大尉にはショットガンのＲｅａｖｅｒを、ヒロセ大尉とヘルナンデス大尉にはアサルトライフルのＮＶ４を渡してある。リミッターを解除したレプリケーターでさっき作った出来たてホヤホヤの銃だ。俺はタイプ２ハンド・フェイザーをホルスターに入れておいた。まあ使わんだろ。
「それじゃＵＮＳＡ本部ヘリポートに転送！」

ヘリポートに到着してまず思ったのは空気が違う事だな。宇宙船の中とは違って色々な匂いがする。自然の匂いっていうかなんというか。でも一番強く感じるのは焦げ臭さだ。周りを見ても街はもちろん墜落したＵＮＳＡやＳＤＦの船があちこちで燃えてるからなあ。それはさておきニコニコのレインズ艦隊長と握手タイム。
「レインズ艦隊長、直接お会いするのは初めてですね。ディスカバリー艦長のカークです」
「初めまして、カーク艦長。地球を救ってくれて感謝する。君とディスカバリーがいなければ我々が勝利することはなかっただろう」
「そんな事はないですよ。レイエス艦長や優秀な部下の皆さんがいたからこそ勝てたんです。私１人に出来る事は限られていますから。それでこいつが今一番ホットな戦争犯罪人です」
そう言って俺は拘束コッチを指差す。コッチを見たレインズ艦隊長が若干引いてる。その後ろで付添の兵士達が笑いそうになるのを必死に我慢しているのがウケる。
「…拘束衣は良いとして、何故口にボールギャグが？」
あ、それ聞いちゃう？後ろの兵士さん顔やばいっすよ？

「はっきり言うとうるさかったんですよこいつ。死は恥ではないだの、火星よ永遠なれだの…なのでお口チャックをしておきました」
　コッチがむーむー唸ってるけど無視しとこ。
「なるほど、確かに必要みたいだな。中尉、この愚かな犯罪者を連れて行け」
「はっ！」
　ＭＰの腕章を付けた兵士達が拘束コッチを連れて行った。裁判できっちり裁かれて欲しいね。
「立ち話はこれくらいにしよう。もうすぐレイエス艦長やソルター少佐達が来る。一緒に食事を取ろうと思っていてね」
「地球を守った英雄達に会えるとは光栄です」
「噂をすれば来たようだ。あのレイブンだ」
　隣のヘリポートに着陸するレイブン。このゲーム内に登場する兵器で個人的に一番好きなのはレイブンなんだよね。

　会議室に移動してみんなで飯を食いながら話を進める。ハンバーガーうめえ。なおコッチが連れて行かれる姿を見たレイエス達は爆笑していた。
「以上が火星での作戦内容になります。軌道エレベーター周辺約２００キロ圏内に存在した軍事施設は破壊してきたので、しばらくＳＤＦは何も出来ないはずです。動ける船は非武装の輸送船ぐらいでしょうが、引き続き警戒を続けます」
　コール少佐がモニターを使って説明をしていた。
「諸君、戦いは終わった。ここから先は政治家が動く内容だ。今の連合の外務担当はＳＡＴＯ出身の元軍人だからＳＤＦとの交渉は問題ないだろう。だが、最後にやらねばならん事がある」
「と言いますと？」
　レインズ艦隊長はモニターに２つの衛星を映した。
「まずエウロパ。今回の戦いの始まりの地であり、兵器工場の職員達とＳＣＲＡチーム７が眠っている地でもある。次にチタニア。かつてＳＤＦに虐殺された入植者達と護衛部隊の遺体が今も凍ったまま

眠っている。どちらも回収せねばならん」
「そうですね…彼らを故郷に戻さなければ」
「しかし艦隊長、現在稼働状態にある大型艦はヘラクレスのみです」
　イーサンが言うにはタイガースはエンジンが吹っ飛びレマン湖に不時着、リトリビューションは数々の戦闘で船体のあちこちにダメージが蓄積し、おまけにドロップリアクターにまで損傷が出たせいで、この先半年はドック入り確実なんだとか。俺が万引きしてきた空母ヘラクレスが役に立って良かったよ。
「その通りだ。そこでレイエス艦長、貴官をリトリビューションの臨時艦長職から解き、ヘラクレスの臨時艦長に命じる。亡くなった人々を故郷へ帰すカムホームオプスを実行せよ。出撃は明朝だ。イーサンはレイエス艦長の補佐として一緒に行け」
「了解しました、艦隊長」
　お休みないのねー。働かせまくりやん。軍隊もなかなかブラックやのう。そしたらレインズ艦隊長をこっちに話を振ってきた。
「カーク艦長、以前話していた報酬についてなのだが、最初は政治家達がいい顔をしなかったが戦果で黙らせた。単刀直入に何が欲しいか言って欲しい。可能な限り答えるよ」
　マジすか。まあ海軍と海兵隊いなかったら負けてるし。なら…
「では3つほど。1つはＳＣＡＲチームで使用している宇宙服が欲しいです。恥ずかしながら我が連邦の宇宙服は探査任務に特化しているくせに壊れやすいという欠点がありまして。あとデザインがダサいんです」
　欠点は嘘。単純にあの宇宙服かっこいいから欲しいだけ。エウロパへの降下シーンが凄すぎて最高のプロローグだと思ったよ。
「わかった。他は？」
「レイブンとジャッカルを頂けたらと」
「…実物を？」
「ええ。中古でも構わないので欲しいです」
　レイブンはガチで欲しい。あのデザイン、性能、全てが１００点満点。ＨＡＬＯに出てくるペリカンに似ている点も素晴らしい。

ジャッカルもかっこいいんだよな。本当はスケルターが欲しいけどＵＮＳＡの人を前に言えん話だよ。まあ貰ったら色々弄くるけど。
「わかった、全て準備しておこう。１週間程かかるがよろしいか？」
「問題ありません。ありがとうございます」

飯と話し合いを終えてディスカバリーに戻ってきた訳だが。でも１週間何しようか。ちょっと日本見てきますって言える雰囲気ではなかったからこっそり行けばいいか。あと色々と調べ物でもしようかね。
まずはＳＤＦの様子でも見よう。火星地表攻撃をした時に超小型の探査機を格納庫からこっそりバラ撒いておいた。見た目はハエっぽいドローンだけど、狭いところに潜り込んで電子機器に引っ付き情報を盗める。いい買い物したよ。
ちなみに今のポイント残高は驚異の５０００万ポイント。リトリビューションは生き残っているし、レインズ艦隊長も無事、コッチは生け捕りにした上、火星は滅茶苦茶。ポイントが大量で嬉しいです。何を買うか迷っちゃうね。
「さて火星はどないなっとんねーんって、えぇ…」
おやおやこれは…まさかの民衆が評議会相手にデモ起こしてる。絶対的な軍事主義を持って自由や平和を皮肉ってきた癖に、いざ全面戦争に突入したら負けちゃったんだもん。艦隊は文字通り全滅するわ、地上の軍事施設は軒並み瓦礫の山になるわ、みんなのカリスマであるコッチは捕まるわ、そりゃみんな怒るもの無理はないな。でもデモ集団をＣ１２バトルタンクで排除（物理）するのはやり過ぎだと思います…
情報を見るとやはり艦隊の再建が最優先みたいだな。でも軌道造船所と主要な地上造船所は破壊したし、付近の資源倉庫等も木端微塵にしたから大変みたいだ。コッチの命令で軌道エレベーター周辺の造船所に資源を集中させていたのが裏目に出たな。まともに動く兵器がスケルターとウォーデンが少し。地上戦力はあるけど輸送手段がウォーデンしかない。造船所も資源も兵器もないとなると…あれ、

詰んでね？
　プロパガンダ部隊や秘密警察が全力で頑張っているけど評議会はどうすんのかね。大人しくＵＮＳＡに降伏するとは思えない。でも逃げるところもないしな。火星に引きこもって徹底抗戦…いや負けるっしょ。軌道上から砲弾やミサイルバラ撒いたらおしまいだし。ここは評議会が少しでも理性的な対応をしてくれる事を祈るとしよう。
「艦長、ドロップリアクターによるジャンプの分析が完了しました」
「ありがとう、データ」
　ゲームしてても思ったけど、やっぱあのジャンプはかなーり危険なものだな。うまくいかないと船体が耐えきれなくなって分解する可能性がある。しかもジャンプすると放射線まで出す。そういうリスクがあるから、この世界の人類は太陽系の外に進出できていないんだろう。
　土星から水星までリトリビューションは２０秒かからなかったから、ＳＤＦとの戦いが完全に終了したら太陽系外の探索を始めるのかもな。潜在的に居住可能な太陽系外惑星とか見つけれれば良いんだが。地球類似性指標（ＥＳＩ）の値が最も高く、かつ地球に一番近いのがティーガーデン星ｂだったかな。ちょっと覗いてくるのもありだな。

「艦長、通信が入っています」
「分かった、繋いでくれ」
　てっきりレインズ艦隊長かと思ったら見覚えのある白髪のおっさん。神やん。
『おひさ』
「お、おひさ。てか何の用？」
『この世界での役割、終わり。次の世界、行く』
「えっ」
　普通転生って１回やったらずっとその世界で死ぬまで住むんじゃないの？

『原作変えて、みんなハッピー。俺も、ハッピー。でもまだある、変えるべき世界。だから、お前、行く』
「ちなみに次の世界はどんなやつなの？」
『言えない。行ってから、お楽しみ』
「なんでやねん。で、いつ行くんだ？」
『データに、方法、教えとく。じゃ』
　切れたし。てかまた別の世界行くのかよ。
「データ、どうやるかわかった？」
「はい、艦長。まずは通常ワープを実行し、ワープ中に胞子ドライブを起動すれば別世界へ行けるみたいです」
「わかった。ＵＮＳＡから報酬を貰ったら行く事にしよう」
「了解しました」
　次どんな世界に行くんだよ…あまりにも技術レベルに差があるとマジでえげつない事になっちまうで。進撃の巨人の世界で巨人がいきなりフェイザーで蒸発したり、マーレが光子魚雷で街ごと吹っ飛ぶの見たくないでしょ。
「ちょっとはメカメカしい世界がいいなあ…」

１２：旅立ち

あれから1週間。ついに今日レインズ艦隊長から報酬を貰える事になった。貰ったらそのまま次の世界に旅立つ事になっている。もちろんそんな事を言っても信じてもらえないだろうから嘘の理由を伝える事にした。

『地球から見てさそり座の方向に約５００光年離れた位置にあるさそり座ν星。７つの恒星から成る七重連星系であるこの星だが、観測データによると時空に歪みがある事が判明した。ここを無理やり通過すれば元の世界に帰れる。なお時空の歪みは通過後に消えるから問題はない』

という説明をした。さそり座ν星は存在するけど時空の歪みとかは嘘。でもＵＮＳＡにそれを知る方法はない。むしろ５００光年も離れた場所に行ける事に驚いていたな。

あと火星だが評議会が盛大にやらかした。艦隊再建に伴い色々と大規模な政策変更を実施したのだがこれがひどいものだった。元々ＳＤＦは全ての男性に１２歳から１５年間の兵役を義務付けていたが、徴兵年齢の下限を大幅に下げてなんと６歳から生涯兵役義務というルールに変えちまった。しかも男女問わず。１２歳から兵役ってルールもかなりぶっ飛んでるのに、それを６歳に下げるって頭おかしいだろ。そんな小さい子供に何が出来るんだ？

他には不足気味の各種物資（食料品・医療品を含める）の民間での販売を禁止し、評議会が定めた平等なルール（上流階級優先）に則り配給制となった。ついでに今までの労働基準法が廃止となって、１日の労働時間が１５時間にされたそうな。最後のが地味にえげつない。

ただでさえ負け続けの軍や評議会に不満が溜まっている火星市民。そこにこんなイカれたルールを押し付けられた市民達の怒りが爆発した。再び大規模なデモが火星の至る所で発生したが、例によって評議会は排除を命令。Ｃ１２バトルタンクやＣ６ロボット達が銃を構えてデモの中止を命じるも市民達は応じない。まあ当然だわな。

するとロボット達は一斉に射撃を開始、市民達は悲鳴を上げながらバタバタと倒れていった。逃げ惑う市民達の背中に容赦なく発泡を繰り返すロボット達。市民達が逃げ込んだ建物を吹き飛ばすバトルタンク。いやマジでドン引き。エクストリームドン引きだよ。映像を見せたけどレインズ艦隊長達も顔がこわばっていたし。火星版血の日曜日事件じゃねえかよ。

その惨劇を知ったＳＤＦ地上軍の大多数が市民側について評議会への攻撃を始めた。火星内戦の発生である。秘密警察やプロパガンダ部隊が反撃するも、彼らは純粋な戦闘部隊ではないので壊滅するまでそう時間はかからなかった。んで評議会は輸送船で逃走を図るもスケルターがエンジンを蜂の巣にして撃墜。生き残った評議会メンバーを拘束した地上軍の責任者がＵＮＳＡに連絡してきたのが３日前の事だった。

民間人で構成された火星臨時政府はＵＮＳＡに対して、ＳＤＦ高等評議会メンバーの生き残りを引き渡す用意がある事や、即時の停戦要請、終戦に向けた交渉の要請を連絡してきた。ＵＮＳＡは二つ返事でこれを受諾。カムホームオプスから帰還したばかりのヘラクレスは、回収した遺体を降ろした後、外交官を乗せて火星にジャンプ。昨日交渉がまとまり戦争は終わった。ヘラクレス艦上にて調印された降伏文書の内容は以下の通り。

・その所在地に関わらず、ＳＤＦ軍全軍及びＳＤＦ高等評議会直属の全戦闘部隊へ無条件降伏を布告し、全ての指揮官はこの布告に従う事。

・ＳＤＦ軍と火星市民へ敵対行為の中止を命じ、艦艇・航空機、軍用非軍用を問わず財産の毀損を防ぎ、ＳＡＴＯ軍総司令部及びその指示に基づき火星臨時政府が下す要求・命令に従わせる事。

・火星臨時政府に所属する公務員とＳＤＦ軍の職員は、ＳＤＦ降伏の為にＳＡＴＯ軍総司令部が実施・発する命令・布告・その他指示に従う事。なお非戦闘任務は引き続き実施する事。

・戦時中及び戦争以前にＳＤＦ軍及びＳＤＦ高等評議会が太陽系内にて実行したＳＡＴＯ軍所属軍人・ＵＮＳＡ所属民間人の虐殺行為に

ついて、火星臨時政府は関与した人物及び関係資料を速やかにＳＡＴＯ軍に引き渡す事。
・ＵＮＳＡは上記の戦争犯罪についての裁判を１年以内に実施する事。
・火星臨時政府とＳＤＦ軍は、捕虜として抑留しているＳＡＴＯ軍所属軍人及びＵＮＳＡ所属民間人を即時解放し、必要な給養を受けさせる事。
（６つ目の項目については、ＳＤＦ軍が軍人・民間人問わず捕虜を取らずその場で処刑するよう評議会及び軍司令部から命令を受けていた事が判明。実際にＳＤＦ施設に捕虜がいない事も確認された為、降伏文書から削除された）
引き渡された評議会メンバーや虐殺に関わった人間、当時の命令書等の関係資料を回収したＵＮＳＡは裁判の準備を大急ぎでしているんだと。だいぶ年寄りの被告もいるみたいだから死ぬ前に裁判したいってのもあるんだろうね。
地球に帰還したレイエスはＳＡＴＯから勲章が授与された。アメリカ軍で言うところの名誉勲章レベルのやつらしい。ソルターやオマー軍曹も同じ勲章を貰ってた。おまけにリトリビューション所属の海兵隊員は全員１階級昇進となった。
レインズ艦隊長は現在ドック入りのリトリビューションの正式な艦長としてレイエスの名を推薦した。更にリトリビューションとヘラクレスはＳＣＡＲチーム専属艦艇として運用されるようになるらしい。ただでさえ船いないのによく海軍が反対しなかったな～と思っていたら、俺が盗んできた造船所を使って艦隊再建を進めるみたい。何でも海軍はアドミラル級を一回り大きくした空母の建造計画を進めているそうだ。ちなみにアドミラル級はリトリビューションの艦級の事ね。
そのリトリビューションだが、ヘラクレスの設計思想に習って大型レールガンを装備する事になった。元々近接防御火器や対空ミサイルしか搭載していなかったけど、オリンパス・モンスの登場でもっと火力載せないといかん、みたいな考えになったそうな。

あと昨日の夜レイエス達に誘われて飲みに行った。ブラック企業で社畜をしていた俺の肝臓はアルコールに強くなっていたので、結構な数のボトルを開けた。ビール、ウォッカ、バーボンなどなど…酒はやっぱうまいね。てかレイエス酒強すぎだろ…カシマはぶっ倒れていたぞ。

そして今、俺はディスカバリーの格納庫でレインズ艦隊長達とお別れの挨拶をしていた。新品ピカピカのジャッカルとレイブンは隣に置いてある。あとで試運転しないとね。

「本当に感謝しているよ、カーク艦長。地球を代表して礼を言わせてくれ」

「こちらこそお役に立てて光栄です、艦隊長」

その後レイエス達ともお別れの挨拶をして彼らがレイブンに乗り込む時に俺はある物をレイエスに渡した。現在ＵＮＳＡで使われているデータチップだ。

「これは？」

「多分数年すればあなた方でも作る事が出来るはずの物だ。きっと役に立つはず。地球に帰ったら見てみると良い。うまく使えば地球のさらなる発展に繋がるだろう。長寿と繁栄を（Live long and prosper）」

そう言って俺は人指し指と中指・薬指と小指をくっ付け、中指と薬指の間と親指を開いて、相手に掌を見せるヴァルカン式挨拶をした。これやってみてかったんだよね。難しいけど。

格納庫からレイブンが出ていくのを見送った後、俺は艦橋に移動してデータに命じた。

「よし、まずはさそり座ν星にジャンプしよう。七重連星をこの目で見てみたい」

「了解です、艦長。胞子ドライブ起動します」

さらば（この世界の）地球よ！

クルンと回りながら姿を消したディスカバリーをレイエス達は眺めていた。
「行ってしまいましたね…」
「未来は色々とぶっ飛んでるということがよくわかったよ」
イーサンはカークから貰ったデータチップの中身を見ていた。
「艦隊長、これはすごい代物です。モニターに出します」
モニターに表示されたのは大型の人工衛星のようなもので、それらは大量に地球軌道上に設置されていた。そして一斉に起動すると地球を囲む形にシールドが展開したのだ。カークが渡したのは、『スタートレック：ディスカバリー』シーズン3にて地球連合防衛軍が使用していた惑星防衛シールドの設計図と運用システムだった。
「これは凄いな…だがイーサン、実際問題これを作れるのか？」
「我々は既にエネルギー系兵器を運用しており、F―SPARの開発にも成功しています。それらの技術を兵器からシールドにシフトすれば恐らく可能でしょう。しかしカーク艦長の言う通り数年の時間はかかります」
「SDFと睨み合っているうちは作れない…いや、人間同士で争っていては話にならないということか」
「この30年間、我々は常に戦ってきましたからね…」

1年後、SDFの戦争犯罪についての裁判がジュネーブにて開廷。今までSDFが実行した数々の戦争犯罪が明らかとなり地球市民は衝撃を受けた。それまでの地球市民の認識では『あの事件はSDFの仕業だろう』『またSDFか』ぐらいのものだったが、裁判で実際の被害の大きさや残虐性が公表されてドン引きしたのだ。特にチタニアでの入植者虐殺事件については、ヘラクレスが回収してきた遺体の状態やSDFから押収した資料等が伏せ字無し（遺体にはモザイク加工

がされた）でネット上で公開された。
　裁判の結果、評議会メンバー及び虐殺に関わった人間のほぼ全員に死刑判決が、残りの人間には終身刑が言い渡された。エウロパ兵器工場攻撃及びジュネーブ奇襲攻撃を計画・指揮したコッチも当然死刑となった。判決の1週間後に死刑が執行され、コッチ達死刑囚は全員銃殺刑で処刑された。死刑囚達は最後まで喚き散らしていたが、銃殺隊を指揮していたレイエスに、
『火星が永遠かどうかは知らないが、今確実に言えるのはお前達の罪は永遠に消えないという事だ。それに死は恥ではないと言うのなら、生きている事は恥なんだろう？良かったじゃないか、死ぬ事が出来て。こちらとしてもお前達が死んで本当に嬉しいよ』
　と言われて口を閉じたという。遺体は火葬された後に大西洋で散骨された。遺体が埋葬された土地が聖地となるのを防ぐ為の措置である。
　火星臨時政府は死刑執行の数日後に公正な選挙を実施。これをもって火星臨時政府は火星政府となり、正式にＵＮＳＡに加盟した。軍備制限により火星政府の軍隊である火星防衛軍は小規模なものとなっている。駆逐艦以上の大型艦を保有出来ず、エネルギー系兵器の艦艇搭載も禁止された。かつてＳＤＦと地球が争った原因の１つであるヘリウム３・メタンハイドレート等のエネルギー資源やレアアース資源の採掘及び貿易に関する条約が締結され、地球と火星の国交正常化がここに実現した。
　それから４年後。ＵＮＳＡエネルギー技術本部の責任者、コール中佐率いるチームがカークが残していった惑星防衛シールドシステムの開発に成功。シールドの強度は小惑星帯での衝突実験、リトリビューションによるレールガン攻撃実験、更にＦ―ＳＰＡＲによる攻撃実験でその強度が保証されている。また、このシールドは起動している惑星大気圏内へのジャンプを妨害する機能を持っており、半年後に地球と月、その３ヶ月後には火星に設置された。装置の小型化も進みつつあり、リトリビューションにて実施試験が行われている。
　この世界の地球はこれからも発展していくだろう。

これが七重連星か！すげーな！写真撮っておこ。
「まさに芸術的、という言葉がぴったりの光景ですね」
「そうだな。さて満足したから次の世界に行こうか」
「了解です。まずは通常ワープに入ります」
すると見慣れたワープの光景が。やっぱこれだよなあ。
「それでは胞子ドライブを起動します」
「やってくれ」
次はどんな世界に行くのだろう。楽しみだ！

幕間
インターバル

俺は今なんかよくわからん浜辺にいる。ハワイみたいだな、行ったことないけど。んで頭上にはディスカバリー。隣には神。何お前トロピカルなジュース飲んでんねん。

「なんで俺ここにいるん？次の世界に行くんじゃなかったの？」

「次に行く世界、まだ決まってない。それまで、リラックス。ＯＫ？」

「リラックスって…どれくらいかかるんや？」

「３日。準備できたら、呼ぶ」

「…まあリラックスは出来るか。暇だしジャッカルとレイブンの操縦訓練でもするか」

海でしばらく泳いでからジャッカルとレイブンに乗ってみた。レイブンは比較的操縦しやすいね。でもジャッカルはちょっとピーキーだな。マクロスの可変戦闘機程ではないけど練習はしばらく必要だね。

あとポイントで買ったものを使う時が来た。まずＳＣＰ―２４００。ＳＣＰに手を出す時が来るとは思ってなかったけどね。これはコンクリートの壁のかけらに取り付けられた扉だ。サイズは壁のかけらが３．７１ｍ×２．２５ｍ、扉自体は０．６５ｍ×０．９１ｍと小さくて、なんとかかがんで入れる程度の大きさ。これを余っていた倉庫に入れておいた。この扉を開くとＳＣＰ―２４００―Ａと指定されている空間に繋がる。美しい青空の下にどこまでも広がる、白く平坦な大地である。んでこの空間の中に入って扉を閉めると、その瞬間時間の流れは空間の内部と外界で隔絶され、内部の時間だけが外界の１４０倍という恐ろしいスピードで流れ始めるのだ。空気と重力が普通の精神と時の部屋みたいな感じだね。この中で３日間を過ごすと３×１４０で４２０日間過ごせる。

なんでこれを買ったかというと、同じくポイントで買った訓練施設

とハートマン軍曹型アンドロイドで自分を鍛える為だ。今まで銃を撃ったことがない一般人だったから、いざという時身を守る力は必要だと感じた。だからこそあの鬼軍曹を呼び出した。地獄の８週間の訓練をするのだ。ただ体を壊すかも知れないから保険は必要だよね。そこでこの魔法辞典。ご存知ドラえもんのひみつ道具で、なんにも書かれていない白紙の本に魔法の『効果』と『発動条件』を書き入れると、誰もがその魔法を使えるようになる。発動条件には『呪文』や『ジェスチャー』などを柔軟に設定できるから、自分にしか分からない呪文やジェスチャーを用意しておけば、他の人には使う事が出来なくなる。これで用意した魔法は『死ぬまで健康体でいて、あらゆる病気にかからず、どんなに食べても太らない』というもの。これをコマネチしてからアイーンをしながら言うと魔法が発動するようにした。

「訓練教官のハートマン一等軍曹である。話し掛けられた時以外口を開くな。口からクソを垂れる前と後に『サー』を付けろ！分かったかウジ虫！」

「サー、イエッサー！」

「ふざけるな！大声出せ!!タマ落としたか!?」

「サー、イエッサー!!」

こえええええ！でも俺はやると決めたんだ。これを超えて俺は男になる！

※訓練の様子をダイジェストでご覧下さい

「起きろ！起きろ！起きろ！マスかきやめ！パンツ上げ！」

「ダボダボのケツを何とかしろ、デブ！上でマ〇コが待ってりゃ登るだろ、コノヤロー！」

「じじいのファックの方がまだ気合いが入ってるぞ！」

「死ぬか？おれのせいで死ぬつもりか？さっさと死ね！」

８週間を俺は乗り切った。何度も死ぬかと思った…てか原作より

もアグレッシブじゃねえかあいつ！疲れて走れなくなった時に後ろからＭ１６で俺の足元を乱射し始めたし！それらを乗り越えて俺は海兵隊員になった！けれどここがスタートラインなんだよね。ここからひたすら訓練を重ねて実戦に向かうって凄い事だと実感したよ。国を守る為に戦う兵士の皆さんには尊敬と感謝の念しかない。時間はまだまだ残っているから筋トレや射撃訓練続けよう。武器は主にＣｏＤ：ＩＷの物を使用している。これで訓練していれば問題ないはず。

「いいか海兵！これからライフルとピストル、両方のマークスマンバッジを取れるように訓練してやる！１発外すごとに腕立て伏せ２０回だ！お前が外すと仲間が死ぬんだ！それを忘れるな！」

「サー、イエッサー!!」

俺が持ってるのはまだシャープシューターバッジだからもっと上を目指して頑張らないとね。でもマークスマンバッジって相当高いスコアを出さないと取れなかった気がするんだが…まあいいか。微笑みデブみたいに射撃の性能を開花させるとしよう！

２ヶ月後。

「よくやった海兵！これでお前は立派な上級射手だ！このＭ３８　ＳＤＭＲとＳＩＧ　Ｍ１７をくれてやる！大事に使え！」

「ありがとうございます、サー！」

ようやく合格点を貰えたよ。実戦と同じ状況で当てろと言われたけど、まさか狙っている時に俺の頭の真横に銃を撃ってくるとは思わなんだ。Ｍ１６はもちろんＭ２で撃ってきた時は漏らしそうになった。Ｍ２重機関銃は駄目でしょ、何発か当たったし。死なずに済んだのはＵＮＳＡから貰ったＳＣＡＲチーム仕様の特別宇宙戦闘服に、ポイントで買った小型のシールド発生機を組み込んでいたから。実弾系なら歩兵が運用するほぼ全ての武器を無力化できるし、エネルギー系ならＦ―ＳＰＡＲの直撃に１０秒まで耐えられる。これだけあればなんとかなるかな。

「おーい」

すると神がやってきた。準備出来たのかな？」
「準備、終わった。いつでも、行ける」
「なら行こう。どうすればいい？」
「ここから、ワープ。そして、胞子ドライブ」
「わかった」
ＳＣＰ―２４００―Ａから出てまずはシャワーでさっぱり。服を着替えてから艦橋に行く。
「艦長、出撃準備完了。いつでも行けます」
「ありがとう、データ。まずは通常ワープ、それから胞子ドライブで次の世界に行く」
「了解しました。ワープ開始します」
さあ次の世界はどんなところかな？メカメカしい所が良いなあ。

「ワープ完了。船体及び船内に異状なし」
外を見るとただの宇宙で何もない。さてここはどこの作品の世界なんだろうか？
「艦長、救難信号を受信しました。座標特定…完了。ここから５光年離れた場所です」
「救難信号か。よし、助けに行くぞ。胞子ドライブ起動」
可愛い子がいるといいんだけどね。

アベンジャーズ／インフィニティ・ウォー
1：俺らこんな世界嫌だ～♪

「困った…」
「困ったな…」
　2人の男は窓の外に広がる広大な宇宙を眺めながら心底困っていた。短い髪に髭が似合う男の名はソー・オーディンソン。アスガルドの第1王子、そして今のアスガルド王であり、稲妻を召喚・蓄積・放出する特殊能力を持つスーパーヒーローでもある。隣りにいるロン毛の長身イケメンはロキ・ラウフェイソン。ソーの義弟であり、アスガルドの第2王子だが実はアスガルド人ではなかったりする。
　そんな2人が困っている理由だが、1時間程前に故郷のアスガルドで姉のヘラと盛大な戦いを繰り広げた。自力では倒せなかったのでちょっと前に倒した炎の巨人スルトを復活させてラグナロク、アスガルドの滅亡を故意に引き起こした。その結果スルトはヘラもろともアスガルドを滅亡させた。
　ここまでは良かったのだが問題はその後。木端微塵になったアスガルドの破片やらがソー達アスガルドの民が乗る避難船『ステイツマン』にぶつかったのだ。船体のあちこちに破片がぶつかり、主にエンジン周辺の被害が深刻だった。機関そのものは無事だったが、船体後部と底部のエンジンノズルが完全に崩壊し、推進力がほぼゼロになってしまった。
　修理のしようがないレベルまで壊れてしまったので、ソーは地球方面に救難信号を発信する事にした。地球にはアベンジャーズの仲間がいるから、時間はかかるが気付いてくれるはず。船内にはそれなりに食料品・医療品が保管されていた。
「いつ地球の連中は来るんだ？」
「それ5回目だぞ、ロキ」
「他にやる事といったら酒を飲むぐらいしかないからな」
「それはそうだが…」

ロキはウイスキーを一気に飲むと、言いにくそうにソーを見た。
「実はちょっと言わなきゃいけない事があって…」
だが窓の外に見慣れない宇宙船が突然現れ、ロキの言葉は途中で止まった。
「あれは地球の船…なのか？」
「わからん。艦橋に行くぞ。話はその後だ」

艦橋に行くとハルクことロバート・ブルース・バナー博士とソーの親友でもあるヘイムダルが待っていた。２人とも嬉しそうな表情だ。
「バナー、あの船は？」
「これを聞けば分かるさ」
バナーがコンソールを操作すると男の声が聞こえた。
『こちらはＵＳＳディスカバリー。前方を漂流中の大型船に告げる。貴船より発信された救難信号を受信した。もしこの通信が受信できているなら、船名、責任者の氏名、乗船人数、船の状態を教えて欲しい。本艦には食料品・医療品の提供を行う準備がある。また船の曳航設備も備えている。繰り返す、こちらは…』
「救難信号が届いたのか！あれは地球の船なのか？」
「それは分からない。船名の頭にあるＵＳＳってのは、アメリカ海軍艦の艦船接頭辞であるＵｎｉｔｅｄ　Ｓｔａｔｅｓ　Ｓｈｉｐの略だと思うんだが、海軍があんな宇宙船を持っているなんて話を聞いた事が無い。そもそも地球の技術力であんな船を造るのは難しいと思う」
「確かに…とりあえず返信はしないとな」
ソーはマイクを手に取り返事をすることに。
「こちらアスガルド所属ステイツマン。責任者のソーだ。本艦は現在推進力を喪失し漂流中。機関は無事で生命維持装置は稼働している。乗船人数は…民間人が大勢いる。食料や医療品も少しは余裕がある。可能であれば曳航を要請したい」
『アスガルド…了解した。怪我人はいるか？』
「怪我人は少しいるがどれも命に別条はない」

『わかった。映像通信は可能だろうか？』
「少し待ってくれ…これか？よし」
　ボタンを押すと男の姿がモニターに表示された。よく鍛えている、とソーは感じた。見慣れない制服の上からでもその鍛えられた肉体がわかる。
『私がＵＳＳディスカバリーの艦長、ジェームズ・Ｔ・カークだ。あなたがミスター・ソー？』
「ソーでいい。カーク艦長、救助に感謝する」
『カークで大丈夫。救助を求める船がいたら助ける。船乗りの常識だよ。とりあえず生命維持装置が無事で良かった。空気が漏れている場所はないか？』
「漏れていた場所は既に閉鎖した。怪我人も応急手当を終えている」
『それはなによりだ。今軽く船体をスキャンをしたがかなりやられているみたいだな…岩みたいなのが底部にいっぱい突き刺さっている。小惑星でも飛んできたのか？』
「…まあそんなところだ」
　故郷の惑星を姉と一緒にふっ飛ばして、その破片でやられましたとは言えないソーであった。
『なるほど…ってソーも目を怪我しているじゃないか』
「これか？ちょっと取れてな。ウイスキーで消毒したから大丈夫だ」
『いやいやきちんと治療しないと駄目だろ！転んで膝擦りむくのとは訳が違う。ちょっとそっちに行くからエアロックの場所を教えてくれ』
「あー…わかった。ここがエアロックだ」
『了解、すぐに行く。到着まで５分。カーク、アウト』

　おいおいおい。ソーにステイツマンって事はこの世界はインフィ

ニティ・ウォーかよ！・やべえじゃん！・サノスのハゲに指パッチンされたらおしまいだからなんとしても阻止しないとな。てかもうすぐ来るんじゃね？ここに来る時には既にパワー・ストーン持ってたはずだし、あのクソデカなサンクチュアリⅡも来るし！急がないと死ぬ！
「データ、スキャナーを最大出力で稼働させろ。所属不明艦が近付いてきたらすぐに連絡を頼む」
　キャプテン・マーベルが体当たりで壊せるぐらいだから、この船の武装なら勝てるでしょ多分。
「了解しました、艦長。幸運を」
「そっちもな」
　そう言って俺はレイブンの格納庫から宇宙空間に飛び出した。着ているのはＳＣＡＲ宇宙服。やっぱ宇宙遊泳って楽しいな。レイブンは自動操縦でディスカバリーに戻るようにしておいた。ブーストリグでエアロックまで飛ぶとドアが空いたので入る。さあ正念場だぞ。
『気圧調整完了。ドアを開けます』
　丸い大きなドアが開くとそこにはソーにロキ、ヘイムダル、バナー達がいた。ソーは筋肉やべえ。まさに漢ってやつだな。ロキはめっちゃイケメンやん。ヘイムダル俺好きなんだよな。バナー博士もかっこいい。スルトに飛びかかるシーンは笑ったけど。
「はじめまして。カークだ」
「ソーだ。こいつは弟のロキ、こっちは俺の親友ヘイムダル、そしてバナー博士」
「よろしく」
　全員と握手。これだけでＭＣＵファンは小便漏らすレベルで嬉しいだろ。
「早速だがソーの目を治療をしよう。一体何をしたんだ？」
「ちょっと姉と喧嘩してな」
「アスガルド流の喧嘩は物騒だな…」
　鞄から医療用トリコーダーを取り出してソーの目をチェック。やっぱ目ん玉がないから修復は不可能だな。小型のレプリケーター

を用意しながらソーに尋ねる。
「損傷が酷くて自然修復は不可能だ。そこで義眼を用意しようと思う。何か要望はあるか？目の色とか特別な機能とか…」
「ちょ、ちょっと待ってくれ。この場で義眼を作れるのか？その小さな機械で？」
　バナーがレプリケーターをまじまじと見つめている。そりゃ地球の技術じゃ無理だもんな。
「うちじゃこれが普通なんだ。あとで機能を説明するよ。で、どんな機能を付ける？おすすめは高度な動体視力付きのとか、目からレーザービームが出るやつとか…」
「ビームとか物騒だな！とりあえずどんな雷にも耐えられるようにしてくれ。俺雷使えるから。目の色は今と同じで頼む」
「わかった…これでよしと」
　必要なデータを入力するとレプリケーターが作動し、１０秒もしないうちに義眼が完成した。バナーはもちろん、他の３人も口が開きっぱなし。
「えっ…もう出来たのか？」
「はい完成。付ける前に軽く消毒するから痛むぞ。あと義眼と神経が接続すると凄まじい痛みがくるから覚悟しといて」
「そ、そんなに痛いのか？」
「俺はやったことないけど…聞く所によると金床の上に置いた金玉をスレッジハンマーで殴った程度の痛さ、らしいよ？」
　心なしかソーの顔が真っ青になっているみたいだが気にしない気にしない。まずはガーゼを取ってマ〇ロンをバシャー。
「痛ってぇ！」
　血は止まっているみたいだから目の周りの血を拭いてから、消毒した義眼をソーの眼窩にシュウゥウーッ!!
「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!」
　釣りたての魚みたいにのた打ち回っている!!!エキサイティンじゃないな。はいロキ君、そのイケメンフェイスでニヤリとしない。
「本当に大丈夫なのか？」

「あと5秒もすれば復活するはずだ」
「うおっ!?」
　するとソーが口を閉じて跳ね起きた。周りを見ながら義眼に雷を当てている。痛くないのかあれ。
「見えるぞ!よく見える!」
「よし!じゃあ次は曳航の準備をしよう。元々どこに行く予定だったんだ?」
「地球に行く予定だった。あそこには仲間がいるからな」
「わかった、では…」
　その時、コムバッジが作動してデータから通信が入った。
『艦長!9時方向よりアンノウン接近中!極めて巨大な戦艦です!』
「わかった。ソー、ここで誰かと合流する予定は?」
「もちろんない。艦橋へ行こう」
　艦橋に着くのと同時にサンクチュアリⅡを目視で確認した。ロキはやべえって顔している。
「データ、不明艦の詳細を」
『全長１９０００メートル、全幅１４０００メートル、全高７８００メートルの超巨大宇宙戦艦です。たった今、一部データのハッキングに成功。船名はサンクチュアリⅡ、ブラック・オーダーなる組織の所有物です』
「どでかい聖域だな…そのブラック・オーダーって組織のリーダーは?」
『サノスとかいう全身紫色のデカくてハゲてるタイタン人です』
　データの言い方に艦橋にいた全員が拭いた。ロキは腹を抱えて爆笑している。
「ハゲは失礼だろハゲは…データ、何時でも動けるようにしておけ。シールド出力最大、全兵装オンライン」
『了解です』
「誰かサノスを知っている人はいるか?」
　４人に聞くとバナー以外は頷いた。曰く、全宇宙の最大の脅威。行く先々で破壊と虐殺を繰り返し、６つのインフィニティ・ストーンを

探しているそうな。６つが揃うと宇宙を支配する力が手に入るらしい。しかもロキは以前サノスと同盟を結んでいたとか。
「でもここにストーンはない。アスガルドと一緒にテッセラクトは吹き飛んだ」
「あー…実はそれ間違ってる」
　ロキは気まずそうに言うと手のひらを上に向ける。するとそこに青いキューブが出現した。映画でも思ったけどめっちゃ綺麗やん。お洒落なバーとかで間接照明として置いてあっても不思議じゃないね。
「お前また盗んだのか！」
「いや、気が付いたらポケットに入っていて…」
「それはいいとして、その石をあいつに渡しちゃ駄目なんだろ？なら急いで逃げないとな」
「でもどうやって？」
　ヘイムダルの言葉に返事をしようとしたが、その前にデータが大声を上げた。
『艦長、敵艦より発砲！目標はスティツマン！』
　民間人が大勢乗っている船に問答無用で攻撃してくるとか、やっぱサノスはイカレハゲだな。
「直ちに応戦！ディスカバリーを射線に割り込ませろ！あとフックでスティツマンを掴んで胞子ドライブでジャンプだ！」
『目標は？』
「ちょっと待て」
　俺はソーの横にあるコンソールを操作して星系図を表示させた。うわ、地球までめっちゃ距離あるじゃん。どこに行こうかな。
「今星系図を送った。とにかく太陽系方向へランダムジャンプ！ブラックホールや恒星は避けろ！」
『了解！』
　ディスカバリーから送られてくるデータを見る限り、サンクチュアリⅡの攻撃は全てディスカバリーのシールドで防げている。仕返しにフェイザーと光子魚雷をお見舞いしたら、いい感じの被害が出てい

るようだ。あのクソダサいドーナツみたいな船が吹き飛ぶのも見えた。しかも艦橋をズームしたらサノスがガントレットで何か叩いてるし。怒ってんのか？

そうこうしているうちにディスカバリーがフックでステイツマンを掴んだ。

『固定完了！いつでも飛べます！』

「ジャンプ開始！」

ディスカバリーとステイツマンが回りながら消失するのを、サノスはサンクチュアリⅡの艦橋から見ていた。全てが予定と異なりストレスが溜まっていた。ステイツマンに乗り込んでスペース・ストーンを強奪するはずだった。到着すると見慣れない船がいたが気にせず攻撃。しかしその船が凄く強い船で、こちらの攻撃が通らず、向こうの攻撃でかなりの被害を受けた。そのせいでしばらくこの場から動けなくなってしまった。

「おのれ…」

「修理完了まで時間がかかります。次はどうします？」

副官のコーヴァス・グレイヴからそう聞かれると、サノスは唸りながら椅子に座った。

「動けるようになったらノーウェアへ向かう。リアリティ・ストーンを奪うぞ」

２：話をしよう

ソーは自分が経験した事を信じられないでいた。つい数秒前までサノスの巨大船から攻撃を受けていたはずなのに、視界がぐるりと回るとサンクチュアリⅡは消えており、船も全く別の場所にいた。ロキ達も困惑している。

「カーク、いったい何が起きたんだ？」

「俺のディスカバリーには特殊なワープシステムが搭載されている。それを使って逃げたんだ。本当ならあのクソ紫ハゲをブチ殺すところだが、大勢の民間人が乗っている船の避難を優先すべきと判断した。データ、現在位置は？」

カークの問いに男の声で返事が来た。恐らくディスカバリーに乗っているカークの副官だろう。

『現在位置は先程の位置から５００００光年離れた宙域です。現在周辺をスキャン中』

「５００００!?」

バナーはもちろんヘイムダルもびっくりしていた。一瞬でこんなに遠くまで飛べるとは…

「まあまあ遠くまで飛んだな。損害報告を」

『サンクチュアリⅡによる攻撃でシールド出力が２２％低下しましたが、ディスカバリー及びスティツマンに損害はありません』

「わかった。あのデカ船にはどれだけダメージを与えた？」

『しばらく動けない程度には』

それはいい知らせだ。相手が動けない間に早く民を地球に避難させねば。

『艦長、１２時方向よりアンノウン接近中。数は1、恐らく小型船』

「全くこの船は人気者だな。戦闘準備を…」

「待ってくれ、通信が入っている」

ヘイムダルがコンソールを操作すると、モニターに６人の男女が映った。

『こちらベネター号。救難信号を受信して飛んできたんだが、問題は

ないか？』
　バナーが確認すると救難信号を切り忘れていたようだ。
「こちらステイツマン。来てくれて感謝する。本艦は自力航行が出来ない状態だが、上にいるディスカバリーが救援に来てくれた。救難信号を切る前に問題が起きてそのままにしていた、申し訳ない」
『問題？何かトラブルでも？』
「サノスっていう紫色のサイコハゲに襲われてな。ディスカバリーがいなければ本船は沈んでいただろう」
　すると6人の顔色が変わった。
『今、サノスって言ったか？』
「ああ。知り合いか？」
『…あいつを追いかけていてな。話すと長くなる、直接会って話さないか？』
「なら俺の船に来ないか？」
　そう言うのはカーク。
「俺はカーク。ディスカバリーの艦長だ。広めの会議室もあるし出来立ての飯も用意出来るぞ」

　まさかガーディアンズ・オブ・ギャラクシーのメンバーと会えるとは思ってなかったよ。スター・ロードかっけえなあ。それはともかく、まず俺はディスカバリーからステイツマンに複数の大型レプリケーターを運び込んだ。これでアスガルドの民に温かい食事を提供できる。保存食だけだと気が滅入るからみんな喜んでくれた。
　次にレイブンでソー達4人と一緒にディスカバリーへ戻った。それと同時にデータの誘導でベネター号の小型ポッド、スペース・ポッドも格納庫に着陸した。流石にベネター号は大きいから格納庫に入らなかった。でもデザインが素晴らしい。

軽く挨拶を交わしてから会議室へ移動。レプリケーターで飯を用意すると言ったらみんな驚いていた。ガーディアンズ・オブ・ギャラクシーのメンバーはカレーを注文。ソー達はシャワルマを食べた。確かアベンジャーズのエンディングで食べていたな。俺はもちろんハンバーガー。やはり美味いな。ハンバーガーは素晴らしい食べ物だ。穀物、肉、野菜をバランス良く接種できる。ダイエットコークを飲めばカロリーは実質ゼロだし。

「さて、それじゃ飯も食い終わった事だし話を進めようか」

それぞれメンバーが自己紹介をする。よく考えるとここにいる面子はなかなか凄い。世界を救ったヒーロー達が勢ぞろいしている。俺だけなんかアウェイ感を味わってる。最後は俺の番か。

「俺の名前はジェームズ・T・カーク。惑星連邦宇宙艦隊所属、このUSSディスカバリーの艦長を務めている。階級は大佐。カークと呼んでくれ」

「惑星連邦…聞いたことある？」

「いや、ないな…」

みんな首をかしげている。まあそうなるよな。

「ちょっと信じられないかもしれないが…俺は違う世界から来た人間だ。元の世界にはアスガルドは存在していないしな」

「えっ」

「データ、説明を頼むよ」

すると俺の後ろにホログラムのデータが出現した。見た目はもちろんデータである。どうやらソー達はデータが俺の副官だと思っているみたいだ。実際頼れる副官だしな。

「皆さんはじめまして。ディスカバリーの艦載ＡＩ、データです。本艦は宇宙艦隊司令部の命令を受け、銀河系内で発生した時空間異常についての調査任務を実施していました」

会議室中央のモニターに表示したのは銀河系の図で、太陽系を含めた5か所で時空間異常が発生しているのが見える。でもこれは真っ赤な嘘。神様に言われて転生しましたとか言っても信じてくれんだろう。

「本艦はサンクチュアリⅡのような純粋な戦闘艦ではなく、科学実験や調査を主任務としている先端技術実験船ですので、今回の任務を問題なく実施していました。しかし最後の時空間異常点において時空が大きく破れているのを発見しました」
　スタートレック・ピカードのシーズン２エピソード１のような緑色の時空間異常をモニターに出すと、科学者であるバナーが質問をしてきた。
「あれは…宇宙に穴が開いている？いったいなんなんだ？」
「解析不明です。タキオン・レベルは低く、本艦が到着した時は安定していました。しかしその後時空間が急速に不安定になり、逃げようとしましたが間に合わず、ディスカバリーを巻き込んで時空間は消滅しました」
「俺は死んだと思ったけど無事だった。んで救難信号を受信したから現地に向かったら、見たことがない船に聞いたことがない国名。俺は違う世界に来ちまったと確信したよ」
　話を終えると色々と質問された。まずはピーター。
「サノスの船をボコボコにしてたけど、どんな武器積んでるんだ？実験船にしては重武装だと思うんだけど」
「そんなに強くはない。指向性エネルギービームのフェイザー、反物質弾頭を搭載している光子魚雷、真空エネルギー弾頭を搭載している量子魚雷、敵艦の電子機器を無力化するイオン・ミサイルぐらいだ。それにこれぐらいの武装は３２世紀じゃ最低限必要な装備だぞ」
「３２世紀やべえな…」
　次にソー。
「カークはなかなか鍛えているみたいだな。戦えるのか？」
「基本的に俺はここで指揮をするのが多いな。でも海兵隊式訓練を受けた後に特殊部隊の訓練も受けている。剣やハンマーは難しいが銃やナイフなら任せてくれ」
「それは頼もしいな」
　実はポイントを使ってバイオプラントを買った。これは映画版バイオハザードに出てくるアイザックス博士が開発した身体機能管理

システムで、これを体内に取り込んでいると超人的な戦闘能力、肉体の損傷に対する修復能力、敵の様々な攻撃パターンを即座に予測し対応できる『格闘予測ソフトウェア』を使えるようになる。
「それで今後の話なんだが、まずこれを見て欲しい」
俺はサンクチュアリⅡの艦橋をズームした画像を出した。サノスがキレて何か叩いてる図だ。自分の思い通りにいかなくて物に当たるってなかなかのクズだよな。こんなんがリーダーの組織にはいたくないね。
「この左手の金ピカ手袋に付いている紫色の石はインフィニティ・ストーンの1つなんだろう？」
「その通りだ」
ソーが詳しそうなので説明を任せる。
「あれはパワー・ストーンだ。ザンダー星でノバ軍が保管していたはずだが、サノスの手にあるということは既にサンダー星は滅んでいるだろう」
「嘘だろ…」
ガーディアンズ・オブ・ギャラクシーで見たけど綺麗な星だったよな。よく滅ぼせるな、サノスのイカレポンチは。ちょっと脳みそ湧いてるとしか思えん。
「スペース・ストーンはアスガルドで保管していたが今はここにある。サノスが奪いに来たがカークのお陰で逃げる事が出来た。タイム・ストーンとマインド・ストーンは地球でアベンジャーズが持ってる。ソウル・ストーンの所在は誰も知らない。つまりサノスが次に行く場所はリアリティ・ストーンが保管されているノーウェアだろう。ここ数年コレクターに預けているからな」
「あいつに預けるとか正気かよ」
見てくれと言動は確かにアレだけど、アスガルドが2つもストーンを持つのは良くないから預けたんだよな。でもアベンジャーズは2つ持ってるよな。まあマインド・ストーンはヴィジョンになってるから持ってるとは言えんか。
「そこで提案なんだが…ピーター、ガーディアンズを率いてノーウェ

アへ行ってリアリティ・ストーンをサノスより先に回収して貰いたい。コレクターに、サノスが狙っていると言えばすぐ渡してくれるはずだ」
「分かった。パッと行ってサッと貰ってくるさ」
「カークは引き続きステイツマンを地球まで曳航してくれ。地球に着いたらアベンジャーズに連絡してくれれば話がスムーズに通る。バナーはアベンジャーズのメンバーだから、ロキがいてもそこまで問題にはならないはずだ。出来ればノルウェーのトンスベルグに船を降ろして欲しい。あそこは父が眠っている場所なんだ」
「了解。超特急で地球に向かうよ」
「で、俺はちょっとニダベリアに行って武器を調達する」
「あの伝説の場所か？宇宙がビビる最強の武器を作ってるだろ！俺も行ってみたいな！」
　初めて見た時はたぬきなのかウサギなのか分からなかったロケットがウキウキしてる。これが元人間とは思えんな。
「ドワーフのエイトリにサノスを殺す武器を頼む。ロケット、君がベネター号の船長殿か？」
「おうよ、お察しの通りだ」
「なるほど、風格がある。一緒に行ってくれるか？俺がナビゲートする」
「船長に聞くよ。おっと俺が船長だったな、よし行こう！」
「素晴らしい」
「俺が船長なんだけど」
　ピーター置いてけぼりなのウケる。
「あの」
　と言いながら手を挙げるのはガモーラ。
「私はソウル・ストーンがどこにあるか知ってる」
「何だって!?」
　聞くと、昔サノスの仲間だった頃に調べるように命じられ、ヴォーミアという惑星にある事を突き止めていたそうな。でもサノスは両親を殺したクソ野郎だったから内緒にしてたらしい。

「ただし、惑星のどこにあるのか、どうやって手に入れるのかは分からなかった。ストーンキーパーという監視者がいるらしいわ」
「なるほど…」
　入手方法は愛する者の魂と引き換えなんだよな。だったら…
「ガモーラ、君は極力前線に出ない方がいいと思う」
「何ですって!?」
「いや、気を悪くしたなら謝る。だがサノスがソウル・ストーンを手に入れるには君の知識が不可欠だ。つまり君を誘拐して情報を引き出そうとする可能性が高い。最悪の場合、君の仲間を捕まえて拷問するかもしれない」
「それは…」
　実際映画じゃネビュラを拷問していたしなー。出来ればサノスに捕まる前にこちらで保護したいところだが。ならこうしよう。
「1つの案だが、ガモーラは俺と行動を共にする。この艦なら絶対に安全だからな。まず地球にアスガルドの民を避難させる。その後ピーターを追ってノーウェアに向かうというのはどうかな?」
　ピーターが凄く嫌な顔をしている。知ってるけど念の為聞いておくか。
「…もしかして2人って、お付き合いしている感じ?」
「えっ!?いや、その…まあ、そういう事、だな!」
　カップルを離れ離れにさせるのは重罪だから駄目だな。百合の間に挟まる男と同じレベルの極悪人になってしまう。
「じゃあピーター達と一緒に行くしかないな。だが念の為にこれを渡しておくよ」
　そう言ってガーディアンズの目の前にレプリケーターで作り出したのは2つの機械。1つはゲームボーイサイズのもので、もう1つはモンスターボールみたいなやつ。ポイントを使って購入したものだ。
「これは?」
「まず右の機械は携帯型スクラントン現実錨。これを起動すればある程度まで現実改変を無効化出来る。リアリティ・ストーンの能力は現実改変だろ?サノスに取られた時に対抗する為の機械だ。ただし効

果範囲は2立方メートルだ」
　ＳＣＰの世界ではおなじみのスクラントン現実錨。意外と安くてびっくりした。
「左のは個人用シールド発生装置。ただでさえ頑丈なサノスがパワー・ストーンで自身を強化している。でもあいつの口からビームが出るわけじゃない。全力でぶん殴られてもこれがあれば無傷で済む」
　ピーターは恐る恐るといった様子でシールド装置を手に取る。
「そりゃすげえな。どれぐらいの強度があるんだ？」
「それにはピーターの協力が必要だ。ちょっと立ってくれ」
「えっ」
「そうそう、ここに立ってもらって、よし。で、シールドを起動して…ソー、ちょっとピーターを殴ってくれ」
「ええっ!?」
「良いのか？」
「大丈夫大丈夫」
　ソーの腕に電流が走り、ピーターの顔は真っ青。
「いいか？」
「良くない！」
「よし、行くぞおおおおお！」
　ソーのかみなりパンチ！ピーターはシールドをつかった！ソーは吹き飛んで壁にぶつかった！ロケットはポカーンとしている。そしてロキはニヤニヤしている…
「うぇ!?痛くない！てか俺動いてない！」
「なんて硬さだ…びくともしない」
「強度はこれで証明されたな。あと全員に恒星間通信装置を渡しておくからやばくなったらすぐ連絡してくれ」

　必要な物を渡し終えて会議はおしまい。俺は再びディスカバリーとステイツマンをワープさせて地球軌道上に到着した。この間僅か3分。

「この時代の地球はあまり発展してないな。軌道エレベーターもないし、そもそも宇宙船飛んでないし」
「今の地球は２０１８年だから仕方ないさ。君の世界ではどんな歴史を歩んでいたんだ？」
　バナーに聞かれてちょっと考える。確か２０６３年にフェニックスが初めてワープ航行に成功したんだったかな。その後は色々あったなあ。
「２２世紀前半の惑星連邦成立前に４年ほど敵対的な宇宙人国家と恒星間戦争をして、その戦争後に連邦が成立したんだけど、その後も２００年ぐらい定期的に戦争したり外宇宙から機械生命体が侵攻してきたり…」
「随分長い間戦争しているな。そんなに好戦的な連中だらけなのか？」
　ロキも驚くレベルらしい。
「まあ色々とな。２６世紀にはタイムトラベルのせいで歴史の大規模改変とかが起きたり…なかなかカオスな歴史を歩んできたよ」
「タイムトラベル!?それは凄いじゃないか！」
「歴史的な出来事を観察することが可能になったのは素晴らしい事だ。だが２９世紀にとあるバカが１９４４年の歴史に介入して、ナチス・ドイツがアメリカの征服に成功するという歴史を作りやがった。その結果大規模な過去改変が発生して大変な事になった。そいつのタイムシップを破壊したから全ての改変は消滅してめでたしめでたしとなったわけだ」
「そんな恐ろしい事が？」
「もしこの世界でタイムトラベルが可能になったとしても、絶対に過去を変えないようにするんだな。誰しも変えたい過去を持っているだろう。だがそれを変える事によって改変が発生する。最悪の場合自分が消滅するかもしれないし」
　バック・トゥ・ザ・フューチャーがいい例だよな。母親と父親の恋愛に干渉したせいで主人公が消えかかっていたし。
「肝に命じるよ…」

そうこうしているうちにデータがアベンジャーズの本部であるアベンジャーズ・コンパウンドに通信を繋げる。
「アベンジャーズ本部、こちらブルース・バナー。応答してくれ」
『…バナー？本当にバナーなのか!?』
「その声はトニーか！元気か？」
『まあまあってところかな。それよりバナー、君は3年間もどこに行ってたんだ？ロマノフが悲しんでいたぞ』
「色々あってね。でも今は緊急なんだ。今すぐ地球に降りて話をしないといけない。ソーの故郷、アスガルドが木端微塵になって避難民を大量に乗せているんだ。本部の近くに宇宙船を降ろしていいか？」
『そういう事情か。分かった、適当な場所に降ろしてくれ。医療スタッフを準備しておく』
「ありがとう」
今度はトニーと話せるのか！おらすっげぇワクワクしてきたぞ！
「データ、アベンジャーズ本部上空にジャンプしてくれ。今のステイツマンが大気圏突入に耐えれるかわからん」
「了解です、艦長」

３：何なんだ、あいつは…

アイアンマンことトニー・スタークは腕を組んで空を見上げていた。周りには大勢のスタッフが同じように空を見ていた。念の為に武装チームも待機している。それにしてもバナーから連絡が来た時はとても驚いた。ソコヴィアの戦いで姿を消したもんだからロマノフはとてもがっかりしていた。早く付き合えばいいのに。

しかしあのアスガルドが吹っ飛ぶとは信じられないな。ソーの声が聞こえなかったが無事だろうか。そう簡単にやられるとは思えないけどな。

『ボス、衛星軌道上の２隻の宇宙船に動きがありません。本当に降りてくるのですか？』

トニーをサポートするＡＩ、Ｆ．Ｒ．Ｉ．Ｄ．Ａ．Ｙ．からの報告に首を傾げる。

「２隻？バナーが乗ってる船だけじゃないのか？」

『光学観測の結果、大きく派手な宇宙船の上に別の宇宙船がいます。上にいる宇宙船が下の宇宙船をフックのようなもので掴んでいるようです』

「おんぶに抱っこ、というやつか」

その時突如空に青い光が瞬き、トニー達の上空２００メートル程の位置に宇宙船が出現した。よく見ると派手な宇宙船はあちこちにダメージを受けている。上にいる宇宙船が曳航してきたのか？いやそうじゃなくて。

「…Ｆ．Ｒ．Ｉ．Ｄ．Ａ．Ｙ．、何が起きた？こいつらどこから来たんだ？」

『軌道上からワープしたのではないかと推測します』

「なるほど…」

そしてゆっくりと宇宙船は降下し、トニー達の眼前に着陸した。上にいる宇宙船は着陸せず、後部から小型の降下艇らしき航空機がこっちに向かってきた。クインジェットよりごつい見た目だがデザインは好きだな。それが着陸すると後部からまずバナーが出てきた。

「ブルース！」
「トニー！」
　思わず駆け寄ろうとしたが、後ろから出てきた男を見て足が止まった。
「やあ。何年ぶりかな？」
　緑色の服を着たロン毛のイケメン、そしてどこか人を馬鹿にするような口調。どう見てもニューヨークで戦ったロキだった。初めて会った時のようにニヤッとした表情を見て、俺は素早く合図を出し武装チームがトニーの周りで銃を構えた。
「おい、どういう事だ？まさか脅されてるんじゃ…」
「違う違う。落ち着いてくれ、色々と積もる話があるんだ。彼は敵じゃない。敵だったらニューヨークの時みたいに殴ったりぶん回してる。だから武器を下ろすように言ってくれ」
「…わかった」
　チームに武器を下ろさせ、改めてバナーと抱き合う。
「よく戻ってきてくれた」
「帰りが遅くなってすまない」
「いいんだ。それで他のメンバーを紹介してくれ、ロキ以外」
「冷たいなあ」
　ロキはシカトしていかついアスガルド人と握手。
「ヘイムダルだ。アスガルドでは番人を務めていた。王からアベンジャーズの事はよく聞いている。よろしく頼む」
「こちらこそよろしく。ソーはいないみたいだけど大丈夫なのか？」
「問題ない。王は寄り道をしてから地球に来るそうだ」
「なるほど…てかソーは遂にアスガルドの王様になったのか！」
「紆余曲折あったが無事に王になられた。それも長い話があるんだ…」
　本当に色々あったみたいだな…次はこれまた鍛えてそうな男。
「はじめまして。ジェームズ・T・カーク、ディスカバリーの艦長だ。アスガルドの避難船受け入れ感謝する」
「トニー・スタークだ、よろしく。あの艦やこの降下艇のデザインは素

晴らしいね」
「なかなかイカすだろう？特にあのエンジンが分離してるところが大好きなんだ」
　あのぷかぷかしている細長いのがエンジンだって？分離しているのに推進力が伝達するのか…
「どんな技術を使っているのか気になるよ。カークはアスガルドの人間には見えないけどソーの知り合いなのか？」
「知り合ったばかり、というべきかな。この避難船、ステイツマンから発せられた救難信号を受信して、その後色々あってここまで曳航してきたんだ」
「救難信号？平和な話じゃなさそうだな。場所を変えて話をしようか」
「そうしよう。アスガルドの民についてだが、ソーからの伝言でノルウェーのトンスベルグに移住したいとの事だ」
「すぐには難しいだろうが調整しよう。とりあえず俺が持っているリゾートホテルを１０軒ちょっと確保してあるから、しばらくはそこで過ごしてもらうよ」
「助かるよ。故郷を失ったばかりだから、今は少しでも休息が必要だ」

　本部内の会議室に移動してお互いに状況を説明した。まずアスガルド側の話だが、サノスっていうサイコパスがとんでもない事を仕出かすつもりなのは理解した。６つあるインフィニティ・ストーンのうち、現在３つがこの地球にある。この情報を掴んだら必ずサノスは地球を攻撃するだろう。ただタイミングが最悪すぎる。
「そういえばキャプテンは？えっクリントもいない？じゃあサムはどこ？ま、まさかロマノフも？」
　２年前に起きたソコヴィア協定絡みの内乱のせいでアベンジャーズは事実上の瓦解状態。メンバーだったスティーブ、サム、ロマノフ、クリント、ワンダ、ヴィジョンはアベンジャーズを去った。残っているヒーローは俺とローズ、そしてバナーだけになってしまった。その

事実を知ったバナーは頭を抱えて愕然としていた。
「たった3年でチームがこんな事になっているなんて…これでは地球を守りきれるかどうか…メンバーに連絡は取れないのかい？」
「一応スティーブに繋がるフリップフォンはある。あるんだが…」
連絡・追跡等も含め、俺は一切のコンタクトをしていない。やろうと思えば出来るが、アベンジャーズの瓦解の原因が自分にもあると考えると躊躇してしまう。しかし全宇宙の危機が迫っている今の状況を自分達だけでは対処できないのも事実。それにワンダと一緒に暮らしているヴィジョンにも連絡をしないといけない。やる事が多すぎるがやるしかない。
「まずはストレンジに連絡しよう。彼がタイム・ストーンを持っている。事情を説明すれば協力してくれるだろう。スティーブには俺から電話する。ワンダとヴィジョンの潜伏場所はＦ．Ｒ．Ｉ．Ｄ．Ａ．Ｙ．に調査させよう」
「わかった。アメリカ政府には連絡を？」
「放っておく。ロスは相変わらずのヒーロー嫌いだからな。連絡したところで何か出来るとも思えん」
「それだけど政府もそんなに馬鹿じゃないみたいだ」
と言うのはカーク。胸に付いている小さなバッジからホログラムデータが投影されている。あんなサイズでどうやったらそんな機能が…
「ロス国務長官率いる部隊が南から接近中だ。完全武装のＶＴＯＬが５機、うち４機は兵士で一杯。光学迷彩を使用しているがディスカバリーのセンサーには丸見えだ」
「まずいな…とりあえず兵士には帰ってもらってロスと話をしないとな」
「それなら俺も協力する。政治家ってのは嫌いだけどいないと困る存在だからな」
外に出るとクインジェットが荒々しく着陸し、あっという間に兵士

達に取り囲まれた。ロスの部下なだけあってよく訓練されているみたいだな。ロスもこっちにやってきた。
「スターク！一体どういう事だ！いきなり軍のレーダーが反応したというから来てみたら、こんなでかい宇宙船を許可なく地球に着陸させるとは！」
　そこそこブチ切れているロスだが、ロキの姿を見て目をひん剥いている。
「お前は…ニューヨークの！」
「落ち着けロス！彼は敵じゃない。説明するからお前の部下に銃を下ろすように言ってくれ」
「信用できる訳ない！ニューヨークで何人死んだと思っているんだ！奴は戦犯だ！」
　激おこなロスの前に両手を上げながらカークが歩み寄る。
「国務長官。過去の事はさておき、彼や他のアスガルド人は全員が避難民だ。貴国は非武装の避難民に武器を向けるような野蛮な国なのか？」
「何だと!?」
「それにだ、ここにいるロキは現在のアスガルド国王であるソーの弟だ。アスガルドと戦争する気がないなら今すぐ武器を下ろす事をおすすめする」
「何を偉そうに…お前は何者だ!?」
「ジェームズ・T・カーク。ただの艦長だよ。とにかく武器をしまってくれ。そんなのを向けられたままじゃ話もできん。そもそもここはスターク・インダストリーズの施設であり、ここにいるスタークの私有地だろ？俺はそんなに法律は詳しくないが、アメリカには『私有地に宇宙船を着陸させてはいけません法』でもあるのか？」
「黙れ！こいつらを連行しろ！」
　カークの説得を完全に無視したロス。こいつこんなに石頭だったか？
「仕方ない」
　そう言ってカークは指を鳴らす。すると近付いてきた兵士達が一

斉に飛んだ。というか見えない何かに釣り上げられた、と言うべきか。兵士達は１０メートルくらいの空中でくるくる回っているし、武器は全部明後日の方向に吹っ飛んでいくし、おまけにクインジェットも逆さまになっている。そして真上にはディスカバリー。唯一無事なロスは周りを見て口をパクパクさせている。
「カーク、何をしたんだ？」
「ディスカバリーからトラクタービームを発射して全員を掴んだだけだ。死にはしないさ」
　そしてカークはロスに向き直り、今度は強めの口調で説得を始めた。
「いいか国務長官。私は３２世紀の別世界地球から来た軍人だ。２１世紀の武器など一斉通用しない。銃弾やナイフはもちろんＮＢＣＲ兵器も含めて全てだ。やろうと思えば１０分以内に地球そのものを破壊できるだけの力がある。だがそんな事はしない。我々惑星連邦は平和主義の恒星間国家なのだからな。あんたがダイヤ並みの石頭で融通がきかない人間なのはよく分かった。だが今は武器をしまって話を聞け。分かったか？」
「…いいだろう。少し熱くなりすぎた、すまない。部下を降ろしてくれないか？」
「もちろん」
　再び指を鳴らすとゆっくりと兵士達とクインジェットが降りてきた。吹っ飛んだ武器も持ち主に返ってくる。まったく３２世紀ってのはどんでもない技術のバーゲンセールだな。ヘリキャリアがおもちゃレベルじゃないか。

　ロスを連れて会議室に戻り最初から説明した。が、やっぱりロスはロスだった。アベンジャーズの再結集の許可は出さないし、軍が動くからお前らは大人しくしていろと言う始末。そろそろバナーがキレそうでやばい。
「お言葉だが長官」

カークの口調からも怒りが伝わってくる。
「今の時代ではアメリカ軍が世界最強の軍隊であるという事は分かっている。しかし貴国の軍だけでは間違いなく勝てない。というか地球上の全ての軍隊を集結させたとしても無理だろう。サノスにとって核兵器なんかパーティークラッカーと同レベルだ」
「だがソコヴィア協定がある以上勝手に動く事は許されない。国連の委員会承認が無ければ…」
「その委員会とやらを開催するのに何ヶ月かける気だ？サノスはそんなに待ってくれんぞ。例外規定はないのか？」
「抜け穴はない。あったら問題だからな。国連が機能不全にでもならない限り無理だ」
　するとカークがとんでもない事を言いだした。
「そうか…なら当面の間は大人しくしているしかないな」
「「「「えっ」」」」
　俺やバナー、ロキ、ヘイムダルは『こいつ何言ってんだ』という驚きで、ロスは『こいつ素直に言うこと聞くやん』という驚きだったに違いない。
「ならとっとと委員会を招集して活動許可を出してくれ。その間は情報収集に務めるとしよう」
「カーク、それでは…！」
「後ろから撃たれるのは嫌だろう？キャプテン・アメリカのように追い回されながらサノス達と戦うのはリスキーだ」
　そう言いながらウインクをしてきた。なるほど、理解した。
「分かった。ロス、あんたの言う通りにするよ。ただアスガルド人をホテルに連れていくのを止めないでくれ。彼らは俺の客人だからな」
「それは認めよう。では私はこれで。何かあったら連絡する」
　そう言ってロスは兵士達を連れてクインジェットで帰っていった。それを見届けた後、カークに尋ねる。
「それで？本当のところどうするんだ？」
「さっき国連のメインサーバーをハッキングしてソコヴィア協定の中身を一通り確認した。ロスの言う通りあの協定に抜け穴はないよう

だ。でも…」

カークはロキみたいにニヤリとした。

「協定に書いていない事であればやっても違反にならないし当然罰則もない。違うか？」

4・アベンジャーズ、再集結

その着信音を聞いたスティーブはびっくりして飲んでいたコーラを吹き出しそうになった。この3年間一度も鳴る事がなかったからだ。隠れ家で一緒にいたサムとロマノフも驚いてスティーブを見ている。

「スティーブ、それは…」

「ああ…」

ポケットから取り出したのはフリップフォン。スティーブはゆっくりと応答ボタンとスピーカーボタンを押した。

「トニー?」

『スティーブ…元気にやってるか?』

「まあまあだ。そっちは?」

『もちろんみんな元気さ』

久しぶりに聞いたトニーの声にスティーブは嬉しく感じた。

『スティーブ、俺は…俺は間違っていた。君はあの内乱の時も、その後も常に正面から向き合って生きてきたのに、俺にはそれが出来ていなかった。それに君やバッキーに対しても酷い事を言った。本当にすまなかった』

「いいんだトニー、分かっているさ。僕も謝らないといけない。ご両親の事を黙っていてすまなかった」

『両親の事は…受け入れたよ。俺も君も歳を重ねる。色々な事を割り切ったり受け入れたりして進んでいかないとな。進むと言えば、実はペッパーと婚約したんだ』

「本当か?それはめでたい。みんなでお祝いをしないとな」

『ありがとう。でもパーティーをやるには今起きている問題を片付けないといけない。それで電話したんだ』

「問題?」

『単刀直入に説明する。まずソーの故郷、アスガルドが滅亡した。ソーが姉貴と喧嘩したら吹っ飛んだらしい』

「……えっ?」

思わず声が裏返ってしまった。サムとロマノフも口が開きっぱなし。懐かしい名前が出たと思ったら滅亡って…しかも姉と喧嘩して惑星が吹っ飛ぶってどんな喧嘩をすればそんな事になるんだ？宇宙はレベルが違うな。

『それでアスガルドの避難民が今地球に来ているんだ。とりあえず俺が持っている幾つかのリゾートホテルで滞在中。ここまでは良いんだが…』

その後の説明に愕然とする。アスガルドの避難船を容赦なく攻撃してきたサノス。彼はテッセラクトやヴィジョンのマインド・ストーンといったインフィニティ・ストーンを狙っている。既にサノスの攻撃で惑星が1つ滅亡している。地球外のヒーローチームであるガーディアンズ・オブ・ギャラクシー。彼らもサノスを止めるべくストーン回収に動いている。原因は不明だが32世紀の別次元地球から来た軍人、カーク。トニーも理解できないレベルの技術力を持っていて彼も協力してくれる。そして遂に地球に戻ってきたハルクことバナー。バナーの名前を聞いたロマノフもこれには頬を染めてニッコリ。早く付き合えばいいのに。

『…という感じだ。使えん協定のせいで国連の動きは亀並に遅いが、それについてはカークに考えがあるそうだ』

「そうか…確かにこれはチーム一丸となって戦う他ないな。何をすれば良い？」

『今から座標を送る。その隠れ家から1キロ程南の空き地にカークが降下艇に乗って待機している。合流したらスコットランドのエディンバラに行ってヴィジョンとワンダをピックアップして欲しい』

「分かった。すぐに移動する」

『ありがとう。本部で会うのを楽しみにしてるよ』

「僕もだ。では」

電話を終えたスティーブ達はすぐに移動を開始した。警察に見つからないように、しかし急いで動く事10分。座標の空き地に到着したが降下艇はいない。しかし空き地に入ると突然降下艇が現れた。

ヘリキャリアのような光学迷彩を使用しているようだ。後部ランプから武装した男が1人出てくる。彼がカークだろう。
「君がカーク？」
「そうだ。ジェームズ・T・カークだ。よろしく」
「僕がスティーブ・ロジャース。よろしく頼む。こちらは相棒のサム・ウィルソン、そして彼女はナターシャ・ロマノフだ」
「みんなの活躍はトニーやブルースから聞いているよ。一緒に戦えて光栄だ。早速移動しよう。出してくれ！」
　カークが操縦席に声をかけるとゴテゴテしたロボットが無言でサムズアップしていた。ウルトロンよりロボットって感じだな。
「あれは…ロボットか？」
「そうだ。C6二足歩行ロボット。元々建設現場での作業や警備の為に開発されたんだが、パーツを変えれば高性能な戦闘ロボットになるんだ。アイアンマンのように空を自由に飛んだりビームは出せないけど、宇宙空間でも戦えるし自分で考えて戦うからなかなか強いぞ」
　そんな話をしている間に降下艇はどんどん加速していく。これは間違いなくクインジェットより高性能だな。スティーブは知らなかったがこの降下艇、レイブンの最高速度は時速３１００キロメートル。ブースターを使用すれば時速１３００００キロメートルまで加速して大気圏脱出も可能になる。ちなみにクインジェットの最高速度はマッハ２．１。宇宙にも行けるが改修が必要である。
「忘れるところだった。キャプテン、トニーからこれを預かってきた」
「これは!?」
　カークは床の格納スペースからある物を取り出した。それは盾だった。アベンジャーズ内乱時の傷は完全に修復されている。そしてユニフォームも新調されたものが入っていた。
「トニーはキャプテンが戻ってきた時に備えて準備していた。出来れば直接渡したかったそうだ」
「…ありがとう。やはりこいつが一番だ」
　着替えた後カークから最新の情報について説明を受けた。ガー

ディアンズは間もなくリアリティ・ストーンが保管されているノーウェアに到着するそうだ。またタイム・ストーンを管理しているドクター・ストレンジもトニー達と合流。今回の戦いに参加してくれるそうだ。ソーはニダベリアに到着したがサノスのせいで手こずっているらしい。
「なおクリントだが現在彼は自宅軟禁中だから連絡はしていない。彼には守るべき家族がいるからな。邪魔するのは良くない」
「そうだな。ワンダとヴィジョンには連絡済みなのか？」
「ネガティブ。これからしようと思っている。ビデオ通話にして…出るかな？」
　カークが壁のパネルを操作するとモニターにワンダとヴィジョンが映った。あれ、ヴィジョンが人間みたいになっている。めっちゃイケメンじゃないか。
『スティーブ？それにサム、ナターシャも。どうやってこの番号を…』
「ワンダ、電話を切らないでくれ。ヴィジョンが狙われている。いや、厳密に言うとマインド・ストーンが狙われているんだ。もうすぐエディンバラに到着するから一緒に来て欲しい。トニー達も動いているしバナーも宇宙から帰ってきた。もう一度チームで戦う、だから協力してくれないか？」
『何故私の額にあるストーンが狙われている？またヒドラの連中か？』
　かつてマインド・ストーンはロキが杖に入れて使っており、その後はヒドラが奪ってワンダとその双子の兄であるピエトロ・マキシモフの人体実験に使用していた。最終的にアベンジャーズが回収し、紆余曲折を経てヴィジョンの額に収まっている。またヒドラが狙い始めたとヴィジョンが考えるのも不思議ではない。
「正直ヒドラが狙っていた方がまだマシだったよ。今回の敵は宇宙からやってくる。ストーンを集めてとんでもない事をやらかすつもりなんだ」
『分かったわ、すぐに準備する。どこに行けばいい？』
　既にカークは地図で着陸場所を選んでいた。その場所を告げる。

「エディンバラ・ウェイヴァリー駅の近くにあるセント・アンドリュー・スクエア・ガーデンまで来て欲しい。街のど真ん中だが素早く着陸して君達を回収する。可能か？」
『問題ないわ。今すぐ移動する』
「ではまた後で」
　通話を切った後気になった事をカークに尋ねる。
「そういえばカーク、この機体はレーダーには映らないのか？」
「もちろん。このレイブン、そして俺の艦であるディスカバリーには遮蔽装置が搭載されている。電磁スペクトル及び既存の全センサーから身を隠し、尚且つ視覚からも消し去るステルス技術、それが遮蔽装置だ。この世界の地球の技術では１００％検知不能だから安心してくれ」
「すごい技術だな。音も聞こえないのか？」
「当然。まあ大気圏内だと離着陸時の風でバレるかもしれないな」

　ロマノフは機内に置いてある武器に興味津々だった。
「これは拳銃タイプ、でこっちがライフル…」
「それは我が連邦の標準装備だよ。拳銃型がタイプ２・フェイザー、ライフル型がタイプ３・フェイザーだ。どちらも極めて高威力だから取り扱いにはご注意を」
「…そんなに威力があるの？このサイズで？」
「どっちも人体を一瞬で蒸発させる程度の破壊力がある。タイプ２なら最大出力で巨大な岩石を吹き飛ばせるぞ。一応麻痺モードがあるから非殺傷兵器としても使えるけど、至近距離からぶっ放すと肉体や内臓が機能不全起こして死んじゃう事も稀によくある」
「おう…」
　ロマノフは静かに持っていたタイプ３・フェイザーを元の位置に戻した。
「でもあなたが持っている武器は実弾兵器よね？」
「俺は元々海兵隊で訓練を受けて、その後特殊部隊の訓練を受けた。フェイザーは便利だし強力だけどパワー切れになったらただの鉄屑

になる。だから実弾兵器の方が好きなんだ。実弾兵器は今よりあまり進化してないよ、ほら」
　そう言ってカークは最初に会った時に持っていたアサルトライフルをロマノフに渡した。確かに見た目はアメリカ軍が使っているＭ４カービンにそっくりだ。サプレッサーにフォアグリップ、ＡＣＯＧのような照準器が付いている。
「サイトが見やすくていいわね。それに近接用の投影型レティクル…持ちやすいし気に入ったわ」
「ディスカバリーに戻ったらもっと色々な武器がある。この戦闘スーツ一式も用意するよ。スーツがあればこういうのも使えるようになる」
　カークは左腕から素早くシールドを展開した。僕の盾みたいだ。
「これは格納型シールド。ほぼ全ての実弾兵器を止める事が出来る。時間制限付きだけどエネルギー兵器も防御可能、フェイザーも含めてね。試験では戦闘機搭載の３０ミリ機関砲も食い止めた。でもレールガンを撃ったら流石に１０発くらいで壊れたよ」
「いやレールガン止めれるだけでもすごいでしょ」
　ロマノフがそう言うとカークは悲しげな表情で首を振る。
「そうでもないさ。俺が所属している惑星連邦は設立以来約１０世紀の間、とんでもない敵達とひたすら戦ってきたんだ。流石にサノスのようなイカれた野郎はいなかったけど、それでも敵は強力な軍隊を保有する恒星間国家だったり機械生命体だったりした。その過程でとんでもない数の軍人や民間人が死んだ。俺も多くの友人を失った。俺の艦も、これらの武器も、全ての設計図は先人達の血で書かれている。我々は今の世代を守る為、そして次の世代を守る為にも技術開発を止めてはいけない。だから決して現状に満足してはいけないんだ」
「１０世紀も戦いを!?尋常じゃないな…」
　彼のいた宇宙にはとんでもない連中がうじゃうじゃいるということか。この世界の人類は惑星間移動すらままならない状態だ。もっと宇宙関連技術の発展が進まないとな。この戦いが終わったらトニーやバナーに話してみるか。あとワカンダにも協力してもらえな

いかな。

　エディンバラの着陸地点には既に２人が待っていた。カークはレイブンを静かに着陸させてから遮蔽装置を解除。２人を素早く機内に招き入れた。
「スティーブ、それにみんな。久しぶり。あなたは初めましてよね？私はワンダ・マキシモフ。彼はヴィジョン。よろしくね」
「ジェームズ・Ｔ・カークだ。こちらこそよろしく。ではアベンジャーズ本部に行こう。でもよく考えたら遠いな」
　確かにこのエディンバラからニューヨークまでは直線距離で約５０００キロメートルは離れている。１時間以上はかかるだろう。
「今は時間が幾らあっても足りないし…よし、ちょっと近道するか。全員座席に座ってジェットコースターみたいな安全バーを下げてくれ」
「どうするつもりだ？」
「ブースターを使う。このレイブンは追加パーツ無しで第三宇宙速度を超える速度を出せるんだ」
　壁を背にする形で配置されていた座席が回転して正面を向く。こいつは嫌な予感しかしない…
「第三宇宙速度…時速換算で６０１００キロメートルより速く飛ぶのか!?」
「ブースターを使えばこいつは時速１３００００キロメートルまで加速する。ここからニューヨークまでなら3分くらいで着くぞ。よし、ブースター点火！思い切りかっ飛ばせ！」
　数秒後、機外から凄まじい音が響くのと同時に一気に加速を開始した。僕達は極めて強いＧのせいで座席に押し付けられている。正直息も出来ないくらいつらい。なのに隣にいるカークはまるで子供のような笑みを浮かべている。しかもこっちを向いて話しかけてきた。
「そう言えばみんな飯は食べた？腹が減ってるならディスカバリーで用意するよ。ハンバーガーから寿司まで何でも作れるからな」
「そ、れは…楽しみ、だ！」

「ちなみに俺が一番好きなハンバーガーはカールスジュニアだな。あのパティが美味しくてたまらないんだ。次点でバーキン、あとベガスのハートアタックグリルも最高だな」
　呑気にバーガーの話をするカーク以外の全員が考えていたのは、こいつ体が丈夫過ぎるしメンタル強いな！ってことだった。

　やっぱブースターで加速するのは楽しくていいな！みんな静かだったけど疲れてたのかな？まあいいか。アベンジャーズ・コンパウンドに着いたのはその3分後だった。ロスにバレないようにアメリカが保有する偵察衛星は全てハッキング済み。キャプテン達が映らないようにしてある。着陸するとトニーとバナー、ストレンジが待っていた。
「やあスティーブ」
「トニー」
　トニーとスティーブは和解の握手。お互い笑っている。これが見たかった。原作みたいにサノスにやられないようにしないと。で俺はストレンジと握手。
「初めまして。ジェームズ・T・カークです」
「ストレンジだ、よろしく。トニーから君は別世界から来たと聞いた。どんな世界なのか興味があってね」
「なかなかスリルがあって面白い世界ですよ」
　和やかに話す一方で…
「や、やあナターシャ…」
「私の事を覚えていたのね、ブルース・バナー。最後の通信は途中で切られるし全然連絡もないし探しても見つからないし、てっきり忘れられたのかと思ってたわ」
「そんな、君の事を忘れるなんてありえないよ」

「ならあなたは3年もどこをほっつき歩いていたのかしら？」
「いや、それには複雑な事情があって…」
「事情？あらそうなの。なら話をしましょうか、その事情とやらについて」
「待って…首が締まる…引きずるのは…」
ブルースは般若と化したナターシャに首根っこ掴まれて建物の中に消えていった。明日の朝食は赤飯でも用意しないとな！でも赤飯文化はアメリカじゃ通用しないか。
「これでカップル成立かな」
「そうだな」
その場にいた全員でうんうんと頷く。

5：出撃

キャプテン達がアベンジャーズ本部に到着した翌日。全員でディスカバリーの会議室に移動していた。レプリケーターでそれぞれ好みの朝食を用意して優雅な朝食タイム。トニーとスティーブは昨日の夜遅くまで語り合っていたみたいで、今は昔みたいに仲良くなっている。俺はストレンジやサムに３２世紀の話をしてあげた。タイムトラベルに興味を示していたけど絶対やめとけと注意しておいた。そしてバナーとナターシャだけど、バナーは妙に痩せてるしナターシャは肌がツヤツヤしている…何も言うまい。

「さて、では今後についての話をしよう」

俺はホログラムでガーディアンズとソーの居場所を表示させた。

「まずガーディアンズだがリアリティ・ストーンの回収に成功したとの連絡を受けた。現在地球に向かっている。そしてソーはムジョルニアに変わる新たな武器を作らせたそうだ。その過程で焦げたみたいだけど」

「焦げた…？」

なんで武器作るだけで焦げるのかね？まあ普通はそう思うよな。

「これで地球に４つのストーンが揃う事になる。サノス、そして我々が手に入れていないソウル・ストーンについては、ガーディアンズのガモーラしか場所を知らない。故にサノスは間違いなく地球に来るだろう」

そこでサムが口を挟んできた。

「それはわかったけど問題がある。地球のどこで戦うんだ？都市部は論外だ、民間人の犠牲を出す訳にはいかない。かと言って俺の国で戦ってもいい、なんていう国はないだろう」

「確かにその通りだ。今考えているのは月の公転軌道でサノスのサンクチュアリⅡを沈めてしまう作戦だ。火力はそこそこあるが所詮は図体がでかいだけの船だ、あっという間に沈めてやる。地球に向かう破片等はフェイザーで蒸発させれば問題ない」

「それなら確実にサノスを殺せるだろうが、あいつが持っているパ

ワー・ストーンも一緒に吹っ飛ばないか？」
　トニーの主張も無視できないな。
「その可能性は残念ながら大いにある。でも狙う奴がいるならいっそ破壊した方が良くないか？」
「それはまずい。パワー・ストーンが物理的に破壊されると、とてつもなく破壊的なエネルギー放射が発生する。月でそんな事をすると月はもちろん地球にも甚大な被害が出るだろう」
　ストレンジさんそれは初耳っすよ…
「ならこちらから打って出るしかないな」
「だがどこで？地球以外で大気が存在して戦っても問題にならない惑星なんか…」
「1つある」
　俺はモニターにとある惑星を表示した。
「タイタン。ここには大気もあるし人もいない。完全に放棄された無人の惑星だ。ここなら好きなだけ暴れる事が出来る」
「確かに大きな惑星だ。ならここにしようか」
「異議なし」
　全員の同意を得られた上で次の議題へ。
「ヴィジョンに聞きたいんだが、その額にあるマインド・ストーンはやっぱり外せない感じ？」
「そうだ。これは体と一体化しているから外す事は不可能だ」
「やはりか…実は試したい事があったんだが…」
「どんな事だ？」
「実際に見てもらったほうが早いと思う。ロキ、すまないがスペース・ストーンを貸してくれないか？すぐ返すから」
「ん？いいぞ、ほれ」
　ロキから借りたスペース・ストーンをレプリケーターにセット。もちろん直接触ると危なさそうなので手にシールドを張ってある。
「ありがとう。データ、やってくれ」
「了解です」
　ストーンのあちこちをスキャンする。しばらくすると結果が出た。

「艦長、スキャン完了しました」
「出来そうか？」
「可能ではあります。しかし作成には１２時間程掛かります」
「艦の余剰エネルギーをレプリケーターに全部回したらどうだ？」
「それでしたら１５分で出来ます」
「やってくれ」
「了解」
　ストーンをロキに返してレプリケーターが動き出すのを眺める。
それを見たバナーが顔をひきつらせながら聞いてきた。
「なあジム、まさかとは思うけど…」
「そのまさかだ。軽く説明すると、本艦に搭載されているレプリケーターは分子を材料として、実物とほとんど変わりのないコピーを作り出す事ができる。例外として生体や一部の物質は作成できない。だがスペース・ストーンはコピーできるようだ」
　そうそう、みんなには俺の事をジムと呼んでもらう事にした。いつまでも名字だとなんか嫌だし。てかレプリケーターは放射性物質の類いも作成出来ないはずなんだが…微弱なγ線だから大丈夫なのかな？まあいいか。てかみんながフリーズしてる。
「どうした？なんか変な事言ったか？」
「いやいやいやいやおかしいだろ！」
　そう言いながら立ち上がるのはロキ。
「インフィニティ・ストーンは概念を司るエネルギーの結晶石だぞ？それをたった１５分でコピーできる？あり得ない、というかあってはならない事だ！宇宙の均衡が崩壊してしまう。そもそもコピーしてどうするつもりなんだ？」
「サノスを騙してからかってやろうかと思ってね。俺が今作っているのはストーンの劣化コピー品だ。実際に使おうとしたら崩壊するようにしてある。俺のプランはこうだ。スペース、マインド、タイム、リアリティの４つの海賊版を作ってタイタンへ持っていく。それに釣られてやって来たサノスと愉快な仲間たちを殲滅する。もちろん本物は地球で保管しておく」

本物は遮蔽装置付きの箱かなんかを作ってしまっておけばサノスも探知できないだろう。見た目と波長が本物にしか見えない偽物を用意すれば絶対にそっちに釣られるはずだ。
「確認なんだが、ストーンの完全なコピーは作成できないんだよな？」
その疑問についてはデータが返答する。
「不可能です。本艦のジェネレーターを全力稼働させたとしてもエネルギーが全然足りません。実行するには最低でも複数のクエーサー、もしくは超大質量ブラックホールレベルのエネルギーが必要です」
「そうか…」
ロキは心底ホッとしたようだ。確かにあんなのをポンポンコピーされたらたまったもんじゃないしな。しかしヴィジョンは納得出来ないみたい。
「ジム、君の作戦を採用した場合、私は地球で留守番をしなければならないという事だな？皆が宇宙の為に戦うのに自分だけ地球にいるのは納得出来かねる。だが君の主張するストーンの破壊については同意する。パワー・ストーンは力の概念の結晶だから破壊されると甚大な被害が出る。一方精神の概念の結晶であるこのマインド・ストーンが破壊されてもそこまで被害は大きくないだろう。せいぜい近くにいる人が吹っ飛ぶ程度で済むはずだ」
ヴィジョンの発言に会議室の空気が凍った。
「ヴィジョン、自分が何を言っているか理解しているのか？マインド・ストーンを破壊すれば君も死ぬんだぞ？」
「もちろん理解している。だが地球を守る為なら必要な犠牲だ」
「それは隣で半べそをかいているワンダを見ながら言ってくれよ」
ヴィジョンとワンダは恋人の関係だしな。ワンダは涙目でヴィジョンの両肩を掴んだ。おや、ワンダの様子が…？
「どうしてそんな事言うのやめてよ駄目よ絶対に認めない私を置いていかないでおかしいでしょ私達恋人でしょ無視しないでよ私を捨てないでずっと一緒にいて死ぬなら一緒に死なないと駄目よ貴方を守る為ならなんだってやるわ貴方は私が守るから命を懸けて守るからだから私から離れないで勝手に大事な事決めないできちんと相談し

て酷い事しないでもう大切な人がいなくなるのは嫌なのお願い」
「おおお落ち着けワンダ」
　あれれ～おかしいぞ～？いつの間にワンダはヤンデレになってんの？みんな引いてるやん。いや～ヴィジョンには献身的な彼女がいて羨ましいな～（棒
「ワンダも反対しているしストーン破壊は駄目だな。取り外すのも無理だし」
「それについて考えがある。ワカンダに協力を仰ぐのはどうだろうか？」
　スティーブの案はワカンダの王であるティ・チャラに協力をお願いするというもの。確かにあの国は地球上で一番発展しているしな。
「そんな国が地球にあるとは…だがそれだけ技術力が発展しているなら可能性はあるな」
「僕からコンタクトを取ってみるよ。あの国は信頼できる」
「頼んだ」

　スティーブが連絡したところブラックパンサーことティ・チャラが協力してくれる事になったので、ヴィジョンは地球待機組になった。ただヴィジョンだけ置いてけぼりだと発狂しそうなワンダもセットでお留守番。あとストレンジも同じくお留守番に。ストレンジには個人的にお願いをしておいた。
「ストレンジ、これを渡しておく。もしこの通信機器が起動したらタイム・ストーンで時を戻してくれ。勝てるまでやり直したいからな」
「保険という訳だな、わかった。だがジム、我々が負ける未来はきっと来ないだろう」
「そう願っているよ」
　その後3つの偽ストーンが完成した。実際にロキやストレンジに確認してもらい合格点を貰った。また遮蔽装置付きの大きな箱も用意した。これに入れておけばストーンは探知できない。
「あとはガーディアンズとソーが戻ってくれれば…」
　そんな事を言っているとディスカバリーの横に光の線が出現し、中

からスペース・ポッドが飛び出してきた。あれ、ビフレストって人だけじゃなくて宇宙船も飛ばせるんだっけ？まあいいか。スペース・ポッドが格納庫に入った直後に緊急通信が入った。
『ディスカバリー、こちらベネター号！緊急事態だ！サノスに見つかった！』
「ピーター、状況は？」
『攻撃が激しい！このままじゃ捕まっちまう！』
「すぐに救援に向かう。あと５分持ちこたえてくれ！」
『わかった！』
　通信を切断して全員に向き直る。
「という訳で、出撃しよう。まずはワカンダでヴィジョン、ワンダ、ストレンジを降ろす。その後すぐに宇宙に上がる」
「分かった。そう言えばジム、ロスの対策はどうするつもりなんだ？」
「それだが…ちょっとみんなに協力してもらいたい」

　アベンジャーズ・コンパウンドから１０キロメートル程離れた場所に白いバンが駐車していた。見た目は普通の車だがその中身は監視装置で埋まっている。国務省の偽装監視バンは長官命令でディスカバリーの様子を遠距離から監視していたのだ。
「おい、あれを見ろ。動きだしたぞ！」
「何だって!?」
　モニターには徐々に姿が消えていくディスカバリーが高度を上げながら大西洋に向かって行く様子が見えた。
「長官に報告だ、急げ！」
　報告を受けたロスはすぐにカークから渡された連絡先に電話をかける。
『カーク艦長だ』

「国務長官のロスだ。艦長、君はどこに行くつもりなんだ？」
『もちろん地球を救う為に宇宙へ行きます。敵グループの首謀者の現在位置が分かりましたので。それより委員会の招集はいつです？』
「それは…まだだ。各国との調整に時間が掛かる。だからそれまで待ってくれ」
『正直待っていられません。地球上で戦うとニューヨークやソコヴィアレベルの被害が出るでしょう。例え勝ってもあとからギャンギャン文句を言われるのが容易に想像できる。だから地球では戦わず宇宙で戦う事にします』
「…艦長が行くのは止めないがスタークや他のヒーロー連中が行く事は許さない。協定にサインしている以上従ってもらわないと困る」
その後聞こえてきた言葉にロスは凍りついた。
『そう言うと思いましたよ。だからちょっとした強硬策を取らせてもらいました。スタークや他のヒーロー達の家族や大切な人を人質にとりましてね』
「……は？」
絶句するロスの耳にはスタークやバナー達の怒号が聞こえてきた。ペッパーを返せだのロマノフに何かあったらぶっ殺すだの…どうやら本当にやったみたいだ。
『いや厳密に言うと彼らの家族や大切な人の近くに暗殺に特化した戦闘ユニットを常時配置しています。高度なステルス機能を備えているので、あなた方の力では把握すら出来ませんがね。スタークや他のヒーロー達も本当は行きたくないけど家族が人質になってるから仕方なく戦いに行く事を決めたんです。だから文句は私だけに言って下さい。それにクリントとスコットは今回声をかけていないのでご心配なく』
「あ、あり得ない！そんな馬鹿な言い分が通るとでも…」
『通りますよ。あなたが大好きな協定にはいろんな事がごちゃごちゃと書かれていますが、書かれていない事を罰する事は出来ないでしょう？それに私は協定に参加していませんし』
まさかヒーローの家族を人質にとって、無理やり戦わせる奴が出て

くる想定をロスはもちろん誰もしていなかった。
『まあそういう事なので我々は行きます。恐らく1週間もしないうちに帰ってくると思います。祝勝会の準備でもしておいて下さい。ではご機嫌よう』
そう言ってカークは通信を切った。しばらくロスはフリーズしていたが、受話器を叩きつけると同時に盛大にキレた。
「ちくしょーめ!!」

「みんな協力ありがとう。これでロスや国連は放置できる。早速移動しよう。データ、ブラック警報発令。目的地はワカンダ上空」
「了解、ワカンダにジャンプします」

6：救出任務

ワカンダでヴィジョン、ワンダ、ストレンジの3人を降ろした後、すぐに胞子ドライブでピーターのところまで連続ジャンプ。やっぱ胞子ドライブはチート技術だよなあ。みんなで艦橋に移動して雑談しているうちに現場に到着したが…

「あちゃーこれはひどい」

どでかいサンクチュアリⅡがベネター号に向けて集中砲火を浴びせている。弱いものイジメにも程があるだろうに。小型軽量で機動性も高いベネター号はうまく攻撃を避け続けている。

「こちらディスカバリー、待たせたな。これより攻撃を開始する。ピーター、俺の船の影に隠れろ。あいつの攻撃で沈む事はないからな」

『待ちくたびれたぜ！』

ベネター号の退避を確認してから俺は指を鳴らす。

「データ、異世界のヒーロー達に我々の戦いを見てもらおうじゃないか」

「そうですね、艦長。あのイカれたハゲに惑星連邦宇宙艦隊の授業料がいかに高額か教育してやりましょう」

サンクチュアリⅡはその巨大な船体に無数の対地対空両用砲及びミサイル発射装置を備えている戦艦だ。その戦闘力は宇宙一であるとサノスは自負していた。パワー・ストーンの保管場所であるザンダー星もこの船で焼け野原となったし、今まで戦ってきたどんな敵もこの船を沈める事は出来なかった。

サノスにとって不幸だったのは相手が悪すぎた事だった。まずディスカバリーのシールドが硬すぎてサンクチュアリⅡの攻撃が全

く効いていない。全ての攻撃が命中しているにも関わらず、ディスカバリーの船体には傷一つ付いていない。一体あのシールドは何で出来ているんだ、とサンクチュアリⅡの乗組員全員が思っていた。

更にサノスを驚かせ、そして苛つかせたのはディスカバリーが搭載している兵装だった。あの船体から放たれる青いレーザー光線はサンクチュアリⅡの船体を容易に切り裂いてくる。ステイツマン襲撃時にディスカバリーから受けた攻撃のせいでQシップは既に宇宙の藻屑となり、船体の修復については簡単に済ませた状態だった。それを見越したかは不明だが、ディスカバリーはその修復箇所を狙って攻撃してきた。そのせいで船体右の翼が中央部分からへし折れてしまった。

おまけに船体のあちこちにミサイルが着弾すると、船体に穴ができるかわりに何故か船内のシステムが次々とダウンしていく。ディスカバリーから発射されたイオン・ミサイルの集中攻撃によるものだった。射撃管制装置や各種センサー等が次々と機能不全を起こし、挙句の果てには主機関までもが緊急停止。この攻撃でサンクチュアリⅡは完全に沈黙し、丸裸の状態となってしまった。非常電源により最低限のシステムは稼働しているが、戦闘艦としての機能はゼロになった。

そんな船内でサノスの部下達が右往左往している中、ある女性が拘束装置から抜け出す事に成功した。装置に供給されていたパワーが切れたおかげだ。女性は痛む体を引きずりながら愛用の武器を回収して外の状況を確認する。窓から外を見ると見慣れない宇宙船と見慣れた宇宙船がいた。

その女性、ネビュラは見慣れた宇宙船ことベネター号に通信を繋いだ。

「艦長、敵艦はイオン・ミサイルにより完全に沈黙しました。最低でも

３０分は再起動不能となるでしょう。それに翼を大きく損壊しているので電子機器が復旧したとしてもすぐには動けないかと」
「よくやった、データ」
　トニーはあっという間に敵の巨大戦艦を無力化したディスカバリーの性能に驚きを隠せなかった。スティーブ達も唖然としている。だが当のカークはつまらなそうな表情だった。
「どうしたジム？なんでそんな顔してるんだ？」
「いや、どうにもしっくりこなくてね。なんというかこう、噛みごたえがないなと。あんなどでかい船なんだからもっと強力な兵器を搭載してると思ってた。シールドがないのは分かっていたけどショボい砲とミサイルしか積んでないって…はぁ」
　どうやらもっと派手に戦いたかったらしいな。
「まあ気持ちはわからんでもないけど、とりあえずピーター達が無事だからいいんじゃないか？」
「それもそうか。よし、じゃあ針路をタイタンに向けるとしようか。あ、でもその前に」
　そう言うとカークは折れた敵船の翼の近くに船を飛ばし、あろうことかその翼をトラクタービームで引き寄せ始めた。
「な、何してんだジム？」
「こんな事言わなくてもわかっていると思うけど、この艦橋にいる全員はみんな優しい心を持っている。落とし物を見つけたら持ち主に返すのは当然の事だろう？だからこの折れた翼を返してやろうと思ってね。ただし思いっきり振りかぶって投げつけてやる。なーに、パワー・ストーンを持ってるサノスならノールックで、しかも片手でキャッチできるだろうよ！」
　どうあがいてもオーバーキルじゃないか。だが放り投げる前にピーターから通信が入った。
『ジム、そのデカい破片を投げつけないでくれ！敵の船に味方がいる！』
「味方だって？スパイでも忍ばせていたのか？」
『違うの。私の義理の妹、ネビュラがサノスに捕まっていたみたい。

でも混乱に乗じて船から脱出しようとしてるの。お願い、彼女を助けて！』
　ガモーラの話だとサイボーグ化したネビュラから通信が入ったそうだ。昔は殺し合っていたらしいけど少し前に和解してサノス打倒の旅に出ていたらしい。
「家族なら絶対に助けないとな。分かった、何とかしよう」
　通信を切ったカークは即座に救出作戦を計画した。参加するメンバーはカーク、俺、スティーブ、そしてソー。短時間で素早く任務をこなすという訳だ。
「だがジム、どうやってあの船に乗り込むんだ？あの降下艇を使うのか？」
　スティーブの質問にジムは首を振る。
「時間がない。だからこれを使うんだ。みんな胸に付けてくれ」
　渡されたのは小さな楕円形のバッジみたいなもの。いつもカークが左胸に付けているものと同じだな。
「詳しい説明は省くがこいつには転送装置が組み込まれている。これを使って直接乗り込む」
「て、転送装置？」
「こういう事だ」
　そういうと俺の目の前にいたカークが突然消えてスティーブの後ろに出現した。こんな小さな装置でワープができるのか!?３２世紀ヤバいな。ちょっと練習したけどこれは便利だ。
「ディスカバリーが敵艦の上を通過する時に転送装置で侵入。負傷しているネビュラを確保したらディスカバリーに戻りタイタンへ撤退する。所要時間は５分もかからないな」
「交戦規定は？」
「ステルスを維持。極力見つからないようにする。だがバレた場合は派手にやろう。捕虜はいらん、皆殺しだ」
　サプレッサー付きアサルトライフルに弾倉を入れながら冷静に話すカークの目は軍人のそれだった。チェストリグには各種グレネードや予備弾倉、レッグホルスターには拳銃型フェイザーが収まってい

る。

もうネビュラ捕まってたんか。でも救出できるならしておかないとガモーラがサノスに連れて行かれる可能性があるからな。急いで救出しよう。

「よし、行くぞ」

他の３人に合図してサンクチュアリⅡの船内に転送。転送場所は倉庫のような場所で無人だった。ＨＵＤにはネビュラの位置が表示されている。ここから２０メートル離れた部屋に隠れている。

「こっちだ」

通路を進み、曲がり角を覗き込むとチタウリ・ソルジャーが廊下をうろついていた。しかもこっちに来る。ハンドシグナルで３人を待機させ、俺は腰のベルトからある物を取り出した。両手で握れるほど長い柄と斜めに傾斜した鍔を持つそれは、一見ナイフのように見えるが肝心の刃がない。チタウリが曲がり角に差し掛かった瞬間、俺はスイッチを入れながらチタウリの胸にそれを突きつけた。

その瞬間、ぼんやりとした白色光に縁取られ、不気味な輝きを放つ真っ黒な刀身がチタウリの胸を貫いた。力と敏捷性強化、更には電子神経回路網によるサイバネティクス的補強まで施されたサイボーグであるチタウリだったが、このダークセーバーの前には無力だった。黒いプラズマブレードが一瞬で反応炉を蒸発させ、チタウリは何が起きたかわからない、という表情のまま死んだ。

「ジム、それは？」

死体を倉庫に押し込んだ後にソーが聞いてきた。

「こいつはダークセーバー。プラズマブレードを展開する剣だ。静かに殺すなら刃物が一番だしな。隣の部屋だ」

部屋に入ると壁際に座り込みこちらに銃を向けている女性がいた。ネビュラだ。

「おっと撃つな、味方だ。ガモーラから君の救出依頼を受けた」

「あんた、達は…？」

「アベンジャーズ、地球のヒーローチームだ。まあ俺は違うけど。とにかく行こう」
　でも部屋を出た瞬間警報音があちこちから鳴り始めた。
「バレたか!?」
「みたいだな。データ、急いで戻ってこい！」
『了解、到着まで３０秒』
　でも敵は３０秒も待ってくれない。通路の奥から敵がやってきた。
「こっちは俺とソーが守る。スティーブ、トニーは反対側を頼む。あと３０秒だけ耐えれば良い！」
「分かった！」
　ソーが新しく作ったストームブレイカーをぶん回して暴れている横で、俺はＮＶ４で敵を倒していた。威力不足かもと思っていたが普通に倒せるみたいだな。しかし敵がやたらめったら多い。
「あと１５秒！」
「敵が多すぎるぞ！」
　トニーやスティーブも大変そうだけど待つしかない。それに時間稼ぎをするにはピッタリのデバイスがある。チェストリグから反重力グレネードを取り出して２つをスティーブに投げる。
「スティーブ、これを使え！敵を足止めできる！」
「わかった！」
　俺もグレネードを敵の足元に投げつける。すると半径２．５メートル内の重力が消失して敵は宙に浮いてもがき始める。これが反重力グレネードだ。浮いてる敵を撃ち殺しつつ、ついでにプラズマグレネードもあるだけ全部投げつけておく。
『艦長、まもなく到着。カウントを開始します！』
「わかった！間に合いそうにないならそっちで強制的に転送してくれ！みんな、俺が合図したら転送装置を起動しろ！」
「「了解！」」
　ＮＶ４の弾を使い切ってしまったので、レッグホルスターから抜いたタイプ２・フェイザーで攻撃。敵が一瞬で蒸発しやがる。これは危ないけど威力は十分だ。次からタイプ３・フェイザーも持ってこよ

う。
「ジム、あれを見ろ！」
ソーに言われて通路の奥を見る。するとなんか強そうな４人組を従えた大きくて紫色の野郎がいた。反射的に俺は紫色の奴を指差し叫んだ。が、たまたまそいつの名前をど忘れしてしまった。
「みんなあれを見ろ！ハゲだ！つるっつるの紫ハゲが来たぞ!!」
「ぶっふふっ…！」
それを聞いたネビュラが吹き出しサノスは動きを止めた。そうだ、あいつの名前はサノスだった。理由は不明だがどうも怒っているみたいだ。まあ船はボロボロにしたし、チタウリも殺しまくったし、怒るのも無理はないかな。
『3…2…1！』
「今だ！」
顔を真っ赤にしたサノスがチタウリを押しのけながら突進してきたけど、俺はネビュラを抱えて転送装置を起動して一瞬でディスカバリーの艦橋に戻った。トニー達も怪我なく戻ってきた。
「作戦成功、全員無事で何よりだ。データ、遮蔽装置起動。ベネター号を掴んでジャンプしろ」
「了解です、艦長。タイタンまで胞子ドライブで連続ジャンプを開始」

「クソ！また逃げられた！」
サノスは怒り狂っていた。あと少しでリアリティ・ストーンを手に入れるところだったのに、あの忌々しいディスカバリーに邪魔された上、サンクチュアリⅡも大損害を被った。更に捕らえていたネビュラも奪還される始末。おまけに…いや、髪の話はやめよう。
「サノス」
そんなサノスに声をかけるコーヴァス・グレイヴ。

「なんだ？」
「あのディスカバリーと呼ばれる船からインフィニティ・ストーンの反応を検出しました」
「ほう、いくつだ？」
「４つです」
　つまり今も場所が不明なソウル・ストーン以外の４つ全てがディスカバリーに搭載されているということになる。
「奴らの現在位置は？」
「タイタンに向かっているようです」
「…タイタンか」
　かつての故郷に敵が向かっている。そう聞いたサノスは一瞬だけ懐かしさを感じた。
「船が直り次第タイタンへ向かう。最悪の場合、大気圏に強行突入して構わん。数で攻めれば勝てるだろう」

7：待ち伏せ

よし、タイタン到着！大気圧及び大気性質は人間が問題なく呼吸可能である事を確認した。でも所々で重力異常が起きている。かつて住んでいたタイタン人が築き上げた廃墟や残骸があちらこちらに散乱している。廃墟マニアはさぞ喜ぶだろうな。

「ネビュラ！」

「ガモーラ…」

タイタンの地表で２人の姉妹は無事に再開を果たした。良きかな良きかな。

「怪我はそこまで酷くないみたいだけど、かなり酷い拷問を受けていたみたいだな」

「大丈夫…痛いのは慣れてるから。それにこれくらいで休むのは性に合わない。私も戦うわ」

「ありがとうネビュラ…それにしてもサノスめ、絶対に許さない。頭に脱毛剤かけてやる」

「ぶっ！」

どうやらネビュラは俺のハゲ発言がツボっているらしい。どう見てもハゲだけど周りの連中にとってサノスは上司だから言えないんだろうな。でもサノスがフサフサになったらそれはそれで面白そう。ロキみたいなサラサラヘアーのサノス…あかん、視界に入っただけで腹筋崩壊する。昔海外のシャンプーのＣＭでおっさんが女性みたいなサラサラヘアーになってたやつを思い出したわ。

それはさておきサノスが来る前に準備をしておかないとね。まずガーディアンズが入手したリアリティ・ストーンの海賊版を作成。本物は５分で地球に戻りワカンダに置いてきた。ヴィジョンのマインド・ストーンは時間がかかるけど取り外し可能だそうな。良かった良かった。

タイタンに戻ってから海賊版ストーン４つを収めた箱を開けた場所にセット。蓋を開ければストーンが綺麗に並んでいるのが見える。

金ピカ手袋に装着するまでは本物と同じように振る舞うけど、そのパワーを使おうとした瞬間に破壊するようになっている。その時の表情はカメラで見るとしよう。ついでにロングヘアーのウィッグも入れておいてやろう。

次。タイタン軌道上に機雷を大量に設置した。アメリカ海軍が運用しているＭｋ６０キャプター機雷のように、目標を探知すると発射管に装填されたミサイルが発射される。これは有り余っているポイントで購入しました。ミサイルの種類は７割がイオン・ミサイル、２割がデコイ、そして残りの１割が光子魚雷。軌道上で確実にサンクチュアリⅡを破壊する為だ。

だがあのデカブツをサノスごと吹っ飛ばす訳にはいかない。あいつの手にはパワー・ストーンが残っているからな。船の中枢、具体的に言うとサノスがいる艦橋部分以外を破壊するようミサイルにプログラムしておいた。そうすれば間違いなくサノスはストーンの力を使ってこちらの攻撃を防ぎながらタイタンの地表に降下するだろう。

念の為メンバー全員に個人用シールド発生装置とコムバッジを渡してあるからやばくなったら転送で逃げる事ができる。敵がどれだけタイタン地表に降りてくるかはわからないけど、明らかに数で押されてまずい状況になったらディスカバリーの格納庫からあるものが投下される。正直使いたくないけど宇宙を守る為ならやむを得ないよね！

「…という感じの作戦だけど何か質問は？」

みんなの前で説明を終えるとナターシャが手を挙げる。

「まずい状況になったら使用すると言ったあるものって具体的にどんなものなの？」

「２つある。１つは極めて特殊な戦闘用サイボーグ。もう１つは、その…これ」

「何それ？」

俺は足元に置いたリュックサックから緑色の物体が入った小さなアンプルを取り出した。

「連邦内での呼称は多用途広域制圧兵器となっているが、ずばり言っ

てしまうとこいつの正体は生物兵器だ。正式名称はマンティコア」
そう言うと全員が一斉に後ずさる。マンティコアはＣａｌｌ　ｏｆ　Ｄｕｔｙ：Ａｄｖａｎｃｅｄ　Ｗａｒｆａｒｅでおなじみの最終兵器。アトラスはとんでもないものを作ってしまいました。ちなみにこれもポイントで購入した。てか生物兵器なのに意外と安くて驚いた。もっと高くてもいいと思うだが。
「ジム、流石にそれは駄目だろ。いくらなんでも大量破壊兵器を使うのは…」
顔を青くしたピーターがそう言うけどこれは大丈夫なやつだぞ。
「これはただの生物兵器じゃない。ＤＮＡ爆弾とも呼ばれるこのマンティコアは使う前にＤＮＡ登録が必要になる。登録されたＤＮＡの生物には一切の効果を及ぼさないんだ。だから生物兵器の使用条件の厳しさや味方への懸念が殆ど存在しない。僅かな胞子だろうと吸引すると即死する致死量だから、防護服程度では意味を成さない感染力を持つぞ。核兵器よりピンポイントで、化学兵器よりパワフル、そして既存の生物兵器より使いやすいという正に画期的な戦略兵器！ちなみにコストも安いから政治家も納税者もニッコリだ。それに当然だけど使った後に中和剤をまけば兵器は死滅するから安心してくれ」
ブルースが恐る恐る聞いてくる。
「まさか…既に実戦で使った事があるのか？」
「もちろんある。とある惑星で大規模なテロが発生して、その惑星の大統領や側近達が人質に取られた事件があった。その時戦争していた国に唆されたテロリストの仕業でな、要求に応じなければ人質全員を殺すと言ってきた。だがテロリストとは交渉しないのが連邦のルール。それに戦時だからとっとと事件を片付けないといけなかった。連邦所属の民間人・政治家・軍人は全員ＤＮＡ登録をされている。あとはシンプルだ。犯人のＤＮＡ登録を無効化した上で、人質がいる建物に特殊部隊がマンティコアを流し込んでテロリストは全員死亡、事件は解決って話だ」
「テロリスト相手に生物兵器使うのかよ…」

全部ウソだけどね。
「最初は連邦も生物兵器の研究、製造、保有を禁じていた。だが敵が遠慮なく使ってきて複数の惑星が壊滅した事をきっかけに連邦も持つようになったんだ」
「今までの常識が通用しない敵って訳か」
「そうだ。３０世紀に入ってから開発されたのがこのマンティコア。使い勝手が良くて敵以外は殺さずコストも安い。だからテロ等の凶悪犯罪には使用が許可されている。とは言ってもサノスにはパワー・ストーンはあるからこいつも無力化されるかもしれない。だが奴の部下は減らせるだろう。サノスが強くても部下を守りながら戦えるとは思えないからな」

サノスの待ち伏せ準備が整ったので後は待つだけ。俺はその間にポイントで幾つかアイテムを追加で購入した。まず船体表面の装甲を全て量子クリスタル装甲に換装した。スター・ウォーズに出てくる超兵器、サン・クラッシャーの装甲と同じものだ。惑星を木端微塵にするデス・スターのスーパーレーザーを無効化できるから、パワー・ストーンの攻撃にも耐えられるだろう。
それとＳＣＡＲチーム宇宙服を１セット購入してナターシャにプレゼント。ブーストリグの使い方を教えた後に好きな武器もあげた。彼女が手に取ったのは使いやすいＮＶ４とブルパップ方式のサブマシンガン、ＲＰＲ　Ｅｖｏだった。どちらも拡張マガジンとフォアグリップを取り付けた。ショックグレネードやフォームウォールも渡したから問題ないね。
俺の武装はフェイザーで統一する事にした。ライフル型のタイプ３・フェイザーと拳銃型のタイプ２・フェイザー。タイプ３・フェイザーはスタートレック：ピカードで登場していたやつだ。エネルギー切れにならないように増設パワー・セルを取り付けてあるし、予備のパワー・セルをチェストリグに入れてある。雑魚なら一撃で蒸発させれるがサノスや直属の部下は難しいかもしれない。
『艦長、サンクチュアリⅡがタイタン軌道上に出現。攻撃を開始しま

す』
　軌道上に展開したディスカバリーから全員に連絡が連絡が入った。思ったより早かったな。映像を見る限り吹き飛ばした右の翼は置いてきたみたいだな。
「了解、作戦開始だ。今度こそあのデカブツを宇宙の藻屑にしてやれ」

　サンクチュアリⅡがワープ直後に見たのはサノスの故郷であるタイタン。そして離れた場所にいるディスカバリーだった。インフィニティ・ストーンの反応はタイタンの地表にある。サノスは船が破壊されても構わないから地表に向かうよう指示を出した。例え船が壊れてもストーンが手に入れば問題ない、と考えたからだ。
「至近距離に多数の物体有り！恐らく機雷かと…まずい！機雷からミサイル発射！」
　しかしカークが設置した大量の機雷からミサイルが飛んできた事でパニックになる。回避をせずにタイタン地表へ向かうサンクチュアリⅡにミサイルが次々と命中する。多くは先の戦いで使用されたイオン・ミサイルだったので、復旧したばかりの電子機器等がダウンする程度で済んだ。しかし極稀に実弾が装填されたミサイルが混ざっており、それらは船体に大きなダメージを与えた。艦橋へ損害報告が雪崩のように押し寄せる。
「第４、第１０、第１５ブロックで火災発生！」
「艦底部格納庫からの通信が途絶した！誰か急いで見てこい！」
「左主翼に直撃弾！損害不明です！」
「損害箇所が多すぎる！ダメコンが追いつかないぞ！」
　サノスはパワー・ストーンを使い周辺の機雷とミサイルを破壊するも、続いてディスカバリーから飛んできたフェイザーを無効化する事は出来なかった。それどころか短距離ワープを繰り返しながら、常に

サンクチュアリⅡの周りを飛んで攻撃してくる。あの船には性根の腐った野郎が乗っているに違いない、とサノスは思いながら反撃を指示した。
「第４、第８ミサイル発射管に被弾！残弾を強制射出して回路をカットしろ！」
「第７から第１１砲台応答なし！本艦の戦闘能力は現在１９％！」
「敵艦に直撃弾多数！しかし効果は認められない！ビクともしないぞ！」
「リアクター出力が不安定だ！補助機関を今すぐ動かせ！」
「補助機関は右主翼のは吹っ飛んでるし左主翼のは起動しない！何とか安定させろ！」
「ミサイル残弾数に注意！あと４斉射分しかありません！」
　しかし先の戦いで数を減らされた砲やミサイルでの攻撃ではディスカバリーのシールドを貫く事は出来なかった。パワー・ストーンでディスカバリーを捕まえて粉砕しようとしたが、ランダムな場所にワープし続けているので不可能。そこでサノスは強力な衝撃波を全方位に連続で発射する事に。この攻撃でディスカバリーは明後日の方向に弾き飛ばされた。それを見たサノス達は歓声を上げた。
　だがサノスはある事を完全に忘れていた。度重なる損害のせいでサンクチュアリⅡの船体の耐久力が致命的なまでに落ちていた事に。そこにパワー・ストーンから発せられた強力な衝撃波が何度も加わった結果、遂にサンクチュアリⅡを構成する船体が崩れ始めた。慌てたサノスは自身がいる船体中央部をストーンの力で守ろうとした。サノスにとって残念な事に船体の崩壊スピードが想定より早く、またタイタンの重力圏に捕まり大気圏への突入コースに入った事もあり、サンクチュアリⅡはあちこちから火を吹きながら壊れていく。
　そこに追い打ちをかけるかのようにディスカバリーが猛攻撃を仕掛ける。大気圏突入時の熱、そしてディスカバリーからの攻撃で船体は完全に崩壊した。船体中央部はかろうじて原型をとどめていたものの、残りの部分は細かい破片となって地上に落ちていく。不思議な事にディスカバリーは壊れた船体の残骸も攻撃していたが、現在進行

系でフリーフォール中のサノス達はそんな事を気にする暇はなかった。
　最終的にサンクチュアリⅡの成れの果てが墜落したのは、４つのインフィニティ・ストーンの反応が確認された場所から僅か5キロメートル程離れた場所だった。パワー・ストーンを全力で使ったが船体は中央部を残して他は崩壊。その中央部ですら崩れかけのモニュメントと化していた。内部は更に凄惨な状態になっており、サノスと直属の部下４人は生きていたが、アウトライダーやチタウリは墜落の衝撃でほとんどが死亡。残存兵力は僅か６００程であった。
　その様子を姿を隠しながら静かに偵察するディスカバリー。情報はデータを経由してヒーロー達に送られた。

『作戦の第1段階を完了しました。敵艦は完全に無力化。６００程の生命反応を検出、サノスも生きています』
「よくやったデータ。引き続き偵察を続行。念の為マンティコアの投下準備を。それと…あのサイボーグもな」
『了解しました、艦長』

８：正々堂々戦おう（棒

「みんな聞いてくれ」
　アベンジャーズのリーダーであり、タイタン地上戦における戦闘責任者のスティーブは全員を前に口を開いた。
「ジムとディスカバリーのお陰で敵戦力をかなり削る事が出来た。観測データによれば残っている敵は約６００程。大多数がニューヨークで戦ったチタウリや、遺伝子改造研究で生み出されたアウトライダーだ。問題はサノスとその直属の部下だ」
　データによると直属の部下は４人。まずサノスの副官であり金のハルバードを操る戦士、コーヴァス・グレイヴ。ストレンジと同レベルの戦闘力を持つ闇の魔術師、エボニー・マウ。サノスの軍勢で最も強力な戦士であり、白兵戦のエキスパートでもあるプロキシマ・ミッドナイト。そしてハルク並に大きな体と力を持つカル・オブシディアン。
「サノスは僕とトニー、ソー、ロキで対処する。ナターシャ、ジム、ヘイムダルはグレイヴを、ブルース、ローディ、サムはオブシディアンを、ピーター、ガモーラ、ネビュラはミッドナイトを、そしてドラックス、グルート、ロケット、マンティスはマウを相手にしてくれ。当然チタウリ達も相手にしないといけないから難しいとは思うがやるしかない」
「わかってるさ、スティーブ。どんな手段を使ってでも勝つぞ」
「そうだな。でもジム、マンティコアは最終手段だ。本当にやばくなったら使うようにしてくれ、いいな？」
「もちろんさ。もう１つの戦闘用サイボーグもあるからなんとかなると思うぞ」
　正直そのサイボーグがどんなものか気になったが、マンティコアを超えるようなサイボーグは流石に存在しないだろうとスティーブは考えた。
「うん。直属の部下を倒した後はチタウリ達の掃討、そして僕達に協力してくれ。それとこれが重要だが、偽ストーンが入っている箱を守

るフリをしながら戦う必要がある。だから基本的には防衛戦を展開する。敵が少なくなってきた、または偽ストーンが奪われた後は好きに暴れてくれ」
「了解！」
『データより全メンバーへ、敵部隊が南から接近中』
　インカムから聞こえてきたデータの声とほぼ同時に、丘の向こうからサノス達が走ってくるのが見えた。見た感じかなり怒っている様子だ。するとジムがチェストリグから何かの装置を取り出して弄り始めた。
「ジム？」
「ちょっとした足止めをしようかなと。スティーブ、これ押してみて」
　渡されたのはどこからどう見ても起爆装置だった。スティーブは少しだけ躊躇したが装置を受け取ってスイッチを入れた。
　その瞬間サノス達の足元が一斉に破裂した。ジムがこっそり仕掛けておいた地雷が起爆したのだ。遠隔操作によって起爆した対車両指向性散弾地雷はチタウリやアウトライダー、そしてサノスと直属の部下を襲った。至近距離からの散弾を防ぐ事ができる訳もなく、チタウリやアウトライダーは次々と肉片と化した。しかしサノスとその部下には傷１つ付かない。彼らは足を止めることなくこちらに近づいてくる。
「まこんなもんか。１００ちょいは削れたかな？」
「爆弾…いや地雷か!?」
「ああ。嫌いか？」
「そりゃまあ…」
　少なくともスティーブの知り合いに地雷が好きな人間はいない。
「良かった。もちろん俺も地雷は好きじゃない。だが威力は十分だし、心理的効果も絶大、そして何より公平な兵器だ」
「公平？」
　スティーブは兵器に公平もクソもあるのかと思ったが、ジムは顔をため息をつきながら起爆装置をチェストリグに戻した。
「元々地雷という兵器は軍人も民間人も家畜も、男も女も子供も老人

も、それどころか敵も味方も区別しない。地面に埋められた途端、仕掛けた者の制御も受け付けなくなって殺傷力だけが独り歩きしていく。しかも低コストだ。俺の世界でも地雷の完全な除去は２２世紀になるまで終わらなかった。人間の愚かさを象徴する兵器だと思わないか？まあスマート地雷が開発された事により地雷の非人道性は少し減ったがね」

ジムの世界でもそんなに時間がかかったのか…確かに世界には今も地雷で苦しむ人々が数多く存在する。カンボジアや中東なんかが有名だな。この戦いが終わったらトニーに地雷の処理について聞いてみるか。

そんな事を考えていたら走ってきたサノス達が突然足を止めた。僕達との距離は大体１００メートルくらい離れている。

「お前らが我らの敵か。ようやくまともに戦える時が来た。小汚い戦法を使いやがって…だがこれで終わりだ。お前らを殺してストーンを手に入れる。邪魔をするな！」

反射的にみんなでジムを見てしまったが、本人は全く気にしていない。

「俺はいつもまともに戦ってきたぞ。勝てないお前が弱いだけだ。それに卑怯だろうが何だろうが、ルールの範囲内であれば何でもやる、それが俺の流儀なんでね。そもそもパワー・ストーンを手に入れる為に惑星１つを壊滅させるようなキチガイテロリストハゲに汚いとか言われたくないんだが？」

「ぶっ！」

そこで笑っちゃうかネビュラ…僕もなんか言っておくか。

「サノス、お前の好きにはさせない。ここにいるのは全宇宙から集まったヒーロー達だ。お前の野望は今日ここで終わりにする。宇宙を守る為にも引く訳にはいかない」

「ほざけ！あのイカれた性能の宇宙船さえなければ、お前らはただの雑兵だ！数で勝っている我らに勝てると思っているのか？」

するとジムが笑いながらサノスに言った、

「もちろん勝てるさ。今日の夜には地球に帰って祝勝会の予定なん

だ。みんなでバーベキューするから早めにお前らテロリスト共を殲滅しないとな」
「ふざけるな！何故そう言い切れる!?」
「事実だからさ。まずガーディアンズのみんなはパワー・ストーンを巡る騒動でロナン・ジ・アキューザーを倒してる。そしてアベンジャーズはスペース・ストーンを巡る騒動でロキとチタウリを倒した。どっちもお前と手を組んでいたよな？何が言いたいかと言うと、ここにいる俺以外のヒーロー達は世界を救った実績があるという事だ。今回もお前らを叩きのめして世界を救うさ。二度あることは三度あるって言うだろ？で、お前は今まで何をしてきた？散々色々な惑星を滅ぼして、とんでもない数の民間人を殺して、手に入れたのはパワー・ストーン１つだけ。とてもじゃないが一生ついていきたいボス、ってやつじゃないな」
「くっ…だがお前は技術力がなければただの人間じゃないか！」
「うん、その通りだ」
　ジムは何言ってんだこいつ、みたいな目でサノスを見つめた。
「俺はちょっと特殊でな。この世界ではなく、別世界から来た人間なんだ。ヒーロー達のような特殊能力がある訳じゃないし、そもそもヒーローなんかじゃなくて唯の軍人だ。俺が生きていたのは３２世紀前半の世界だ。当然技術力はここより上だから、お前らが勝てないのは全く自然だ。分かりやすい例で言うとだな…」
　ジムは真上を飛ぶディスカバリーを指差す。
「お前らが傷１つ付ける事が出来なかったあの船。実は戦闘艦じゃなくて科学実験艦なんだ。お前らが乗っていた図体がでかいだけの戦艦はただの科学実験艦に負けたんだよ。この時点で勝てない事に気付いて欲しいな。あと俺の世界にはあれよりデカくて速くてめっちゃ強い船がゴロゴロいる。それこそ数秒で惑星上のあらゆる生物を殺害できる兵器や一撃で星系を丸ごと吹っ飛ばせる魚雷をたくさん搭載した船が。まあ後者の兵器はあれにも積んでるけど」
「……は？」
　サノスはもちろん僕達も全員理解が出来ていない。前者はあり得

ないレベルの平気だし、後者も色々とおかしい。惑星ではなく星系だって？星系って恒星の軌道を周回する天体の一群の名称だったかな？太陽系も星系だよな？それを一撃…マジでやばすぎるだろ。てかディスカバリーにも搭載されてるのか。
「本当なら戦いの時に手加減とかはしたくないんだ。俺は職業軍人だから手を抜いて戦うなんて教わっていないし、相手がプロの軍人だったら失礼だからな。だがお前らはただのテロリスト、鼻つまみ者、犯罪者だ。そんな卑怯で、姑息な、弱い連中に本気を出すのは…ちょっとオーバーキルになっちゃうからかわいそうでな。でも俺も鬼じゃない。できる限り苦しませずに殺してやる。だから…」
　そう言ってジムはライフル型フェイザーを構えた。
「お前らは今日ここで死ぬ。お前らが一人残らず暗闇の中で死ぬ事で、罪なき人々が光の中で生きられる。それを受け入れろ」
「黙れ!!」
　死ぬのを受け入れろって言われて、はいわかりましたって言える人はそうそういないだろ…しかも味方からならまだしも敵から言われてるし…そろそろ始めようか。
「行くぞ！アベンジャーズ、アッセンブル！」

９：タイタン地上戦

「ナターシャ、ヘイムダル！俺が周りの雑魚を蹴散らす！３０秒でいいから奴の相手を頼む！」
「承知した！」
「わかったわ！」
　とりま周りにうじゃうじゃいるチタウリやアウトライダー達をフェイザーで薙ぎ払う。一瞬で蒸発するのマジやべえな。パワー・セルはしばらく持ちそうだからなんとかうまくいくかな？チタウリ達も懸命に反撃してくるけど格闘予測ソフトウェアが敵の攻撃を予測してくれるから全部避ける事が出来るし、それと同時に敵の行動パターンや弱点等を計算して視界に表示してくれる。だから効率よく敵を蹴散らせる。こっちだけズルして無敵モードだもんな。全くチート様々だぜ。
　その間にナターシャとヘイムダルがグレイヴと激しくやりあっている。ヘイムダルはアスガルドの番人として数々の戦いを生き抜いてきた立派な戦士だ。そんな彼でもグレイヴの前では防御に徹するしかないみたい。でも彼は1人で戦っている訳じゃない。
「下がって！」
　ナターシャが叫びながらショックグレネードを投擲。反応が遅れたグレイヴはショックグレネードの電撃にやられて身動きが取れない。そのタイミングを見逃さず、ナターシャはＮＶ４でグレイヴにマガジン1個分の弾丸を叩き込んだ。グレイヴの金ピカボディアーマーがほとんどの弾丸を無力化したが、1発の弾丸がグレイヴの左目を消し飛ばした。
「ぐっ!?」
「くらえ！」
　そしてグレネードの効果が切れると同時にヘイムダルがグレイヴに斬りかかる。ヘイムダルの剣がグレイヴの体を切り裂くも、その傷は浅いものだった。お返しと言わんばかりにグレイヴは反撃を開始。傷を負っているのにヘイムダルより強いのは何で？しかも動きが早

すぎてナターシャが援護できていないな。
「ナターシャ、雑魚は粗方始末したから周囲の警戒を頼む。俺がヘイムダルを援護する！」
「お願い！」
　フェイザーをしまいつつ取り出すのはもちろんダークセーバー。ヘイムダルを蹴り飛ばして刺し殺そうとしていたグレイヴに黒いプラズマブレードで襲いかかる。グレイヴはすぐに気付いてブレードを受け止めるが、極めて高熱のプラズマブレードのせいでグレイヴのハルバードが加熱されて真っ赤になっていく。
「何だその武器は!?」
「ちょっとアツアツなだけだよ！」
　そのままグレイヴと激しい戦いに。左目が見えないのにグレイヴはなかなか強い。でも俺には格闘予測ソフトウェアがある。グレイヴの攻撃の全てがスローモーションに見えるし、次の攻撃の完全な予測が出来る為、ダークセーバーで全てを防ぎつつ敵を追い詰めていく。
「クソっ！何故お前達は邪魔をする!?宇宙を救済する為にサノスや我々は立ち上がったのだ！それを邪魔するなど言語道断だ！」
「馬鹿な事言うな！宇宙の資源に限りがあるのは理解できる！だが全宇宙の生命体の半分を消し去ってバランスを取るなんて頭がイカれてる！それを救済だとか言ってるお前ら全員狂ってるよ！」
「何だと!?この野郎！」
　グレイヴに腹を蹴っ飛ばされて吹き飛ぶけど想定内。一度相手から離れるのが目的だ。
「ヘイムダル、一緒に行こう」
「ああ、行くぞ！」
　イドリス・エルバと肩を並べて戦えるとかマジで興奮するわ。それはともかく俺はチェストリグからダークセーバーをもう1つ取り出して二刀流でいく事にした。普通の剣と違ってライトセーバーやダークセーバーは手元に伝わる感覚が柄の重みしかない。だから取り扱いに注意しないと自分の手足をぶった切る事になる。

それは置いといてグレイヴは一気に劣勢になった。攻撃スピードが早い俺と、スピードは若干劣るものの攻撃が強いヘイムダルから激しい攻撃を受けているからだ。しかも左目を失っているせいでグレイヴは俺達の攻撃をひたすら受け流したり避けたりを繰り返す。そうしていると徐々に攻撃を受けるようになり、グレイヴの体に傷が増えていった。

そろそろ止めを刺そうかね。まず俺が前に出て2本のダークセーバーを上から振り下ろす。当然グレイヴはハルバードを水平に構えてダークセーバーを受け止める。が、ただでさえ高熱のプラズマブレードを2本も受け止めた結果、ハルバード全体が真っ赤になりグレイヴの両手が焦げ始めた。

苦悶の表情を浮かべながら耐えるグレイヴだったが、彼の忍耐力よりハルバードの耐久力の方が先に音を上げた。ハルバードは中心部から真っ二つになり、グレイヴは勢いで後ろに吹き飛ぶ。そのタイミングで俺はその場でしゃがむ。するとヘイムダルが俺の上を飛んでいき、武器を失い体勢を崩したグレイヴの胸に剣を深々と突き刺した。

「ごはっ!?」

「終わりだ、グレイヴ。お前達は宇宙の救済者なんかじゃない。ただの犯罪者として生を終えろ」

「ば…か、な…」

ヘイムダルが剣を引き抜くとグレイヴの胸からどんどん血が流れていく。どう見ても助からない傷だ。しかしグレイヴはまだ諦めていない。折れたハルバードを掴んでヘイムダルに斬りかかろうとした。しかしアスガルド最強の番人であったヘイムダルにとってその攻撃を察知するのは簡単だった。素早く振り返りつつヘイムダルは剣でグレイヴの首を刎ねた。

グレイヴの首が飛んでいくのをミッドナイトは戦いの最中に見てしまった。なんと彼女とグレイヴは夫婦だったのだ。グレイヴは戦

いの前に、
『この戦いが終わり宇宙の救済が完了したら、1週間ぐらい休みを貰ってバカンスにでも行かないか？ちょっと早いけど結婚記念日も近いしな。美味しいものでも食べてのんびり休もう』
　という話をしていた。ミッドナイトは知らなかったが、これはいわゆる死亡フラグというやつだった。そして見事フラグは成立してしまった。
「おのれえええ!!!」
　愛する夫を喪ったミッドナイトは怒りに身を任せて激しい攻勢に出た。ピーター、ガモーラ、ネビュラは避けるのに必死だ。電撃を発する三又の槍で3人を黒焦げにしようとするも、回避されたりシールドで弾かれたりした。カークのシールド発生装置は極めて高性能だったからだ。
「シールドなんて卑怯な物を使いやがって！」
「うるせえ！使えるものを使って何が悪い！」
　ピーターが愛用のクアッドブラスターを乱射しながらミッドナイトを牽制する。その間にガモーラをネビュラが一気に距離を詰めて白兵戦に持ち込む。本来ならミッドナイトは白兵戦で負けるような人物ではない。しかし夫の死を目の当たりにして彼女は冷静ではいられなくなっていた。
「コーヴァスの仇!!」
　ミッドナイトは2人に槍で素早い攻撃を繰り返す。だがガモーラは愛剣のゴッドスレイヤーでその攻撃を受け流し、ネビュラは電気ショックスタッフで反撃する。2人の姉妹は完璧なコンビネーションでミッドナイトの攻撃を跳ね除け、それどころか押し返し始めた。
「今がチャンスよ！」
「わかってる！」
　まずネビュラが電気ショックスタッフでミッドナイトを後ろに弾き飛ばす。そして素早く腰のホルスターから愛用の電気ショックブラスターを抜いて乱射。数発は槍で防いだが、残りはミッドナイトに命中した。それでも彼女は倒れない。発射されるエネルギーボルト

は、一発で並の種族を射殺できるほどの威力を有しているのだが、ミッドナイトは気合いと怒りで耐えきった。
　しかし動きが止まったタイミングをガモーラは見逃さない。ゴッドスレイヤーを2本の刃に分割させ、長剣でミッドナイトの左腕を、短剣で脇腹を切り裂いた。それと同時にピーターがクアッドブラスターを発射、ミッドナイトは5メートル以上後ろに吹っ飛んだ。
「ぐうううう!!!!」
　だがミッドナイトはまだ諦めていない。左腕は切れかかっているし、脇腹からも大量出血、そして胴体はブラスターのせいで複数の穴が空いている。普通なら間違いなく死んでいる筈なのだが、ミッドナイトは槍を使って何とか立ち上がる。そして左腕をチラッと見た彼女は槍を使って無言で左腕を切り落とした。
「嘘だろ…なんでまだ動けるんだ？」
　ピーターが思わず呟くのも無理はない。彼女は左腕と脇腹を槍から出した電撃で焼いて塞いだ。ボロボロの鎧を脱ぎ捨て、ボディーアーマーから複数の注射器を取り出して首に突き刺す。何を打ったのかは不明だがミッドナイトはブルブル痙攣し始めた。それを見たガモーラとネビュラはドン引きしている。
「あれは鎮痛剤か？それとも興奮剤？」
「なんかヤバそうね…でもあの傷だから長くはないはず。畳み掛けましょう」
　ところがミッドナイトはとんでもなく素早い動きでガモーラに接近し、一瞬でゴッドスレイヤーを砕いた上、腹に強烈なキックをお見舞いした。シールドで守られているがそれでも凄まじい衝撃だった。そして驚くネビュラに槍を突き立てようとするが、ピーターがブラスターを乱射した為、ミッドナイトは後ろに下がった。
「なんなのあれ!?」
「あんな薬見たことないわ…」
　ピーター達は知らなかったが、ミッドナイトが打った薬はとある惑星でサノスが回収した植物をベースに開発された戦闘用興奮剤と鎮痛剤のミックスだった。どちらも効果は絶大であり、興奮剤は思考ス

ピードを高め、アドレナリンが常時出っぱなしになる。そして鎮痛剤は戦闘で生じる痛みを完全に遮断してくれる。副作用として過剰摂取すると10分前後で確実に死んでしまうというものがある。
しかし愛する夫を喪ったミッドナイトに躊躇はなかった。コーヴァスはもう帰ってこない。10分以内にこいつらを皆殺しにして、他の連中も殺せば問題ない。彼女はそう考えて規定量の3倍の注射を打ったのだ。もう彼女に恐れるものなどない。
「もういい。言葉など既に意味をなさない。死ね。お前達に出来るのはそれだけだ」
ピーターはブラスターを構えるが、ミッドナイトが急接近してきたのでジェットブーツで逃げようとした。しかし彼女は槍の電撃でピーターのブーツをピンポイントで破壊した。シールドが地面と干渉してうまく機能しなかったのだ。右足のブーツが壊れたせいでピーターは飛行を制御できなくなり、くるくる回りながら明後日の方向に飛んでいった。
ガモーラが持っている武器はスイッチブレードのみ。これだけではミッドナイトに対抗できない。ネビュラは自身のブラスターをガモーラに投げ、電気ショックスタッフでミッドナイトと対峙した。幾ら薬で強化されているとはいえ、左腕を失い血液も大量に流れている。しばらく耐えれば間違いなくミッドナイトは死ぬだろう。
ミッドナイトは攻撃の手を緩めない。大きな傷は焼いて塞いだが激しい戦闘で徐々に傷口から出血している。それにピーターのブラスターは肺を貫通しているらしく、呼吸がうまく出来ていない。それでも薬のせいで痛みを感じる事はなく、彼女の脳はとにかく眼前の敵を殺せと叫んでいた。
体のあちこちから血を流し、右手だけで槍を振り回し、しかも口から血の泡を吹きながら襲いかかってくるミッドナイトは恐怖でしかなかった。後日ガモーラは夢にミッドナイトが出てきて寝小便をしかけたとか。
それに臆する事なくネビュラは分割したスタッフでミッドナイトを攻撃する。横からガモーラがブラスターを放つ。2人の攻撃を

ミッドナイトは完全に防ぐ事は出来なかった。更にそこに文字通り飛んできたのはピーターのジェットブーツだった。片方だけじゃ役に立たないと判断したピーターが、エンジンを起動したままミッドナイトに投げつけたのだ。

ミッドナイトはガモーラ・ネビュラを蹴り飛ばしてからブーツを槍で破壊したが、ブーツ内部のエンジン燃料やらが爆発したせいで、近くの瓦礫まで爆風で飛ばされた。すぐに槍を探したが手元にない。視線を上げるとガモーラがミッドナイトの槍を持っていた。

「これ、あなたのよね？返してあげる！」

ガモーラは全力で槍を投擲。白兵戦最強の戦士と言えど、飛んでくる槍を素手でどうにか出来る訳では無い。槍はミッドナイトの胸を貫き、背後の瓦礫に縫い付けられた。それを見たピーターが叫ぶ。

「今度こそやったか!?」

ミッドナイトは自分を貫く槍をしばらく見つめていたが、慌てる様子を見せずに槍を掴んで抜き始めた。ガモーラが投げた槍はミッドナイトの心臓を破壊してなかったのだ。ゆっくりと槍を引き抜き再び立ち上がるミッドナイト。そんな彼女を3人は呆然と見つめていた。

だがそこで薬の副作用が現れた。槍を引く抜く事には成功したがミッドナイトの体は限界を迎えた。両膝から前のめりに倒れた彼女は、頭を上げて何かを見ながらゆっくりと右手を伸ばしながら息絶える。右手の先にはコーヴァス・グレイヴの死体があった。

いやーグレイヴは強敵でしたね！ピーター達もミッドナイト倒したみたいだし、オブシディアンとマウも既に死んでるね。雑魚のチタウリやアウトライダーも全滅だから全員でサノスをボコボコにしてやんよ！